

坑夫

夏目漱石

青空文庫

さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよつぽど長いもんだ。いつまで行つても松ばかり生えていていっこう要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で発展してくれなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つたまま松と睨めつ子こをしている方が増した。

東京を立つたのは昨夕ゆうべの九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ歩いて来たら草臥くたびれて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇くらやみの神樂堂かぐらどうへ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからべつ平押しひらおしにここまでやって来たようなものの、こうやたらに

松ばかり並んでいては歩く精せいがない。

足はだいぶ重くなっている。膨ふくら脛はぎに小さい鉄てつの才さい槌づちを縛しばり附けたように足搔あがきに骨が折れる。裕あわせの尻は無む論端折はしおつてある。その上洋袴ズボンした下さえ穿はいていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじや所詮しよせん敵かなわない。

掛茶屋がある。葭よし簣すずの影から見ると粘ねば土つちのへつついに、錆さびた茶ちや釜がまが掛かっている。床しよ几うぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、二三足草鞋わらじがぶら下がって、裨はん天てんだか、どてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の裨天とどてらの中ちゆうを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこ

の脂やにで黒くなつた歯を、厚くちびるい唇の間から出して笑つてゐる。これはと少し気味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになつた。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相でに出つ喰くわしたものと見える。ともかく向うが真面目になつたのでようやく安心した。安心したと思う間まもなくまた気味が悪くなつた。男は真面目になつた顔を真面目な場所に据すえたまま、白眼ろめの運動が気に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額ひたいとじりじり頭の上へ登つて行く。烏打帽ひさしの廂またを跨いで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降さがつて来た。今度は顔を素通りにして胸から臍へそのあたりまで来るとちよつと留まつた。臍の

所にはがまぐち墓口がある。三十二錢這入はいつてゐる。白い眼は久留米くるめがすり餅の上からこの墓口をねら覗つたまま、木綿もめんの兵児帯へこおびを乗り越してやつとまたぐら股倉へ出た。股倉から下にあるものは空脛からすねばかりだ。いくら見たつて、見られるようなものは食くツ附ついちやいない。ただ不断より少々重たくなつてゐる。白い眼はその重たくなつてゐる所を、わざつと、じりじり見て、とうとう親指あとの痕が黒くついたま俎な下な駄いたげたの台まで降くだつて行つた。

こう書くと、何だか、長く一ひとつ所に立たつていて、さあ御覽下さいと云わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになつたから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、この

つもりが少々おぼつか覺束ねじなかつたと見えて、自分が親指にまむしこしらを拵まぎわえて、俎下駄ねじを振まぎわる間際には、もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものである。じりじり見るんだから定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違まちがい。じりじりには相違ない、どこまでも落ちついてゐる。がそれで滅めつ法ぼう早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてゐる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩ゆるくり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだらうか。さんざつ腹冷ばみやかされて、さあ御歸り、用はないからと云う段になつて、もう御ご免蒙めんこうぶりますと立ち上つたようなものだ。こつちは馬鹿氣ばかげてゐる。あつちあつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立った。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしまった。と思うとまた足が重くなつた。——この足だもの。何しろ鉄の才さいづち槌を双方の足へ縛りしば附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満まんざら更持前の半間はんまからばかり来たとも云えない。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしていられる身分じやない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家うちへ戻り了りょう簡けんはない。東京にさえ居おり切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく気はない。休うしろむと後うしろから追おつ掛かけられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の中を切きつて廻まつた日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩

くのである。けれども別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損そくなつた写真のように曇っている。しかもこの曇つたものが、いつ晴れると云う的あてもなく、ただ漠ぼくぜ然んと際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いても走かけても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を抜出すために歩くのではない。抜け出そうとしたって抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立つた昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松が厭あ

きるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のために歩いているんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多にない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇つた世界の中へだんだん深く潜り込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代が違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆が違ふ。そのくせ暖かな朗かな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭から呼びたくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分はふらふら迷い

込むのだから心細い。

この曇った世界が曇ったなりはびこつて、定業じようごうの尽きるま
で行く手を塞ふさいでいてはたまらない。留とどまつた片足を不安の念に
駆かられて一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏み込んだ訳わけになる。
不安に追い懸かけられ、不安に引ひつ張はられて、やむを得ず動ういては、
いくら歩いてもいくら歩いても埒うちが明あくはずがない。生しょう涯がい片
づかない不安の中を歩いて行くんだ。とても事に曇ったものが、
いつそだんだん暗くなつてくれればいい。暗くなつた所をまた暗
い方へと踏み出して行いったら、遠とほからず世界が闇やみになつて、自分
の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なもの
だ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなつてくれず、と云つて暗くもなつてくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩こめている。これでは生甲斐いきががない、さればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。あと後からぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からどきんともしない。どきんとでもぞつとでも勝手にするが善いいと云うくらいに、不安の念が胸一杯

に広がっていたんだらう。その上いつその事を断行するのが今が
 今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日あしたになるか明後あさ
つて日になるか、ことに由よつたら一週間も掛るか、まかり間違えば無
 期限に延ばしても差さ支しつかえつかえ支しないないと高たかを括くくつていたせいかも知れな
 い。華厳けげんの瀑たきにしても浅間あさまの噴火ふんか口こうにしても道程みちのりはまだだい
 ぶあるくらいは知らぬ間まに感じていたんだらう。行き着いていよ
 いよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがって
 いつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇つ
 た世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度において
 免まぬれる望かがあると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこの
 くらいの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理

状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責めてもの慰藉と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくつちやならないと思ひながら、雲を攫むような料簡で歩いて来ると、後からおいおい呼ぶものがある。どんなに魂がうろついている時でも呼ばれて見ると性根があるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。

応ずるためと云う意識さえ持たなかつたのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさっきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の袷はんでん天とどてらの合あいの子こが出て、脂やにだらけの齒をあらわに曝さらしながらしきりに自分を呼んでいる。

昨ゆうべ夕東京を立つてから、まだ人間に口を利きいた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも予期していなかつた。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸かけられたのだから——粗末な齒はな並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判はつきり然すると共に、自分の足はい

つの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装も動作もあんまり気に入らな
ない。ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何とな
く嫌悪の念が胸の裡に萌し掛けたくらいである。それがものの二
十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、
打つて変つた一種の温味あたたかみを帯びた心持で後あと歸りをしたのは
なぜだか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つ
ていた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反
対の見当けんとうに取つて返す事になる。暗い所から一歩立ち退いた
意味になる。ところがこの立退たちのかきが何となく嬉うれしかった。その後
いろいろ經驗をして見たが、こんな矛盾は到いたる所に転ころがっている。

けっして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらえるのと云って得意がっている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分ったような事を云つてるが、ありや、みんな嘘うそをかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがつてるんだらう。本当の事を云うと性格なんて纏まとつたものはありやしない。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたつて、小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏まとめにくいものだ。神さまでも手古てこずるくらい纏まとまらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まとまらなく出来上つてるから、他人ひとも自分同様し締しまりのない人間に違ないと早合はやがてん点てんをしているのかも知れ

ない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉縞めくらじまの傍そばまで行くと、どてらはさも馴なれ馴れしい声で

「若い衆しゅさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額ぬかのあたりを見詰めている。自分は好加減いいかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、

「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどてらから若い衆さんなんて云われて快よく返辞へんじをする自分じゃない。返辞へんじをするにしてもうんとか何だとかで済すしたろうと思う。ところがこの時に

限つて、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような気持がした。別に利害の関係からしてわざと腰を低く出たんじや、けつしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見做みなしたような語気で、

「御前おまえさん、働く了りようけん 簡かんはないかね」

と云つた。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟していたんだから、藪やぶから棒ぼうに働く了簡かんはないかねと聞かされた時には、何と答えて善いいか、さつぱり訳わけが分らずに、空脛からすねを突つ張つたまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺ながめていた。

「御前さん、働く了簡かんはないかね。どうせ働かなくつちやならな

いんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹も、どうか、こうか、受け答の出来るくらいに眼前の事況じきようを会得えとくするようになった。

「働いても善いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやすくも口に出て来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やっと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通っておる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く気でした。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫びんぜん然な感がある。

と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほどさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背か^{そむ}ねばならぬほどに自分は薄弱なものであったと云う事をも証拠立てている。手短^{てみじか}に云うと、自分は暗い所へ行く氣でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引つかかりが出来れば、得^えたり賢^{かしこ}しと普通の娑婆^{しやば}に留^えまる了簡^{りょうかん}なんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引つかかってくれたんで、何の気なしに足が後^{うしろむ}向きに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野に

するかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖こわくなつてぞつとしたに違ない。それほどの娑婆しやば気が、戻り掛ける途端とたんにもう萌きざしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようにどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆気が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末などてらだが非常に旨うまく自分の心理状態を利用した勧誘である。だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚さめて見れば、自分はいつか娑婆の人間

になつてゐる。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくつちや駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑り出してしまつた。するとどてらはそうだろうそのはずさと言うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもつともだと首肯した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」と自分はここで再び聞き直して見た。

「大變儲かるんだが、やって見る気はあるかい。儲かる事は受けあ合なんだ」

どてらは上機嫌の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待

っている。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌あいきょうにもなんにもなつちやいない。元がんらい来笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやって見ましょう」

と受けてしまった。

「やって見る？ そいつあ結構だ。君儲もうかるよ」

「そんなに儲けなくつても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだな

んて云われちや困るが。きつとやるだろうね」

どてらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかつた。云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやつて退ける^のが、万一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずにやる気ですと云つたんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だつて、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区別はありやしない。すべてがだらうに変化してしまう。無責任だと云われるかも知れ

ないが本当だから仕方がない。これからさきも危あやしいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略話ほぼが纏まとまったものと呑のみ込んで

「じゃ、まあ御お這入はいり。緩ゆっくり御茶でも呑のんで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入つてどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神かみさんが妙におな臭いのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減つて来た。減つて来たのか、減つていたのに気がついたのか分らない。墓がまぐち口には三十二銭這入っている、何か食おうかしらと考考えていると

「君、煙草たばこを呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角かどが裂けてるのは仕方がないが、何だか薄穢うすぎたなく垢あかづいた上に、びしやりと押し潰つぶされて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてるように思われる。袖そでのないどてらだから、入れ所に窮きつして腹掛はらがけの隠かくしへでも振ねじ込んで置くものと見える。「ありがたい、たくさんです」

と断ると、どてらは別に失望ていの体もなく、自分でかたまつたうちの一本を、爪つめあか垢あかのたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺しわだらけになつて、太刀たちのように反そつている。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻けむから煙けむが出る。際きわどいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年いくつになんなさる」

どてらは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりするようだが、何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲もうかるときには君になって、不断の時には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になつてい
るらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向うしろむきになつて盆を拭ふきながら云つた。
後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独ひとり言ごとだか

どてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なんだか分らなかつた。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じや若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくつちやならないような語気である。自分
はだまって床しょうぎ几を離れた。

正面に駄菓子だがしを載せる台があつて、縁ふちの毀れた菓子箱あげまの傍そばに、

大きな皿がある。上に青い布巾ふきんがかかつている下から、丸い揚あげま

饅頭まんじゅうが食はみ出している。自分はこの饅頭が喰くいたくなつたか

ら、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつ

ら饅頭まんじゅうの皿のぞを覗のぞき込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれ

が皿の前で自分が留いまるや否いなや足音にパツと四方に散つたんで、

おやと思ひながら、氣を落ちつけて少しく揚饅頭を物色している
と、散らばった蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申
し合せたように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色い
油切った皮の上に、黒いぽちぽちがでたらめ出鱈目にできる。手を出そう
かなと思う矢先へもつて来て、急に黒いはんでん斑点が、せいや晴夜のせいしゅ星
宿くのごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易へきえきしてしまつ
て、ぼんやり皿を見下みおろしていた。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日おととい揚げたばかり
だから」

かみさんは、いつの間まにか盆を拭いてしまつて、菓子台の向むこう
側がわに立っている。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。する

と神さんは何と思つたか、いきなり、節太ふしぶとの手を皿の上に翳かぎして、

「まあ、大変な蠅だ事」

と云いながら、翳した手をたて豎に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸はしで、饅頭をぽんぽんと七つほど挟はさみ込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床しょうぎ几の上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ帰つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を

眺^{なが}めながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云つて見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴^{やつ}を取つて頬張^{ほおば}つちまつた。

唇^{くちびる}の厚い口をもごつかせているところを観察すると、満^{まん}更^{ぎやう}でも

なさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗^{きれい}なのを摘^{つま}み出して、あんぐりやった。油の味が舌の上

へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦い餡にがあんが卒然として味覚を冒おかして来た。しかしこの際だから別にしまったとも思わなかった。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑ふへ呑のみ下くだしてしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大変速力が早い。そうして食つてる間は口を利きかない。働く事も儲もうかる事もまるで忘れていらしい。したがって七つの饅頭は呼吸いきを二三度するうちに無くなつてしまつた。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬またたく間まにどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡しりごみをするほどの汚きたならしいものでも、一度皮切りを

やると、あとはそれほど神経に障さわらずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐ちんぷの真理になつてしまつたが、その時は饅頭まんじゅうを食いながら少々呆あきれたくらい後あとが食いたくなつた。それに腹は減つてゐる。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた饅頭をぱくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、神経などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのんで饅頭の御代おかわりを貰もらつた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿しやうぎが床几の上に乘るや否や、自分の方でまず一つ頬張ほおばつた。するとどてらも、「や、すまない」とも何とも云わずに、だまつて一つ頬張つ

た。次に自分がまた一つ頬張る。次にどてらがまた一つ頬張る。
互^{たがいちがい}違^いに頬張りつ子をして六つ目まで来た時、たった一つ残つた。これが幸い自分の番に当たっているので、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張ってしまった。それからまた御代りを貰った。

「君だ**いぶ**やるね」

とどてらが云った。自分は**だいぶ**やる気も何もなかったが、云われて見ると**だいぶ**やるに違**な**い。しかしこれは初手^{しよて}にどてらの方で自分の食いたくないものを、むしゃむしゃ食**つて**見せて、自分の食慾を誘致した結果^{あずか}が与**つて**力あるようだ。ところがどてらの方では全然こつちの責任で**だいぶ**や**つて**るような口気^{こうき}であった。

だから自分は何だかどてらに對して弁解して見たい気がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫むつかようにどてらにも責任があるんだろうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙っていた。すると

「君、揚饅頭がよつぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日おととい揚げた砂だらけの

蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌だきらいとは無論云われない。だから今度も黙っていた。

そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような気

がした。そこでますます黙ってしまった。黙って聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云つてる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見^{けん}当^うがつかなかった。とにかく饅頭はどうでも構わないから、肝^{かん}心^{じん}の労働問題を聞^き糾^きして見ようと思つて、

「先刻^{さつき}の御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を食わなくつちやならない身分なんです、いったいどんな事をやるんですか」

とこつちから口を切つて見た。どてらは正面の菓子台を眺^{なが}めていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲^{もう}かるんだぜ。嘘^{うそ}じゃない、本当に儲かる話なんだからは

非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりよばにして、しきりに儲けさせたがつて
いる。こつちへ向き直つて、自分を誘い出つとそうと力める顔つきを
見ると、頬骨の下が自然じねんと落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎あごの
枠わくで角張かくばつている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下
から弓形ゆみなりにでき上つた皺しわが深く映つている。この様子を見た自
分は何となく儲けるもうのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いいです。しかし働く事は働く
です。神聖な労働なら何でもやるです」

どてらの頬あたりの辺には、はてなど云う景色けしきがちよつと見えたが、
やがて、かの弓形ゆみなりの皺を左右に開いて、脂やにだらけの齒を遠慮な

く剥き出して、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考え
るとどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかつたらしい。い
やしくも人間たるものが かねもうけ 金 儲 の意味さえ知らないで、こむず
かしい くちこうしゃ 口巧者な事を云うから、気の毒だと云うのでどてらは笑
つたのである。自分は今は今まで死ぬ気でいた。死なないまでも
人間のいない所へ行く気でいた。それができ損そこなつたから、生きる
ために働く気になつたまでである。儲もうかるとか儲もうからないとか云
う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京
にいて親の 厄やっかい 介かい になつてゐる時分からなかつた。どころじゃない
儲もうけしゆぎ 主義は大いに 軽けい 蔑べつ していた。日本中どこへ行つてもそのく
らいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じていた。だからどて

らがさつきから儲かる儲かると云うのを聞きたんびに何のためだ
ろうと不思議に思っていた。無論癩しやくには障さわらない。癩に障るよう
な身分でもなし、境遇でもないから、いっつこう平気ではいたが、
これが人間に対する至大の甘言で、勧誘の方法として、もつとも
利目ききめのあるものだとは夢にも想おもい至らなかつた。そこで、どてら
から笑われちまつた。笑われてさえいっつこう通じなかつた。今考
えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、
「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」
と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日きのう自宅
を逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃げ剣けんの

稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくつちやあならな
い身分です」

「そうだろう。働いた事がなくつちや……じゃ、君、まだ儲けた
事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙つ
てると、茶店のかみさんが、菓子台うしろの後から、

「働くからにや、儲けなくつちやあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようつたって、今時そう儲け口が転がってるもん

じゃない」

と幾分か自分に対して恩に被^きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行つた。このそうさが妙に氣になつて、ことによると、まだその後^{あと}があるかも知れないと思つたせいか、何気なく後^{うしろ}姿^{かげ}を見送つていると、大きな黒松の根方^{ねがた}のところへ行つて、立^{たち}小便^{しょうべん}をし始めたから、急に顔^{おもて}を背^{そむ}けて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私^{わたし}だから、お前さん、見^みず知^しらずの他人^{たにん}にこんな旨^{うま}い話をするんだ。これがほかのものだつたら、受^う合^あつてただじや話^わしつこない旨^{うま}い口^{くち}なんだからね」

とまた恩に被^きせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張つて答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云う。自分は黙つて聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅山^{やま}へ行つて仕事をするんだが、

私が周旋さえすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんじやないか」

自分は何か返事を促^{うなが}されるような気がしたけれども、どうもどてらの調子に載^のせられて、そうですとは答える訳に行かなかつた。坑夫と云えば鉾山の穴の中で働く労働者に違ない。世の中に労働

者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもつとも苦しくつて、もつとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと言われたのだから、調子を合すどころの騒ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種属があると云うのは、おおみそか大晦日あとの後にまだたくさん日が余つてると云うのと同じ事で、

自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどてらがこんな事を饒舌しゃべるのは、自分を若年じやくねんと侮あなどつて、好い加減に人を瞞だますのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とっつけからすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なものさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまつちまつて、好きな事が出来

らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めっから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持って行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うなるほど溜るばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。

——今のうち儲けなくつちや損だ」

と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口くちう占らで、全然どてらと同意見を持っているように思われた。無論

それでよろしい。またそれでなくつてもいつこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであつた。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出しでかした不都合やら義理やら人情やら煩はん悶もんやらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日きのうまでの自分の事を考えると、どうしたつて、こんなにおとな温和おとなしくなれる訳がないのだが、實際この時は人に逆さからうような気分は薬にしたくつても出て来なかつた。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかつた。おそらく考える余裕がなかつたんだらう。人間のうちで纏まとつたものは身体からだだけである。身体が纏つ

てるもんだから、心も同様に片づいたものだと思つて、昨日と今き
よう日とまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと
 平気で済ましてしているものがだいぶある。のみならずいったん責任
 問題が持ち上がつて、自分の反はんぶく覆なじを詰なられた時ですら、いや私
 の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答える
 ものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自
 分ですら、無理と思ひながらも、いささか責任を感じようだ。
 して見ると人間はなかなか重ちようほう宝ほうに社会の犠牲になるように出
 来上つたものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を
 目撃して、自分を他人扱いに観察した鼻ひいきめ眞目なしの真相から割り

出して考えると、人間ほどの^{あて}にならないものはない。約束とか契^{ちかい}とか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を^{たて}楯にとつて相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行は野暮^{やぼ}の至りである。大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理を強^{しい}て^お圧しかくして、知らぬ顔でやつて退^のけるまでである。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに気がついたなら、むやみに人を恨^{うら}んだり、悶^{もた}えたり、苦しまぎれに自宅^{うち}を飛び出したりしなくつても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変つたところを、他人扱いに落ち着き払つて比

較するだけの余裕があつたら、少しは悟れたらう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかつた。ただ口惜くやくしくつて、苦しうつて、悲しくつて、腹立たしくつて、そうして気の毒で、濟すまなくつて、世の中が厭いやになつて、人間が棄すて切れないうで、いても立つても、いたたまれないで、むちやくちやに歩いて、どてらに引つ掛つて、揚あげ饅まんじゅう頭

を喰つたばかりである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫つな続ぎの取れない魂たましいがいとどふわつき出して、實際あるんだか、ないんだかすこぶる明めい瞭りょうでない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、

朦朧もうろうと一団の妖氛ようふんとなつて、虚空遥こくほるかに際限もなく立て罩こめて
るような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲もつける事ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりやどがいいいんだとか、何とかかとか理窟りくつを捏こねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘かん弁べんしないと、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する気が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考へていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふ

わふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強^{しい}て殺してしまうほどの無理を冒^{おか}さない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲かろうが、儲かるまいが、とんと問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相容^{あひい}れぬ法螺^{ほら}を吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格に尠^{すくな}からぬ汚点を貽^{のこ}す恐れがあつても、まるで気にならなかつたんだらう。こんな時には複雑な人間が非情に単純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくても好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと変化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと云う決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかつたし、第一と交渉を絶つほど遠くにも

いなかつたと見える。働きながら、人のいない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶かなう訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑あなの中で、日の目を見ない家業かぎようである。娑婆しやばにいながら、娑婆から下へ潜もぐり込んで、暗い所で、鉞あらがね塊つちくれ土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごてにいるが、自分ほど坑夫に適したものはけっしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。——とここまで明瞭めいりようには無論考えなかつたが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりど

うあつても他人ひとの事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてこう云つた。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」

するとどてらはなかなか鷹揚おうような態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私わたしが周旋さえずりやきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙つていと、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵ちようぞうさんが口を利ききさえすりや、坑夫は受合うけあいだ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知つた。

それからいつしよに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男を捕つらまえて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん当あ字てじである。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思いも寄らない見けん当とうに向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異いな事だ。さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合ううから、自分もなれるんだらうと思つて、

「じゃ、どうか何分願ねがいます」

と頼たのんだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺へんはさっぱり

分らなかつた。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに黙っていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻を床しやうぎ几から立てて、

「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支度したくはいいかい。忘れものがないようによく気をつけて」

と云つた。自分はずちを出る時、着のみ着のまままで出たのだから、からだ身体よりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝かんじん心の

あげまんじゅう
揚 饅 頭 の代を忘れてゐる。長蔵さんは平気な面つらをして、もう半分ほど葭簣よしずの外に出て往来を眺ながめていた。自分は懐中から三十二銭入りの蟄がまぐち口を出して饅頭三皿の代を払つて、ついでだから茶代として五銭やつた。饅頭の代はどうとう忘れちまつて思ひ出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫になつて、うんと溜めて歸りにまた御寄おより」

と云つたのを記憶している。その後坑夫のちはやめたが、ついにこの茶店へは寄る機会がなかつた。それから長蔵さんに尾ついて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃ほこりを上げて、やつて来ると、さっきの長たらしいのに引き易かえて今度は存外早く片づいちゃつた。いつの間まにやら松がなくなつたら、板橋街道のよ

うな希知けちな宿しゆくの入口に出て来た。やツぱり板橋街道のように我が多た馬車ばしやが通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返って、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗つても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくつてもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつてもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云つたから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行つてしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通つた馬車の埃ほこりが日光にまぶれて、往來が濁つたように黄色く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町並まちなみがしだいに立派になる。しまいには牛込かみごの神樂坂かぐらざかくらいな繁はな昌じやうする所へ出た。ここいらの店みせ付つきや人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長蔵さんのようなのはほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわぎと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかつたのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いつたい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついでひくちと口も自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所為しよゐとしては、少しく無頓着むとんじやく過ぎるようにも思われ

だが、この男は全くそんな事に冷淡な性であつた事が後で分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようになって、ある横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有つたものの子である。込み入つた事情があつて、耐え切れずに生家を飛び出したようなもの、あながち親に対する不平や面当ばかりの無分別じゃない。何

となく世間が厭いやになつた結果として、わが生家まで面白くなつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮あせれば焦慮るほど厭になる。揚句あげくの果は踏張はての栓せんが一度にどつと抜けて、堪かん忍にんの陣立じんたちが総崩れそうくずとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまつたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍そばにまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲まわりに親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲まいている。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりす

る。すると何かの因縁いんねんで自分も丸くなったり四角になつたりしなくつちやならなくなる。しかし自分はそう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別わきまえていた。が済まないと思えば思うほど丸くなつたり四角になつたりする。しまいには形態ばかりじゃない組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨めうらしそうに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲つたりくねつたりするところを、どうかして隠そうと力めつとたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終おひせる

段じやない。親にも親類にも目つかつてしまった。怪しからんと云う事になつた。怪しかるとは自分でも思つていなかつたが、だんだん聞き糾ただして見ると、怪しからん意味がだいぶ違つてる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思つると同時に、第一の少女の傍そばにいたら、この先どうなるか分らない、ことに因よると實際弁解の出来ないような怪しからん事が出しゅつ来たいするかも知れないと考え出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に対しては気の毒である、済まん事になつたと云う念が日々烈にちにちはげしくなる。——こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、五色の糸のこんがらかつたよう

に、こつちを引くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるところ
つちが釣れると云う按排あんばいで、乱れた頭はどうあつても解けないほど。
いろいろに工夫を積んで自分に愛想あいその尽きるほどひねくつて見た
が、とうてい思うように纏まとまらないと云う一点張いってんばりに落ちて来た
時に——やっと気がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、
自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦
しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のい
いような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当あてにしていた。
つまり往来で人と行き合つた時、こつちは突ツ立つたまま、向う
が泥濘ぬかるみへ避よけてくれる工面くめんばかりしていたのだ。こつちが動か
ない今のままのこつちで、それで相手の方だけを思う通りに動か

そうと云う出来ない相談を持ち懸^かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじやない。世間の掟^{おきて}という鏡が容易に動かせないとすると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙^{けむ}にしてしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古^{けいこ}をしても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなつた。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親を持って朝夕に事

を欠かぬ身分であるから生家うちについては自滅しようがない。どうしても逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考えた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残った人は自分の逃亡のために助かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたって、いつまでも逃亡かけおちちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやっぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅はかりごとの計を廻らしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと

自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になつてしまふが、事実を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきごみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考える。

それでなくつても実際その当時の、二人の少女の有様やら、日ごとに変わる局面の転換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だいぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、まあやめにして、せつかくの坑夫事件だけを話

す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔しゅつぽんしたんだから、固もとより生きながら葬ほうごられる覚悟でもあり、また自ら葬みずかつてしまつた了りようけん簡かんでもあつたが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら棄鉢すてばちになつても長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえできる事なら語りたくないほど情ないなさけ心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言いちごんも聞き糺たださなかつたのは、変と思ひながらも、内々嬉しかった。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘うそをつくる事をよく練習していなかつたし、ごまかすと

云う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたらうと思う。

そこで長蔵さんに尾ついて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎まぼらになって、所々は田圃たんぼの片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅たんぼだけであるなど気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑にぎやかな所へ出された。その突当りが停車場ステーションであつた。汽車に乗らなくつては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知つた。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つていた。

そこで停車場へ這入る五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんうしろと云つたのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場ステーションの入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分といつしよに汽車へ乗つて先方さきまで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分に

こう叮嚀ていねいな世話を焼くのはおかしい。ことによると彼奴あいつは詐欺かた師りかも知れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭いやになって来た。いつその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当けんとうに向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかかなかつたと見えて、茫然ぼうぜんとして、停車場前の茶屋の赤い暖簾のれんを眺めながていると、いきなり大きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟つた。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜はすに出して、しきりにこちらを見て、首を豎たてに振っている。何でも身体からだは便所へいの堀いにかくれてい

るらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔を目的めあてに歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうなないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた變つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞かたられようにも、名譽も財産もないんだから初手しよてから見込しろもの立たない代物ものである。昨日きのうの自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給さきの差おさえし押おさえを苦にするよ
うなものであつた。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自

分の風ふう体ていを見て一いち目もく騙かたるべからずと看破するには教育も何も要いつたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだろうと思ひ出した。それならそれで構かまわない。給料のうちを幾分かやれば済すむ事だなどと考かえながら用を足した。——実は自分がこれだけの結けつ論ろんに到た着ちやくするためには、わずかの時間内だがこれほどの手て数すうと推論とを要したのである。このくらい骨を折おつてすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会え得とくする事が出来なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、こうか、漕こぎつけながら、それでも、もしや好意こういづくの世

話ずきから起った親切じやあるまいかと思つて、飛んだ気兼をしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方^{さき}まで連れて行つては恐縮ですから、もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、「いろいろ御世話になつてありがとうございます。これから先はもう僕一人でやりますから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省はぶいたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰めんくらつたが、

「今貴方あなたに伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私わたしの名前くらいで、すぐ坑夫になれると思つてるの

は大間違いだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんじやないよ」

と跳はねつけられちまった。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶あいさつをすると、

「なに遠慮しないでもいい、先方さきまで送つてあげるから心配しな

いがいい。——袖そで摩すり合うも何とかの因いん縁ねんだ。ハハハハハ」

と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けていると、だんだ

ステーション
 ン 停車場へ人が寄ってくる。大抵は田舎者いなかもである。中には長
 蔵さんのような裨はんでんけん天兼てんけんどてらを着た上に、天秤てんびんぼう棒ぼうさえ荷かついだ
 のがある。そうかと思うと光沢つやのある前掛まへかを締めて、中折帽なかひを妙
 へへこに凹へこました江戸ツ子流えどつしりゅうの商あきゆうど人あきゆうどもある。その他の何やらかやら
 でベンチの四方が足音と人声でざわついて来た時に、切符口の戸
 がかたりと開あいた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がって、みん
 な鉄網かなあみの前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ちつき払
 ったものであった。例の太刀たちのごとくそっくりかえった「朝日」
 を厚い唇くちびるの間に啣くわえながら、あの角張かどばった顔を三さんが二にほど自分の
 方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるかい」

と聞いた。また自分の未熟なところを発表するようだが、実を云うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫も上らなかつたのである。汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら金を払うものか、また金を払う必要があるものか、とんと思ひ至らなかつたのは愚^ぐの至^{いたり}である。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢^{であ}うまでは無^{ただ}賃で乗れるかのごとき心持で平気でいたのは事実である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さんにさえ食つついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと云う依頼心が妙に潜^{ひそ}んでいたんだらう。ただし自分じゃけつしてそう思つていなかつた。今でもそうだとはい自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつ

て、ステーション停車場へ来て汽車賃の汽の字も考えずにいられるもんじやない。その癖こんなに依頼している長蔵さんに対して、もう御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人で行きますのと平ひらに同行を断つたのは、どう云う了りようけん簡かんだろう。自分はこう云う場合にたびたび出逢であつてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。——病気に潜伏期があるごとく、吾われわれ々の思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有もちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覚しない。またこの思想や感情が外界の因いんねん縁ねんで意識の表面へ出て来る機会がないと、生しょうがい涯がいその思想や感情の支配を受けながら、自分はけつしてそんな影響こうぶつを蒙おぼえつた覚がないと主張する。その証拠はこの

通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、傍^{はた}から見ると矛盾になっている。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やっぱりこの潜伏者を自覚し得なかつたからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒^{おか}さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだろうに。ところがそう思うように行かんの、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持っていなさるか」と問われた時に、自分ははっと思つて、少からず狼^{うらた}狽えた。

三十二銭のうちで 饅頭まんじゅうの代と茶代を引くと何にもありやしな
い。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて呑込顔のみこみがおに受合つた
んだから、自分は少し図迂ずうずう図迂ずうしい人間であつたんだと気がつい
たら、急に頬辺ほっぺたが熱くなつた。その時分の事を考えると自分な
がら可愛らしい。これが今だつたら、たとい電車の中で借金の催
促をされようとも、ただ困るだけで、けつして赤面はしない。ま
してぼん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥しゆうちの血色を
見せるなんてもつたいない事は、夢にもやる氣遣きづかいはありやしな
い。

自分はどう云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと
答えたかつた。しかし実際がないんだから嘘うそを吐つく訳には行かな

い。嘘を吐きつ放ばなしにして済ませられるなら、思い切つて、嘘を吐く事にしたろうが、とにかく今切符を買うと云う間際まぎわで、吐けばすぐ露現ろけんしてしまふんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんが答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満まんざら更の子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色気のない、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないよ
うな子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありま
すとも、ありませんとも云いにくかつたもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかつたが、何しろもつたいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐

縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、

恐縮しても、まるで頓とんじやく着やくしない。ただいくら持つてるか聞き

たい様子であった。ところがあいにく肝かんじん心の自分にはいくらあ

るか判然しない。何しろしめめて三十二銭のうち、饅まんじゆう頭とうを三皿食

つて、茶代を五銭やつたんだから、残るところはたくさんじやな

い。あつても無くつても同じくらいなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私わたしが足して上げるから、構わない。何しろ

有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、いかにも体裁ていさいがわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭いやだから、懐ふところから例の蠶がまぐち口を取り出して、蠶口ごと長蔵さんに渡した。この蠶口は鰐わにの皮で拵こしらえたすこぶる上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると云う講釈をどくと聴かされた贅ぜいたくもの沢物である。長蔵さんは蠶口を受け取って、ちよつと眺ながめていたが、

「ふふん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまつた。中味を改めないところはよかつたが、

「じゃ、私が切符を買って来て上げるから、ちやんとここに待っていなくっちゃ、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行ってしまった。見てみると人ひとごみ込の中へ這はい入ったなり振り返りもしないで切符を買う番のくるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方いまさきがたまでの長蔵さんは始しじゆう終自分の傍そばに食つついて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであったのに、墓口を受け取って、切符を買う時はまるで自分を忘れているように見受けられた。あんまり人が多くって、こつちへ眼をつける暇がなかったんだらう。これに反して自分は一生懸命に長蔵

さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るた
んびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから
妙な神経を起して眺^{なが}めていた。墓口は立派だが中を開けられたら
銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれっばかりしか持つて
いないのかと長蔵さんが驚くに違ない。どうも気の毒である。い
くら足し前をするんだらうなどと入らざる事を苦^くに病^やんでいると、
やがて長蔵さんは平^{へい}生^{せい}の顔つきで歸つて来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも
云わない。きまりが悪かつたから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃銭の事は口へ出さなかつた。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれつきり云わなかつた。したがって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗つた。汽車の中では別にこれと云う出来事もなかつた。ただ自分の隣りに腫物できものだらけの、腐爛ただれめ目の、痘痕あばたのある男が乗つたので、急に心持が悪くなつて向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよつぽどおかしい。生家うちを逃亡かけおちて、坑夫にまで、なり下さがる決心きんなんだから、大抵の事に辟易へきえきしそうもないもんだがやつぱり醜きたないものの傍そばへは寄りつきたくなかつた。あの按排あんばいでは自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら万事こ

う几帳面きちようめんに段落をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵さんや茶店のかみさんに逢あった時なんぞは平生の自分にも似にず、ぐうの音ねも出さずに心しんからおとなしくしていた。議論も主張もきがい感慨も何もあつたもんじゃありやしない。もつともこれはだ**い**ぶひも餓いしい時であつたから、少しは差引いて勘定たてを立るのが至当だが、けつして空腹のためばかりとは思えない。どうも矛盾——また矛盾が出たから廢よそう。

自分は自分の生活中もつとも色彩の多い当時の冒険を暇さえあれば考え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく嚴密なる解剖の刀を揮ふるつて、縦たてよこ横よこ十文字に自分の心しんしよ緒しよを切りさいなんで見るが、その結果はいつも千遍一律で、

要するに分らないとなる。昔むかしだから忘れちまつたんだなどと云つてはいけない。このくらい切実な経験は自分の生しょうが涯がい中に二度とありやしない。二十はたち以下の無分別から出た無茶だから、その筋道が入り乱れて要領を得んのだと評してはなおいけない。経験の当時こそ入り乱れて滅多めったやたらに盲動するが、その盲動に立ち至るまでの経過は、落ち着いた今日こんにちの頭腦の批判を待たなければとても分らないものだ。この鉾山行ゆきだって、昔の夢の今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたら、あらいざらい書き立てる勇氣があると云うばかりじゃない。その時の自分を今の眼の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだってとうてい書けるもの

じやない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思
うが、大間違である。刻下こっかの事情と云うものは、転瞬てんしゆんの客気かつき
に駆られて、とんでもない誤謬ごびゆうを伝え勝ちのものである。自分
の鉷山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置い
たら、定めし乳臭い、気取った、偽りの多いものが出来上つたる
う。とうてい、こうやって人の前へ御覧下さいと出された義理じ
やない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは
一目ちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛
けたまま動かなかつた。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健な
のには少からず驚嘆した。のみならず、平気な顔で腐爛目と話し

出したに至つて、少しく愛想が尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻つて、腐爛目は、

「まただ**いぶん**儲かるね」

と云つた。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液つばきをした。するとその唾液が汽車の風で

自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じている。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからってんで贖金をやって帰したとするんだ」

「うんそれから」

「後で泥棒が贖金と気がついて、あすこの亭主は贖金使だ贖金使だって方々振れて歩くんだ。常公の前だが、どっちが罪が重い

と思う」

「どつちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねぶくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそらく同じ事だろう。しかし死ぬのは、やさしいようになかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道ひながをやる人が、時々ほうゆう朋友のどに咽喉を締めて貰う事がある。夏の日永ひながのだるい時な

どは、絶息したまま五分も道場に死んでいて、それから活かつを入れ
 させると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。
 ——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経
 のために、ついぞこの荒療治あらりようじを頼んだ事がない。睡眠はこれほ
 どの効験もあるまいが、その代り生き戻り損そこなう危険も伴ともなっていな
 いから、心配のあるもの、煩悶はんもんの多いもの、苦痛に堪たえぬもの、
 ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものにとつては、
 至大なる自然の賚たまものである。その自然の賚が偶然にも今自分の頭
 上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑ひまもないうちに、うつと
 りとしちまつて、生きている以上は是非共その経過を自覚しなけ
 ればならない時間を、丸潰まるつぶしに潰つぶしていた。ところが眼めが覚さめ

た。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝込んだもんだから、汽車の留ったために、眠りが調子を失つてどこかへ飛んで行つたのである。自分は眠つてしていると、時間の経過だけは忘れてゐるが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくつては駄目だ。ただし煩悶がなくなつた時分には、また生き返りたくなるにきまつてるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違たがいちがいにするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽ひょう軽けいな冗談じょうだんを云つてるようだがけつしてそんな浮いた了りようけん見じやない。本気に真面目まじめを話してるつもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半分興に乗じ

て、好い加減につけ加えたんじゃない。実際汽車が留つて、不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿ばか気げを感じた感かんじだから滑稽こっけいのように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿気た感じが起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可愛かわい想そうに思うのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目まじめに抱いだかねばならぬほど、その時の自分は情なさけない境遇におつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留つていた。汽車が留まつたたと云う考えよりも、自分は汽車に乗つていたんだたと云う考えが第一に起つた。起つたと思うが早いかな、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家うちを出しゅっ奔ぽんし

たんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだが
むらむらと塊かたまつて、頭の底から一度に湧わいて来た。その速い事
と云つたら、言語ごんごに絶すると云おうか、電光石火と評しようか、
実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺おぼれかかったその刹那せつなに、
自分の過去の一生を、細さいだい大漏らさずありありと、眼の前に見た
事があると云う話をその後のち聞いたが、自分のこの時の経験に因よつ
て考えると、これはけつして嘘じやなかうと思う。要するにそ
のくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚
したのである。自覚すると同時に、急に厭いやな心持になった。ただ
厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云つて、別に叙
述しようもない心持ちだからただの厭でとめて置く。自分と同じ

ような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなど、直勘すかんづくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けっして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入はいつて来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよるきよるすると、忘れものはないかと云う顔つきでうろうろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更かえて窓へ首を出したり、欠伸あくびをしたりすると、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩くずし始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覚していた。自覚すると共に、自分は普通の人間と違って、みんなが活動する時分でさえ、他ひとに釣り込まれ

て気分が動いて来ないような仲間外れだと考えた。袖そでが触れ違ちがつて、膝ひざを突き合せていながらも、魂だけはまるで縁ゆかりも由緒もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持であった。今までは、どうか、こうか、人並に調子を取って来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽気になって上へ騰あがる。自分は急に陰気になって下へ降さがる、とうてい交際つきあいはできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゆうと減へつて、臟腑ぞうふが薄うすっ片ぺらな一枚の紙のように圧おしつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまった。まことに申訳のない、御恥おこずかしい心持ちをふらつかせて、凹へこんでいた。

ところへ長蔵さんが、立って来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」

と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上った。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通かよつて
るうちは、呼ぶと返つて来るからおかしなものだ。しかしこれが
もう少し烈はげしくなると、なかなか思うように魂が身からだ体に寄りつい
てくれない。その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛あ
想いそを尽かされて、非常な難義をした事がある。何なんにでも上には上
があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだのと思つて、安
心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時はこの心持が自
分に取つてもつとも新しく、しかもはなはだ苦にがい経験であつた。
長蔵さんのどてらの尻を嗅かぎながら改札場から表へ出ると、大
きな宿しゆくの通りへ出た。一本筋の通りだが存外広い、ばかりではな

い、心持の判然はつきりするほど真直まっすぐである。自分はこの広い往還おうかんの真中に立つて遙か向うの宿外しゆくほざれを見下みおろした。その時一種妙な心持になった。この心持ちも自分の生涯しょうがい中であつて新らしいものであるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人間らしい了りようけん簡かんになつて、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸ひく息につれて、やつと胎内に舞い戻つただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場ステーションから出ても、またこの宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよやながら、義理に働いてくれたようなもので、けつして本気の沙汰さたで、自分の仕事とし

て引き受けた専門の職責とは心得られなかつたくらい、鈍い意識にぶの所有者であつた。そこで、ふらついている、氣の遠くなつてい
る、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼まなこを開いて見ると、今まで
は汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた
限界が、はつと云う間まに、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛
んで行つた。しかもその突当りに滴したたるほどの山が、自分の眼さへぎを遮
りながらも、邪魔にならぬ距離を有たもつて、どろんとしたわが眸ひとみを
翠みどりうちの裡に吸寄せている。——そこで何んとなく今云つたような心
持になつちまつたのである。

第一には大道砥だいどうとのごとしと、成語にもなつてくるくらいで、平
たい真直な道は蟠わだかまりのない爽さわやかなものである。もつと分り安く云

うと、眼を迷まどつかせない。心配せずまどにこつちへ御出おいでと誘うように
 でき上つてるから、少しも遠慮きがねや気兼ねきがねをする必要がない。ばかり
 じやない。御出と云うから一本筋の後あとを喰あツついて行くと、どこ
 までも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が真直に
 続いていればいるほど、眼も真直に行かなくつては、窮屈でかつ
 不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つた
 ものと自分は堅く信じている。それから左右の家いえなみ並を見ると、
 ——これは瓦かわらぶき葺ふきも葺ふきもあるんだが——瓦葺かわらぶきだろうが、葺ふ
 葺ふだろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだいし
 だいに屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金こうばで勾か
 配いを纏まとめられるために向うのはずれからこつちまで突き通され

てるように、行儀よく、斜はすに一筋を引つ張つて、どこまでも進んで
 いる。そうして進めば進むほど、地面に近寄つてくる。自分の
 立っている左右の二階屋などは——宿屋のように覚えているが——
 見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒すかを透して見ると、
 指の股またに這入はいると思われくらい低い。その途中に暖簾のれんが風に動
 いていたり、腰障子こししようじに大きな蛤はまぐりがかいてあつたりして、多少の
 変化は無論あるけれども、軒のきなみ並だけを遠くまで追つ掛けて行く
 と、一里が半はんせこんど秒で眼の中に飛び込んで来る。それほど明めいりよ
 瞭うである。

前に云つた通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体ていたらくで、どこまでも
 とろんとしていた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこ

の明瞭な——盲目にさえ明瞭なこの景色にぼったりぶつかったの
である。魂の方では驚かなくつちやならない。また實際驚いた。
驚いたには違いないが、今まであやふやに不精不精に徘徊
していた惰性を一変して屹となるには、多少の時間がかかる。自
分の前に云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たな
いさき、景色がいかにも明瞭であるなど心づいたあと、——その
際どい中間に起つた心持ちである。この景色はかように暢
達して、かように明白で、今までの自分の情緒とは、まるで
似つかない、景気のいいものであつたが、自身の魂がおやと思
つて、本気にこの外界に對い出したが最後、いくら明かでも、い
くら暢びりしていても、全く実世界の事実となつてしまう。実世

界の事実となるといかな御光ごこうでもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覚するほど作用が鋭くなかったため——この真直な道、この真直な軒を、事実^に等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽はつき涼りした快感をもって、他界の幻影まぼろしに接したと同様の心持になったのである。自分は大きな往来の真中に立っている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通っている。歩いて行けばその外はずれまで行かれる。たしかにこの宿しゆくを通り抜ける事はできる。左右の家は触さわれば触る事が出来る。二階へ上のぼれば上る事が

出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸ひとみのなかに受けながら立っていた。

自分は学者でないから、こう云う心持ちは何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないものでついこう長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事をと笑われるかも知れないが仕方がない。その後のちこれに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまつた。

見ると日はもう傾かたむきかけている。初夏しよかの日永ひながの頃だから、日差ひざしから判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそらく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ていくくらいだから悪いとは云われない。自分は斜はすかけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺ながめた時、あれが西の方だと思った。東京を出て北へ北へと走ったつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなっていた。この町を真直に町の通つてるなりに、下くだると、突き当りが山で、その山は方角から推おすと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変らず、北の方へ行くんだと思った。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さも

けつして低くはない。色は真ま蒼さおで、横から日の差す所だけが光るせいか、陰の方は蒼あおい底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉すぎ檜ひのきの多いためかも知れない。ともかくも蒼こんもり鬱もりとして、奥深い様子であつた。自分は傾かたむきかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なつているとしか思われなかつた。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなふもとか麓へ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいく

ような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾かたむいて陰の方は蒼い山の上うわ皮かわと、蒼い空の下した層がわとが、双方で本分を忘れて、好い加減に他の領分ひとを犯おかし合あつてゐるんで、眺める自分の眼にも、山と空の区劃くかくが判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕ゆうべ東京を出て、千住せんじゆの大橋まで来て、裕あわせの尻はしよを端折はしよつたなり、松原へかかつて、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗つても、空からすね脛すねのまままで押し通して来た。それでも暑いくらいであ

った。ところがこの町へ這入^{はい}つてから何だか空脛では寒い気持がする。寒いと云うよりも淋しいんだろう。長蔵さんと黙つて足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になつた。たびたび空腹になつた事ばかりを書くのはいかがわしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。実際自分は空腹になつた。家^{うち}を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに気分がわるくつても、煩悶^{はんもん}があつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくつちやいけないと云い換えるのが適當かも知れない。品^{ひん}の悪い話

だが、自分は長蔵さんと並んで往来の真中を歩きながら、左右に眼をくばって、両側の飲食店を覗き込むようにして長い町を下つて行つた。ところがこの町には飲食店がだいぶんある。旅屋とか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入つてしかるべきやたいち流のがあすこにもここにも見える。しかし長蔵さんは毫も支度をしそうにない。最前の我多馬車の時のように「御前さん夕食を食うかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配つて何だか発見したいような気色がありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好な所を見つけて、晩食をしたために自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下つて行

った。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひもじくは無かった。胃の中にはまだ先刻さつきの饅頭まんじゅうが多少残つてゐるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や滅めり込みこみそうな精神が、真まつすぐ直な往来の真中に抛ほうり出されて、おやと眼を覚したら、山里の空気がひやりと、夕日の間から皮膚を冒おかして来たんで、心機一転の結果としてここに何か食つて見たくなつたのである。したがって食わなければ食わないでも済む。長蔵さん何か食わしてくれませんかと云うほど苦しくもなかつた。しかし何だか口が淋さびしいと見えて、しきりに縄なわ暖簾のれんや、お煮にしめメや、御中食おちゆうじきどころ所のぞが気にかかる。相手の長蔵さんがまた申し合せたように右左と覗

き込むので、こっちはますます食意地くいじが張ってくる。自分はこの
 長い町を通りながら、自分らに適当と思ふ程度の一膳いちぜんめし屋を
 ついに九軒まで勘定した。数えて九軒目に至つたら、さしもに長
 い宿しゆくはどうとうおしまいになり掛けて、もう一町も行けば宿しゆく
 外ずれへ出抜ずぬけそうである。はなはだ心細かつた。時にふと右側
 を見ると、また酒めしと云う看板に逢ほう着ちやくした。すると自分の
 心のうちにこれが最後だなど云う感じが起つた。それがためか煤すす
 けた軒の腰障子こししょうじに、肉太したたに認めた酒めし、御肴と云う文字がも
 つとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文
 字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴おんさかなの
 字でもありあり見える。この様子では、いくら耄碌もうろくしてもこの

五字だけは、そっくりそのまま、紙の上を書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強がんきょうの長蔵さんも今度こそ食いに這入はいるに違なからうと思つた。ところが這入らない。その代りぴたりと留つた。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うかがうと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち留つてこの赤い人間を覗のぞき込むのか、とんと自分には分らなかつた。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留つていると、や

がて障子の奥から赤毛布あかげつとが飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、實際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣ひとえもの一枚だけしきや着ていないんだから、つまりしめて見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚でしの凌いでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりであった。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側そばへつかつかやつて行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕つかまった時に聞かされた、第一の質

問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆られながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆とさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然と覺つた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どんな人に、幾人逢おうとも、版行で押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を厭きもせず、長の歲月やられたものだ。長蔵さんだつて、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やつぱ

り何かの事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう
思えば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほか
の事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩はんも
悶もんする気色けしきもなく、自分でなくつちや御前さんをやり得る人間
は天下広しといえども二人と有るまいと云うほどの平気な顔で、
やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵ちようぞう観かんがあつたらだ**いぶ面白**か
つたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なつて**いる**最中**だ**つたから、
なかなかそんな余裕は出て来なかつた。この長蔵観は当時の自分
を他人と見做みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて
序じよの節せつに浮かんだのである。だからヤツぱり紙の上だけで消えて

なくなるんだらう。しかしその時その砌りの長蔵観と比較して見るとだいたい違つてるようだ。——

自分は長蔵さんと赤毛布の立談を聞きながら、自分は長

蔵さんから毫も人格を認められていなかったと云う事を見出した。

——もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京を出

奔して坑夫にまでなり下がるものが人格を云々するのは変

挺な矛盾である。それは自分も承知している。現に今筆を執つ

て人格と書き出したなら、何となく馬鹿気ていて、思わず噴き出し

そうになつたくらいである。自分の過去を顧みて噴き出しそうに

なる今の身分を、昔と比べて見ると実に結構の至りであるが、そ

の時はなかなか噴き出すどころの騒ぎではなかった。——長蔵さ

んは明かに自分の人格を認めていなかつた。

と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴おんさかなの裏うちから飛び出した若い男を捕つらまえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘している。それを自分は何でか少々怪けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざつとこんな訳なんだろう。――

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家業かぎょうだとは、常識を質に入れた当時の自分にももつともと思ひようがなかつた。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不名誉だと心得ていた。自慢にやならないと覺さとつていた。だから

坑夫の候補者が自分ばかりと思おもいのほか突然居酒屋の入口から赤毛布になつて、あらわれようとも別段神経を悩ますほどの大事件じやないくらいは分りきつてる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般人間であると云う氣になつちまう。取扱方の同様なのを延ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人ひとが赤毛布を着て立ってるようには思われぬ。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんか

ら坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情なさけなくなつちまつた。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れているんだが、自分が赤毛布になつて、君儲もうかるんだぜと説得ていさいされている体裁ていさいを、自分が傍わきへ立つて見た日には方かたなしである。自分ははたしてこんなものかと、少しく興きを醒さまして赤毛布を、つらつら観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被かぶつてる赤毛布ばかりじゃない、心底しんそこから、この若い男は自分と同じ人間だった。そこで自分をつくづくつまらないなど感じた。その上もう一つつまらない事が重なつたのは、長蔵さんが、にくにくしいほど公平で、自分の方が赤毛布あかげつとよりも坑夫に

適していると云うところを少しも見せない。全く器械的にやっている。先せんくち口だから、もう少しこつちを鼻ひいきにしたら好かろうと思うくらいであった。——これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切せ齒つば詰った時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有もっていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。——しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覚して、大おおいにつまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人ふたりの談判は見る間に片まづいてしまった。これは必ずしも長蔵さんがこ

とほどさように上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がことほどさように馬鹿だったからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あながち、自分に比較して軽蔑する気じゃけつしてない。自分の当時は、長蔵さんの話をはいはい聞く点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。もし強いて違ふところを詮議したら赤毛布を被つてるのと紺を着ているとの差違くらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく気の毒な人と云う意味で、馬鹿のうちに少しぐらいは同情の意を寓したつもりである。

で、馬鹿が二人長蔵さんに尾いていっしょに銅山まで引つ張ら

れる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと気がついて見ると、さっきのつまらない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了りようけん見ほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心していると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後のちさる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得ふかたくなりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟おおげさな法螺ほらだろうが、不可得ふかたくと云うのは、こんな事を云うんじゃないかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念ねんと云うもので心こころじやないと

反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙っていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかというところ、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱らせられる。そうして、そう云う呑気な^{のんき}料^{りようけん}簡で、人を自由に取り扱うの、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでいるから驚いちまう。水だつて流れりや返つて来やしない。ぐずぐずしていりや蒸発しちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻の^{さつき}つまらない考えが蒸発していたと云う事だけを記憶して置いて貰^{もら}

えばいい。——そうして吾われながら驚いたのは、どうも赤毛布あかげつとと並んで歩くのが愉快になつて来た。もつともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋いもの事を芋えもと訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではなかつた。その上顔が人並にできていなかつた。この男に比べると角張かくばつた顎あごの、厚あつくちびる唇の長蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突つ走つたのみで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤い毛布けつとが妙に臭い。それにもかかわららず自分はこの山里で、銅山行きの味方を得たような心持ちがして嬉うれしかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴みちづれがあつて欲ほしい。

一人で零落れるのは二人で零落れるのよりも淋しいもんだ。そう
明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ
好いてるところはなかつたけれども、ただいっしょに零落れてく
れると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じ
た。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近
しい仲となつてしまった。これから推して考えると、川で死ぬ時
は、きつと船頭の一人や二人を引き擦り込みたくなるに相違ない。
もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいな
い地獄よりも、必ず鬼のいる地獄を択ぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩
いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、

これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻下感こつかかんに乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直まっすぐな往来を真直まっすぐに突き当りの山まで見下みおろしたもんだからようやく正氣づいたのは前申まえした通りである。それが機縁になつて、今度は食氣くいけがついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく頹勢たいせいを挽回ばんかいしたと云うしだいになる。だに困よつてまた空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の一膳飯屋いちぜんめしやはもう通り越している。宿しゆくはすでに尽きかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願かなは叶いそうもない。それに赤

毛布は今食ったばかりの腹だから、勇ましくどんどん歩く。どうも、降参しちまった。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さんに話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越しちや大変だ。これから左へ切れ
るんさ」

と云つたなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減つたんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束

したように、そことこ所に芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天てん佑ゆうである。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしければかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のように奇麗きれいじゃなかつた。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかは何を売つてるんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に気を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載のせて、真黒な家うちから、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食つた」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺^{なが}めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡^やせていて、湿^{しめ}つぽそうで、それで所々皮が剥^はげて中から緑^{ろくし}青^{しょう}を吹いたような味^みが出ている。どれにぶつかったつて大同小異である。そんなら一^{いち}目^{もく}惨^{さん}澹^{たん}たるこの芋の光景^{へきえき}に辟^{へき}易^{えき}して、手を出さなかつたかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋^{いもちゅう}中の、とも云わるべきこの御薩^{おさつ}を快よく賞^{しょう}翫^{がん}する食欲は十分有つたように思う。しかし「さあ、食つた」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損^{そく}なつた。これはおおかた「さあ、

食った」の云い方が悪かつたんだろう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎あごで芋を指さしながら、前へ出した手頸てくびを、食えと云う相図あずまひにちよつと動かした。よく考えて見ると、両手が芋で塞ふさががてるんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、口へ持つて行く事ができないんであつた。じれたのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕で、変な曲線を描えがいて、右の手を芋まで持つて行こうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころころと往来の中へ落ちた。これ

はすぐさま赤毛布あかげつとが拾った。拾ったと思ったら、

「この芋えもは好芋えええもだ。おれが貰おう」

と云った。それでこの男は芋いもを芋えもと発音すると云う事が分った。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本しめ締めて五本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懐なつかし

げに食いながら、いよいよ宿外しゆくはずれまで来るとまた一事件ひとじけん起つた。

宿しゆくはずの外はずれには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れている。

自分はもう町が尽きるんだとは思いながら、つい芋に心を奪うわ
れて、橋の上へ乗つかかるまでは川があるとも気がつかなかつた。
ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出ている。川
がある。水が流れている。——何だか馬鹿気た話だが、事実にも

つとも近い叙述をやろうとすると、まあ、こう書くのが一番適切
だろう、こう書いて置く。けっして小説家の弄ぶような法螺七分
の形容ではない。これが形容でないとするとその時の自分がいか
に芋を旨がったのかがおのずから分^{ぶん}明^{みょう}になる。さて水音に驚
いて、欄干^{らんかん}から下を見ると、音のするのはもつともで、川の中
に大きな石がだいぶんある。そうしてその形^か状^つがいかにも不^ぶ作^さ
法^{ほう}にでき上って、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝たり、
突っ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその
水には勾配^{こうばい}がついている。山から落ちた勢いをなし崩^{くず}しに持ち
越して、追っ懸^かけられるように跳^{おど}つて来る。だから川と云うよう
なもの、実は幅の広い瀑^{たき}を月賦^{げつぷ}に引き延ばしたくらいなもので

ある。したがって水の少ない割には大変烈はげしい。鼻はなつ端はしの強い江
 戸ツ子のようにむやみやたらに突つかかかって来る。そうして白い
 泡あわを噴ふいたり、青い飴あめのようになつたり、曲つたり、くねつたり
 して下しもへ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだ
 ん暮れてくる。仰向あおむいて見たが、日向ひなたはどこにも見えない。ただ
 日の落ちた方角がぼうつと明るくなって、その明かるい空を背負しよ
 ってる山だけが目立って蒼あおぐろ黒くろくなって来た。時は五月だけれど
 も寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入日いりひ
 を背中から浴びて、正面は陰になった山の色と来たら、——あり
 や全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫むらさきでも黒でも蒼あお
 でも構わないんだが、あの色の気持を書こうとすると駄目だ。何

でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どつと圧おつ被かぶさるんじやあるまいかと感じた。それで寒いんだろう。実際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方ことごとく、あの山のような気味のわるい色になって、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界一いっしき色の内に裹つつまれてしまふに違ないと云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日いりひの方かたの局部の色として認めたら、局部から全体を唆そかされて、今にあの山の色が広がるんだなど、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじやあるまいかと云う気を起したんだなど——自分は今机の前で解剖して見た。閑ひまがあるととかく余計な事がしたくなって困る。

その時はただ寒いばかりであつた。傍そばにいる茨城県の毛布けつとが羨うらやましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向むたつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこう突然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄らなかつたのである。——その淋さむしい山の方から、小僧が一人やつて来た。年は十三四くらいで、冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいている。顔は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下こしたやみ闇の一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、

先が見えないから、不意に姿を出したり、隠したりするような仕掛かけにできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いもを口へ宛あてがつたなり、顎あごを動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上つた小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいるのを、

とんと苦にならない様子で通り抜けようとする。すこぶる平気な態度であった。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆おくした気色けしきもなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏とどみ留まった。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になったものだ。なかなかえらいと感心していると、長蔵さんは、

「芋いもを食わないかね」

と云いながら、食い残しを、気前よく、二本、小僧の鼻さきの前まへに出

した。すると小僧はたちまち二本とも引ったくるように受け取つて、ありがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手っ取り早い行動を熟視した自分は、なるほど山から一人を下りてくるだけあつて自分とは少々訳が違うなど、また感心しちまつた。それとも知らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張ほおばつた奴やつを、唾液つばきも交まぜずに、むやみに呑のみ下くだすので、咽喉のどが、ぐいぐいと鳴るように思われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわらず、当人は、傍はたで見えるほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい食う。芋だから無論堅いもんじゃない。いくら鵜呑うのみにしたつて咽喉に傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉がいつぱいに塞ふさがって、芋が食道を通り越す

までは呼息いいきの詰る恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしない。今咽喉のどがぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。後あとの芋が、前さきの芋を追かつ懸かけてぐいぐい胃の腑ふに落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だったが、これがためたちまち見る間まに無なくなってしまった。そうして、小僧はついに何らの異状もなかつた。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食くつてしまふまで、一句も言葉かを交かわさなかつた。自分は腹うちの中で少しはおかしいと思つた。しかし何となく憐れだつた。これは単に同情の念ばかりではない。自分が空腹ひもになつて、長蔵さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓ひもしい記憶は気の毒なほど近くにあるのに、この小僧の

食いは、自分より二三層倍餓じそうに見えたからである。そこへ持つて来て、長蔵さんが、

「旨まかったか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食ったあとの小僧は無論何とか云うだろうと思つていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙つて立っている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだつた。それが分つてからはさほどにも思わなかつたが、この時は何だ顔に似合わない無愛嬌な奴だなと思つた。しかしその丸い顔を半分傾けて、高い山の黒ずんで行く天边を妙に眺めた時は、また可愛想にな

った。それからまた少し物騒になった。なぜ物騒になったんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿しゆくとが、何か深い因縁いんねんで互に持ち合つてるのかも知れない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらくこんな因縁いんねんに勿体もったいをつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾つたり、文章にぶつかつたりするもんだ。自分はこの永年ながねん方々るろうを流浪してあるいて、折々こんな因縁に出つ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。——しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやつぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損そくなつたところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何し

ろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天^{てっぺん}辺を眺めていた。

すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無^ぶ愛^{あい}想^{そう}である。長蔵さんは平

気なもんで、

「じやどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもんで、

「どこへも帰りやしねえ」

と云ってる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じ

がした。この小僧は宿無やどなしに違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸すわの据つた宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐れあわとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかつたらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向つて、「じゃ、おいらといっしょにおいで。御金を儲けもうさせてやるから」と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかげつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏まとまつてしまうには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなからう。しかしそう云う自分がこの赤毛布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人であつたんだから妙なものだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左へでも誘われしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものがだいぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいるときは、目めまぐ眩るしいほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しといえども、自分だけであろうくらいで、千住から尻はしよを端折はしよつて歩き出した。

だから心細さも人一倍であったが、この宿しゆくで、はからずも赤毛あかげつ布とを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちにまたこの小僧を手に入れた。そうして二人とも自分よりは遙はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちやんとして生活していた。煩悶はんもんも坊ちやんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶きよくの極試みたこの駆落かけおちも、やつぱり坊ちやんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。生死しやうしの分れ路のように考え

ていた。と云うものは坊ちゃん的眼で見渡した世の中には、駆落をしたものは一人もない。——たまにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だから、食べたつて身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったようなもので、はあ、はあ、と聞いている分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わつてくる。もつとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたまでで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しき悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横じゆうおうに飛び廻つて、大いに苦しがつたりまた大いに悲

しがったりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観
 察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しも
 なかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云
 うのは、自分の不経験からして、さほど大袈裟おおげさに考えないでも済
 む事を、さも仰ぎようさん山さんに買い被かぶつて、独ひとりでどぎまぎしていた事
 実を指さすのである。しかるにこのどぎまぎが赤毛布あに逢あい、小僧
 に逢あつて、両人ふたりの平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄
 らいだのは、やっぱり経験たまものの賜である。白状すると当時の赤毛布
 でも当時の小僧でも、当時の自分よりよつぽど偉たかつたようだ。
 こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、
 たわいもなく攻め落された事実を綜そうごう合ごうして考えて見ると、なる

ほど長蔵さんの商売も、満まんざら更待くたびれち草臥くたびれの骨折損になる訳でもな
かった。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやありませんよ
うと二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折しりはしより
で夜逃をした自分くらいと思っていた。したがって長蔵さんのよ
うな気楽な商売は日本にたった一人あればたくさんで、しかもそ
の一人が、まぐれ当りに自分に廻めぐり合せると云う運勢をもつて生
れて来なくつちや、とても商売にならないはずだ。だから大川おおかわ
端ぼたで眼の下三尺の鯉こいを釣るよりもよっぽどの根気仕事だと、始
めから腰を据すえてかかるのが当然なんだが、長蔵さんはとんとそ
んな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつと
も普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるび

臥たひれてはいるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布あつの後つを跟けて行つた。路みちがあまり広くないので四よつたり人は一いちぎよう行ぎように並べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足おく後れて、自分と摺すれすれ々々くらいになつて食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのとの両方で、口を利きくのが厭いやになつた。長蔵さんも橋を渡つてから以後とんと御前さんを使わなくなつた。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかつたが、どう云うものかここに至つてますます無口となつちまつた。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿はいている冷飯ひやめしぞうり草履ぞうりがぴちやぴちや鳴るばかりである。

こう、みんな黙ってしまおうと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋さびしい。夜と云ったって、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけではどうか、こうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいか、少しずつ光って見える。もつともきらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたって砕ける所は比較的判はつきり然と白くなっている。そうしてその声がさあさあ絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細うちい道が少しずつ、上りのぼりになるような気持がしだした。上りだけならこのくらいな事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹でこぼこする。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上

へ出たり、引つ込んだりするんだらう。この凸凹に下駄げたを突つ掛ける。烈はげしいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になつて来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴なれていると見えて、よくも見えない木下こしたやみ闇を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履をびしゃびしゃ云わして、暗い凸凹を平氣に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないのだが、この際だから、薄暗い中でびしゃりびしゃりと草履の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠こうもりといつしよに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸いきが切れる。凸凹はますます烈はげしくなる。耳ががぁんと鳴つて来

た。これがかけおち駆落でなくって、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺の仕しそこな損いから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛つらくつても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よしいたつて、こだわるだけの勇氣はない。その上先方さきは相手になつてくれないほど平気である。すたすた歩いて行く。口さえ利きかない。まるで取附端とつつきはがない。やむを得ず呼吸いきを切らして、耳をがぁんと鳴らして、黙あとつて後から神しんびよう妙めうに尾ついて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟つたのはこの時が始めてである。もつともこれが悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その

悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉾山の中で絶高頂に達してしまつた。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬たとえに云うが、涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切いっさい神妙気を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になつた長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は氣の毒だつたと云つてくれるかも知れない。増長したにしても氣の毒だつたにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてるんだから致し方が

ない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶる悸ふるえていろつたつて出来ない相談である。病気で熱の出た時、牛肉を食わなかつたから、もう生しょうがい涯がい ロースの鍋なべへ箸はしを着けちやならんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉のどもと元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪けしからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘うそである。こう云うと詭弁きべんのように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直しょうじき 正し 直じ 正し 銘めいのところを云うのである。いったい人間は、自分を四角張つた不ふ変へん体たいのように思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押ひらおしに他人ひとを圧おしつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟りくつも立つが、自分で自分をきゆきゆ云う目

に逢^あわせて嬉^{うれ}しがってるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎^{とが}めて、万事万端向うがわるいように噪^{さわ}ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨^{にら}んで、旗を揚^あげる人達である。御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名にはこんなのが多くて、話が分り悪^{にく}くって、困るもんだ。自分もあの時駆^{かけ}落^{おち}をせずに、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始^し終^{じゆう}動^{どう}しているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変つちや大變だ、罪惡だなどとかよくよ思^{おも}って、年を取^とつたら——ただ学問をして、月給をもら

つて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見^{げんざん}参しなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流^{るてん}転と、あらゆる漂^{ひようはく}泊と、困^{こんばい}憊と、懊^{おうの}惱^うと、得^{とく}喪^{そう}と、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもちとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら——ありがたい事に自分はこの至大なる資^{たまもの}を有^もつている、——すべてこれらがなかつたならば、自分はこんな思い切つた事を云やしない。いくら思い切つた事を云つたつて自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神^{しんびよう}妙^{びよう}なもの、今横着になるくらいだか

ら、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙にならんとは限らない。――
抜けそうな足を棒のように立てて聞くと、がんと鳴つてる耳の中へ、遠くからさあさあ水音が這入はいってくる。自分はますます神妙になった。

この状態でだいぶ来た。何里だか見当けんとうのつかないほど来た。

夜道だから平生へいぜいよりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹でこぼこの登りを膨ふくらつ脛ばきが腫はれて、膝ひざ頭がしらの骨と骨が擦すれ合

つて、股ももが地面じびたへ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのつて――それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵さ

んの尻を五六間と離れずに、やって来た。これはただ神妙に自己あきらめていを没却した諦の体たらくから生じた結果ではない。五六間以上おく後

れると、長蔵さんが、振り返って五六歩ずつは待合してくれるから、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずだらだら、ちびちびに自己を奮興ふんこうさせた成なりゆき行に過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後が見えたものだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突つ切つて、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおむいた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御題おだいもく目のように見詰めて覘ねらいをつけて来たせ

いで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちやんと赤毛布に見えるんだろう。信心の功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ない。自分はこう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至っては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちやんと五六間以上になると留とまってくれる。留まってくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだった。とうてい素しろうと人に行かない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだなど、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと

並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。まるで人形のように活動する男であった。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遥はるかに取り扱いやすかったに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後あとになるんだらうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうくらいの了り簡ようけんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをぴしやりぴしやりと鳴らしながら凸で凹こぼこ路を飛び跳はねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かなわないと覚悟をしたのは、よつぽど前の事である。それでもしばらくの間はぴしやりぴしやりが自分の袖そでと擦すれ擦すれくらいになつて、登つて来たが、今じゃもう自分の近所には影さえなくなつた。並

んで歩くうちは、あまり小僧の癖に活澆かっぱつにあるくんで——活澆
 だけならいいが、活澆の上に非常に沈黙なんで——、随分物騒な
 心持ちだった。もし笑うなら、極めて小さくきわつて、非常に活澆で、
 そうして口を利きかない動物を想像して見ると分る。滅多めったにありや
 しない。こんな動物といつしよに夜山やまごえ越をしたとすると、誰だ
 って物騒な気持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、
 妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠こうもりのようだと云ったが、全く蝙
 蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠
 とたった二人限ふたりぎりだったら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋さむしい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異いな感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、おおいと人を呼ぶ奴は気味がよくない。山路で、黒闇くらやみで、人つ子一人通らなくつて、御負おまけに蝙蝠みちづれなんぞと道伴みちづれになつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さんが事ありげに声を揚げたあんである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分を呼んだんなら、何か起つたなとびくんとするだけで済むんだが、五六間後うしろから行く自分の注意を惹ひくためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違う。こつちを向いた

声じゃない。おおいと右左りに当つたが、立ち木に遮かへぎられて、細い道に向うの方へ遠く逃げのびて、遥はるかの先でおおいと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちやいなかった。

自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。

先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よつぽど蝙蝠たたに崇たられていたに違あない。この崇あは翌朝あしたになつて太

陽が出たらすつかり消えてしまつて、自分で自分を何て馬鹿だろ
うと思つたくらいだが、實際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ち
よつと烈はげしく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがない
もんだから、人魂ひとたまの尻尾しつぽのように、幽かすかに消えて、その反動か、
有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、——何とも返事が
ない。この反響が心細く継続つながりながら消えて行く間、消えてから、
すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と自分
と三人が、暗闇くらやみに鼻を突き合せて黙つて立っていた。あんまり
好い心持じやなかつた。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云った。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意気な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合つちまった。定めし変な顔をして受合つたんだろうが、受合つたら急げても、急げなくてもむちやくちやに急いでしまった。

この間はどこをどんな具合に通つたか、まあ断然知らないと云つた方が穏当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留つたんで、ふと気がついた。すると一つ家の前ひとやへ出ている。ランプが点ついている。ランプの灯ひが往来へ映っている。はつと嬉しかった。赤毛布あかげつとが
ありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでゐる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるとはまるで思いがけなかつたし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやつて来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入つて来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだをつくづく感心した。ランプがこんなにありがたかつた事は今日までまだかつてない。後から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛をして、そこで自分達を待つてたんだそうだ。おおいと云う声も小僧やあと云う声も聞えたんだが返事をしなかつたと云う話した。偉い奴だ。

同勢はこれでようやく揃つたが、この先どうなる事だろうと

思いながら、相変らず神しんびよう妙まうにしていると、長蔵さんは自分達を路傍みちばたに置きつ放しにして、一人で家の中うちへ這入って行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じやもつたいたい。牛さえいれば牛小屋で馬さえ嘶なけば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかは何にもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉たててある。残る半分は夜つびて明けて置くんじやないかしら。ことによると、敷居みぞの溝みぞに食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁わらぶき葺きで、その藁が古くなって、雨に腐ふやけたせいか、崩くずれかかつて漠然ぼくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分らないほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入って行つた。なんだ

か穴の中へでも潜り込んで行ったような心持だった。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜に差ししてくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫なものである。この男はたとい地震がゆつて、梁が落ちて来ても、親の死目に逢うか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違ない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こつちを向いて立った股倉またぐらから、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間にか低くなったと見える。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊とまつて行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神しん妙びょうが急に破裂して、身体からだがぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明あかす事が、それほどの慰藉いしやを自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、とんと気がつかなかった。やはり神妙の結果泊る所が見つかつて、泊る気が起らなかつたんだらう。こうなると人間ほど御ぎよしやすいものはない。無理でも何でもはいはいは畏かしこまって聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大おおに嬉うれしがる。当時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなど云う自信とみなが伴ともなつてくる。兵隊はああでなくつちやいけないな

どと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと云う事も悟った。——こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくつて解らない。実を云うと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにもむずかしくなっちゃまった。例^{たと}えば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見^{みな}做す事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲むものだとさえ気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種の境^{きょうがい}界^{がい}に馴^ならされていくからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺^{まひ}させた結果としてでき上るもんだから、図に乗

つてきゆきゆ押しで行くと、人間がみんな馬鹿になつちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日こんにちまで生きていたならば、いかに順良だつて、いかに励精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるからは、たまには怒おこるがいい。反抗するがいい。怒るように、反抗するよ
うにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたり
するのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだ
の毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗
させないように、御膳立おぜんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云っていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のような身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、七日七なぬかななば晩引んつ張りつづけに引つ張ったつてちよつとも動きやしない。

今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが人間たるところだと思つてる。分りやすいように長蔵さんを引ひきあ

合いに出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間ごとに變つてゐる。變るのが当然で、變るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云う意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつても同じ事に歸着する。嘘うそだと思ふなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなん

て罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たつて、以上わかり分ツこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては済まない。こんな景気のいいタンカを切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うとこう云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦にがい顔をして謝罪あやまっていた。自分ながら、どうも困ったもんだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくつちや信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を

置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやっぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減って飯が食いたくなくなって、御腹が張ると眠くなって、窮きゆうして濫らんして、達おこなして道を行って、惚ほれていっしょになつて、愛想あいそが尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変の沙汰さたである。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむ

ずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の気焰きえんをやめて、再びもとの神しん妙びょうな態

度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立つて、

往來を向きながら、ここへ泊つて行こうと云い出した時、こんな

破屋あばらやでも泊る事が出来るんだつたと、始めて意識したよりも、

すべての家と云うものが元がんらい來泊るために建ててあるんだなど、

ようやく気がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それ

でいて身体からだは蒟こん蒻にやくのように疲れ切つてる。平生いつもなら泊りたい、

泊りたいですべての内臓が張切れそうになるはずなのに、没自我ぼつじが

の坑夫行こうふゆき、すなわち自滅の前座としての墮落と諦めをつけた上

の疲労だから、いくら身体に泊る必要があっても、身体の方から魂へ宛てて宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下ったんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、実際この時の心の状態は、こう譬^{たとえ}を借りて来ないと説明ができない。自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛^{ゆる}んで、立ち切れない足を引き摺^ずつて、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛^{あかげつ}布^とはそのそ這^{はい}入^いってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履^{ぞうり}の尻が勢よく踵^{かかと}へあたるんで、ぴしやぴしや云

う音が飛ぶように思われた。

這入つて見るとふんと臭におつた。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をびくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着むとんじやくであつた。土間から上へあがる段になつて、雑ぞうきん巾でもと思つたが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がつちまつた。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺ながめていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がっている。自分は尻だけおろして、障子しょうじ——障子は二枚

あつた——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立てあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間まから茶と煙草盆たばこぼんを持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶ尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大変な誤解をしていたんだねと呆れ返あきかえるものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そうして長蔵さんと談話はなしをし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借が

あるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入った時に、残らず聞いてしまったんだろう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑気屋のんきやを銅山やまへ連れて行くんで、自然その往き還りにはこの主人の厄やっかい介かいになりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠いねむりを始めた。いつから始めたか知らない。馬を売うり損そこなって、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしなくなつて、自然じねんと長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が

消えて、破屋あばらやまでも消えた時、こくりと眠ねむりが覚さめた。気がつく
と頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡もちやげるとはなはだ重
い。主人はやつぱり馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてゐるうち
に、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして
打遣うちぢやつて置くと、忽こつぜん然ぜんぱつと眼があいた。薄暗い部屋うちの中に、
影のような長蔵さんと亭主が膝ひざを突き合せてゐる。ちようど、借かり
がどうとかしてハハハハと亭主が笑つたところだつた。この亭主
は額ひたいが長くつて、斜はすに頭てつぺんの天てつぺん辺ひっこまで引込んでゐるから、横から見
ると切通きりとおしの坂さかくらいな勾配こうばいがある。そうして上になればな
るほど毛はが生はえている。その毛は五分ごぶくらいなのと一寸いっすんくらい
なのとが交まじつて、不規則まばらにしかも疎まばらにもじやもじやしてゐる。自

分が居眠りからはつと驚いて、急に眼を開けると、第一にこの頭が眸ひとみの底に映った。ランプが煤すすだらけで暗いものだから、この頭も煤だらけになって映つて来た。その癖距離は近い。だから映つた影は明瞭めいりょうである。自分はこの明瞭でかつ朦朧もうろうなる亭主の頭を居眠りの不知覚から我に返る咄嗟とつさにふと見たのである。この時はあまり好い心持ではなかつた。それがため、居眠りもしばらく見合せるような気になって、部屋中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布けつとの下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴あが開いて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯ひがあたるから、よく見ていると、

藁葺わらぶきの裏側が震ふるえるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一いっそ足飛くたびに正氣へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼だけ開けても氣は判はつきり然しない。ぼんやりと世界に歸つて、またぞろすぐと不覺に陥おちいつちまう。それから例のごとく首が落ちる。微かすかに生きてるような氣になる。かと思うとまた一切空いっさいくうに這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつたのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覺さめた時は、

もう居眠りいねぶはしていなかった。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなっていた。そうして涎よだれを垂れている。——自分は馬の話の聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金の話の聞いて、また居眠りの続を復習しているうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰おときたを聞かなかつたんだから、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ツ繰り返つてるのを見るや否いなや、眼をあいて涎よだれを垂れて、横になつたまま、じつとしていた。自覚があつて死んでたらこんなだろう。生きてるけれども動く気にならなかつた。昨夜ゆうべの事は一から十までよく覚えてゐる。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくつて、

かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間、厚い仕切りが出て、^{せつぜん}截然と区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が^{あて}当にならなくなる。要するに人世は夢のようなものだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、ううんと伸^{のび}をして、寝たまま握^{にぎ}り拳^{こぶし}を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦^{こす}つて、腕のありたけ出たところで、勢^{せい}がゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹^{くぼ}んだ頬つぺたをぼりぼり搔^かき出した。起きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、

やっぱり眼が覚めていないと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太ねだが抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあって、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘ひじの高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたつて際限がないから、起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布あかげつとばかりである。これはまた呑気のんきなもんで、依然として毛布けつとから大きな足を出してぐうぐう鼾いびき声をかいて寝ている。それを長蔵さんが起す。――

「御前おまえさん。おい御前さん。もう起きないと御午おひるまでに銅山やまへ行

きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺り始めたんで、やむを得ず、毛布の方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端はんぱに立ち上った。これでみんな起きたよ
うなもの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか迷
つてると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云つて、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降る。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうな

ると自分も何とか片をつけなくつちやならないから、一番あとから下駄を突掛^{つツカ}けて、長蔵さんと赤毛布^{あかげつと}が草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を結ぶのを、不景気な懐^{ふところ}手^でをして待つていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯^{あさめし}を食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅^{ぜいたく}沢^{たく}の沙汰^{さた}のように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の結果、必要とまで見^{みな}做^なされているものが、急に余計な事になつちまうのはおかしいようだが、その後^{のち}この顛^{てんとう}倒^{とう}事件^{じけん}を布^ふ衍^{えん}して考^くえて見^みたら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやつてる事が当然になつて、一人だけでやる事が余計のように思われるんだから、当然になろうと思つたら味方^{こしら}を大勢^{こしら}拵^{こしら}えて、さも当然である

かの容子ようすで不当な事をやるに限る。やっでは見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布でさえ自分にはこれほどの変化を来たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだらうね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいやな根性こんじょうが幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期に反した起きたなり飯抜きの出立しゅつたつに、自然不平の色が出ていたためだろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつと両人たりにも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無やどなしか、または準宿無しでなくつちやならない。目が醒さめて、夜が明けてるのに、汁の煙けむも、漬物の香におも、いっそう連想に乗つて来ないからは、行きなり放題

に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養くようをする香気屋のんきやで、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸さいわいな人間である。自分は十九年来始めて、こ
う云う人間と一つ所ところに泊とつて、これからまたいっしょに歩き出す
んだなと思った。赤毛布と小僧の顔色を伺うつて見ると少しも朝飯
を予期している様子がないんで、双方共朝飯を食くい慣なけていない
一種の人類だと勘かづいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先
から、もう、坑夫以下に摺すり落ちていたと云う事が分わつた。しか
し分わつたと云うばかりで別に悲しくもなかつた。涙は無む論出なな
かつた。ただ長蔵さんが、この朝飯の経きん験げんに乏とほしい人間に向むつて、
「御前さん達も飯いが食くいたいかね」と尋たずねてくれなかつたのを、

今では残念に思つてる。食つた事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨励されて「食いたい」と答えるか。——つまらん事だがどつちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立つて、ちよつと後ろを振り返つたが、

「熊さん、じゃ行つてくる。いろいろ御世話様」

と軽く力ちから足を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、

まだ奥で寝ている。覗のぞいて見ると、昨夕ゆうべうつつに気味をわるくし

た、もじやもじやの頭が布団ふとんの下から出ている。この亭主は敷しき

蒲団とんを上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじや

もじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうし

て熊さんの顔が出た。この顔は昨夜見たほど妙でもなかった。しかし額がさかに瘡こけて、脳天まで長くなつてゐる事は、今朝でも争われない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構おかまい申さなかつた」

と云つた。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけている。

「寒かなかつたかね」

とも云つた。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後うしろから、熊さんが欠あくびびま伸ま交まじりに、

「じや、また歸りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足後おくれて、小僧と赤毛かげつと布つとの尻を追つ懸かけて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中には慣なれ切つたものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午ひるまでには銅山やまへ着かなくつちやならないから急ぐんだそうだ。なぜ午までに着かなくつちやならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇氣がなかつたから、黙つて食つついて行つた。するとなるほど登のぼりになつて来た。昨夕あれほど登つたつもりなのに、まだ登るんだから嘘うそのようでもあるが実際見渡して見ると四方しほうは山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があるんだから馬鹿馬鹿しい

ほど奥へ這入るはい訳になる。この模様では銅山どうざんのある所は、定めし
 淋しいだろう。呼吸いきを急せいで登りながらも心細かつた。ここまで
 来る以上は、都へ帰るのは大変だと思つと、何の酔すいきよう興きようで来た
 んだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出しゅっぽん奔ほんし
 たんだから、おいそれと帰りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目
 に懸かからないように、朽果くちはててしまうのはむしろ本望である。自
 分は高い坂へ来ると、呼吸を継つぎながら、ちよつと留つては四方
 の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すげい
 ほど木を被かぶつている上に、雲がかかつて見る間まに、遠くなつてし
 まう。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適當かも知れな
 い。薄くなつた揚句あげくは、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、

今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そう
かと思うと、雲の方で山の鼻はなづら面を通り越して動いて行く。しき
りに白いものが、捲まき返しているうちに、薄く山の影が出てくる。
その影の端がだんだん濃くなって、木の色が明かになる頃は先刻さつき
の雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の
雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいに
は、どこにどんな山があるかいつこう見けんとう当あがつかなくなる。立
ちながら眺ながめると、木も山も谷もめちやめちやになって浮き出し
て来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届あたりく辺まで
落ちかかった。長蔵さんは、

「こりや、雨だね」

と、歩きながらひとりごと独言を云った。誰も答えたものはない。四よつた
人とも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲まかれるような、
また埋うずめられるような有様で登って行つた。自分にはこの雲が非
常に嬉しかった。この雲のお蔭かげで自分は世の中から隠したい身体からだ
を十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせず
にその中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉とじ籠こめられた
ような窮屈ほうつづも覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生き
ながら葬ほうぶられると云うのは全くこの事である。それが、その時の
自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。
ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、ま
あ安心だと、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやし

ない。全くの氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌あすが日にも、また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾わが身みで吾が身が保証出来ないような、また吾が身が吾が身でないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまったり、隔へだてられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布けつとが赤くなったり白くなったりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなったり薄くなったりする。そうして誰も口を利きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から

切り離された四つの影が、後あとになり先になり、殖ふえもせず滅へりもせず、四つのまま、引かれて合うように、弾はじかれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になったんだから、世の中は自分共にたった四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿やど無なしである。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷って歩く連中である。この連中と道みちづれ伴なになつて登り一里、降り二里くだを足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になつた。時計がないんで何時なんじだか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午ひるすぎ過すぎとも云われるし、また夕方と云つても

差さしつかえ支つかえない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微かすかに見える山の色であつた。その色が今までのとは打つて變つてゐる。いつの間にか木が抜けて、空坊主からぼうずになつたり、ところ斑まだらの禿はげ頭あたまと化けちまつたんで、丹砂たんしゃのように赤く見える。今までの雲で自分と世間を一筆ひとふでに抹殺まつさつして、ここまでふらつきながら、手足だけを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒さめた気分になつた。色彩の刺激が、自分にこう強く応こたえようとは思いがけなかつた。——実を云うと自分には色盲じやないかと思ふくらい、色には無頓着むとんじやくな性質たちである。——そこでこの赤い山が、比較的烈しく自分の視神経を冒おかすと同

時に、自分はいよいよ銅山に近づいたなと思った。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたとも云えるが、実はこの山の色を見て、あかがねすぐ銅を連想したんだろう。とにかく、自分がいよいよ到着したなど直覚的に——世の中で直覚的と云うのは大概このくらいなものだと思うが——いわゆる直覚的に事実を感得した時に、長蔵さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言いたいような事を云った。それから十五分ほどしたら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすつて視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような

町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめのの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇いとまもないうちに通り越しちまった。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立って、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくつちや、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくつちやいけないんだか、ちつとも分らなかつたから、黙って橋の上へ立って、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。

そうして、所々に家がうち見える。やっぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古ぼけて禿はげててるのは山ばかりだった。何だかまた現実世界に引きひ摺り込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙って橋の向を覗むこき込んでるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明めい瞭りように答えたが、内心あまり好くはなかつた。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念けねんがある様子であつた。赤毛布あかげつとと小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かな

かった。頭からこの兩人は過去の因果で、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色がありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危ないなと睨まれていたのかも知れない。好い面の皮だ。

それから四人揃つて、橋を渡つて行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中で一番いかめしい奴を指して、あれが所長の家だと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシキだよ、御前さん、好いかね」
と云う。自分はシキと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつぽど聞き返そうかと思つたが、大方これがシキなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシキと云う言葉を明めいり瞭ように理解しなければならぬ身分になつたが、やっぱり始めにぼんやり考えついた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れていよいよシキの方へ這はい入る事になつた。鉄軌レールについてだんだん上のぼつて行くと、そこここに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまたで、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分のような一人ものは這入りたくたつて這入れないだつた。こう云う小屋の

間を縫つて、飽きずあに上のほつて行くと、今度は石崖いしがけの下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖がけ下したにあるんだから位地にも変りはないが、向むきだけは各々めいめい違つてる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅ぜいた沢くは言つていられない。やつとの思いで、ならした地面へ否いや応おうなしに、方角のお構かまなく建ててしまったんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思うと、いつの間まにかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待っていると、急に路そが外れて

遠くへ持つてかれてしまう。まるで見^{けんとう}当がつかない。その上この細長い家から顔が出ている。家から顔が出ているのが珍らしい事もないんだが、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がまた、尋常でない。青くつて、黒くつて、しかも茶色で、とうてい都会にいては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りながら、始めてこの顔を見た時は、シキと云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシキだなと感じた。しかしいくらシキでも、こう云う顔はたくさんあるまいと思つて、登つて行くと、長屋を通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しまいにはシキとは恐ろしい所だと思ふまで、い

やな顔をたくさん見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出ている顔はきつと自分らを見ていた。一種獐^{どうあく}悪な眼つきで見えていた。——とうとう午後の一時に飯場^{はんば}へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚^たき出しをするから、そう云う名をつけたものかも知れない。自分はその後^ご飯場の意味をある坑夫に尋ねて、篋^{べらぼう}棒^{ぼう}め、飯場たあ飯場でえ、何を云ってるんでえ、とひどく剣^{けん}突^つを食^{くら}った事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用しているんだから、滅^{めつ}多^たに意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑^{ひま}もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となってるんだから至極^{しごく}簡単でかつ全く実地的なも

のである。

そう云う訳で飯場はんばの意味は今もって分らないが、とにかく崖がけの下に散在している長屋を指さすものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ひとりぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布あかげつとと小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯めしを食うようになったんだと後あとから気がついた。二人の消息はその後のちいつこう聞かなかつた。銅山やまのなかでもついで顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一

膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降^{くだ}つて来た小僧と落ち合つて、夏の夜^よを後になり先になつて、崩^{くず}れそうな藁^{わら}屋^{やね}根の下でいっしょに寝^{あく}る日は、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏^{まと}まりそうで、纏^{まと}らない、云わばでき損^{そこな}いの小説めいた事がだ**い**ぶある。長い年月を隔^{へだ}てて振り返つて見ると、かえつてこのだらしなく尾を蒼^{そう}穹^{きゆう}の奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返つて思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懐^{おもむき}の趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖^{あい}昧^{まい}な点がないとこの夢幻の趣を

助ける事が出来ない。したがって十分に発展して来て因果の予期いんがを満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密の中にうち流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半いちやはんにち日の画えの方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくって好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神かみさんもそうである。もつと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記しるすだけである。小説のように拵こしらえたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法

則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいっしよであった。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極^{きわ}めて簡単なものであった。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使ってくれと云ったばかりである。自分の姓名も出^{しゅっ}生^{しやう}地^ちも身元も閱歴も何にも話さなかつた。もちろん話したくつたつて、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手つ取り早く片づける了^{りやう}簡^{けん}とは思わなかつた。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だつて、それ相応の手続がなくつちや採用されないもんだとばかり思っていた。

大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺すんだらう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭は——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかった。眉毛の太くつて蒼髯の痕の濃い逞しい四十恰好の男だった。——その男が長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作に云つちまつた。ちようど炭屋が土釜を台所へ担ぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々山越をして坑夫になりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹の中でこの飯場頭を恨んだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直に

分る。

飯場頭と云うのは一ひとつの飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了りようけん簡かんしだいでどうでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一いっぶんじかん分時間ぶんじかんに談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云つたなり、赤毛布あかげつとと小僧ごを連れて出て行つた。また歸つてくる事と思つたが、その後ごいつこう影も形も見せないんで、全く置去おきざりにされたと云う事が分つた。考えるとひどい男だ。ここままで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしても

ぼん引の手数料はいつ何時なんどきどこで取ったものか、これは今もつて分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄しやうぜん然ぜんとしていると、出て行く三人の後姿を見送った飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが変っている。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩出逢であう、万事を心得た苦労人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」
飯場掛はんばがかりの言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなっ

た。さんざつぱらお前さんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて、もうとうてい御前さん以上には浮ばれないものと覚悟をしていた矢先に、突然あなたの昔に帰ったから、思いがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつかしさと、それから過去の記憶——自分おとといはつい一昨日までは立派にあなたで通つて来た——それやこれやが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて来た上に、相手の調子がいかにも鄭寧ていねいで親切だから——つい泣きたくなつた。自分はその後ごいろいろな目に逢あつて、幾度となく泣きたくなつた事はあ
るが、擦すれ枯からしの今日こんにちから見れば、大抵は泣くに当らない事が多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜くちおしい、心細

い涙は経験で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他ひとから認識された時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前てまえ勘かんの強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になつてると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛はんばかりの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかつた。悄しやうぜん然ぜんとはしていたが、気は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思うように口が利きけないから、黙つて向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。――

「……まあどうして、こんな所へ御出おいでなすつたんだか、今の男が連れて来るくらいだから大概私わたしにも様子は知れてはいるが——どうです、もう一遍考えて見ちやあ。きつと取とツ附坑夫つけになれて、金がうんと儲もうかるてえような旨うまい話でもしたんでしよう。それがさ、實際やつて見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に出来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつこありませんよ。

……」

飯場頭はんばがしらはここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくつちやならない。幸さいわいこの時はもう泣きたいところを通り越

して、口が利けるようになっていた。そこで自分はこう云った。

「僕は——僕は——そんなに金なんか欲しかないです。何も儲け
るためにやって来た訳じゃないんですから、——そりや知ってる
です、僕だつて知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶して
いる。はなはだ穩かならぬ生意気な、ものの云いようだった。若い
うちは、たった今まで悄気しよげていても、相手しだいですぐつけ上つ
ちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、
何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長
蔵さんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺ほら

吹きであると言ふ真相をよく自覚していると云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入りに、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志願だなどと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合あわぬ篤とく実じつな男で、かつ自分の不経験を気の毒に思うのあまり、この生意気を生意気と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚おどろにつれて、僕は知つてるですを思い出しては独ひとり赧あかい顔を

していた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もつて自分は好い名だと思つてる。

原さんは別に厭いやな顔つきもせず、黙つて自分の言訳を聞いていたが、やがて頭あたまを振り出した。その頭は大きな五分刈ごぶがりで額の所が面摺めんずれのように抜き上がっている。

「そりや物数奇ものずきと云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるつたつて、何も家うちを出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時いちじの出来心なんだからね。やつて見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてるんだから、廃よすが好ようがしよう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したものであ、有りやしませんぜ。え？ そりや来る。幾いくたり人も来る。来る事は来るが、

みんな驚いて逃げ出しちまいます。全く普通なみのものの出来る業わざじやありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくったって、口くちすぎ過あだけなら骨は折れませんかやあ」

原さんはここに至って、胡坐あぐらを崩くずして尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しそうな按排あんばいである。大いに困った。困った結果、坑夫と云う事から気を離して、自分だけを検査して見ると、——何だか急に寒くなった。裕あわせはさっきの雨で濡ぬれている。洋袴ズボン下は穿はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の気候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは気が張っていたから、好かった。しかし飯場はんばへ来て休息した上に、坑夫になる見込

がほとんど切れたとなると、情ないのが寒いのと合併して急に顫え出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪えんほど醜いもんだつたろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置き去りにして、挨拶もせずに出て行った長蔵さんが恋しくなつた。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓口を長蔵さんに取られてから、懐中には一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減つて山の中で行倒になるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢えない事もない

だろう。逢つてこれこれだと泣きついたら、今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してくれまいものでもない。しかし別際に挨拶さえしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑ひまな事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好すきな原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなつた長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理由わけだろう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板行はんこうで押したように考えないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露みあらわしたり、片方かたっぱづかないように心を自由に活動させなくつてはいけない。

弱^{じやくはい} 輩^{はい} な自分にはこの機^き合^{あい}がまだ呑^のみ込^めめなかつたもんだから、原さんの前に立って顫えながら、へどもどしていると、原さんも氣の毒になつたと見えて、

「あなたさえ帰る氣なら、及ばずながら相談になろうじやありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切つて出られた時に、自分のはつとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはつと氣がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこの原さんを除いて、ほかにないんだと氣がついた。氣がつくと同時にまた口が利^きけなくなつた。是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やっぱり立ちすくんでいた。氣がついて

も何にもならない、ただ右の手で拳骨げんこつを拵こしらえて寒い鼻の下こすを擦こすつたように記憶している。自分はその前寄席よせへ行つて、よく嘸はなし家かがこんな手真似てつきをするのを見た事があるが、自分でその通りを實行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さんが、今度はこう云つた。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気かなげは肌かに着かいていない。のたれ死しじにを覚悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。まして慢性まの自滅じめつで満足する今の自分には、たとい白銅一箇わらじせんの草鞋わらじ錢せんでも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭あたまを地ちに摺すりつけても、

原さんから旅費を恵んで貰つたらう。實際こうなると廉恥れんちも品格もあつたもんじやない。どんな不体裁ふていさいな貰い方でもする。――

大抵の人がそうなるだらう。またそうなつてしかるべきである。

――しかしけつして褒めほられた始末じやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違う。人間の生地きじはこれだから、これで差さしつかえ

支しないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地あずきは小豆だから、

羊羹の代りに生小豆なまを嚙かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもししい料簡りようけんになつたものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の

足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遙はるかに高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らないで、生しょうがい涯がい練羊羹ばかり味わつてる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭はんばがしらからわずかの合ごうりき力を仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意ととので調べてくれる金も、二三日木賃宿やどで夜露を凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもなく流れ出さなければならぬと、冥々めいめいのうちに自覚したからである。自分は屑いさぎよく涙なみだきん金を断つた。断つた表向は律義りちぎにも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮せん索さくすると、慾よくの天秤てんびんに懸かけた、利害の判断から出ている事はたしかである。

その証拠には補助を断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやって見る気なんですから」

「随分酔すいきよう興きようですね」

と原さんは首を傾かしげて、自分を見つめていたが、やがて溜息のよ
うな声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」
と云った。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だって……」

「家うちなんかいいんです。坑夫になれなければ乞食こじきでもするより仕方かたがないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利きくのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出でにくいと知りながら、我慢して使つた結果、おのずと拍ひょうし子こに乗つて来た勢いに違ちがないんだから、まあ器械的きかくてきの変化と見倣みなしても差さ支しつかえなからうが、妙なもので、その器械的きかくてきの変化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌しゃべる。舌はかほどに器械的きかくてきなものである。——この器械きかくが使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分は

だんだん大胆になって来た。

いや、大胆になったから饒舌れたんだろう、君の云う事は顛あべこ倒べじゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもつともと首肯うなずくだろう。

自分は大胆になった。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌っておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覚して来た。一昨日家おとというちを飛び出す間際まぎわまでは、夢にも坑夫になろうと云う分別は出なかつた。ばかりではない、坑夫になるための駆落かけおちと事がきまっていたならば、何となく恥ずかしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔しゅつぽんの時期

を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない坑掘あなほりになり下る目的の逃亡とは、何不足なく生育そだった自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を噛かみしめながら、しよ
う事なしの押問答をしているうちに、自分はどうあつても坑夫に
なるべき運命、否いな天職を帯びてるような気がし出した。この山と
この雲とこの雨を凌しのいで来たからには、是非共坑夫にならなけれ
ば済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。
——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目まじめに書いて
るんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自
分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、まけおし 負けみだか、それとも行倒れになるのが怖くこわつて、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説いたくど。「……そう云わずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだやつて見ない事なんだから——せつかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐かいに、一日いちんちでも二日ふつかでも、いいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、とうてい役に立たないと事がきまれば帰ります。きつと帰ります。僕だつて、それだけの仕事が出来ないのに、押おしを強く御厄介ごやっかいになつてる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」
と昨日茶店の神かみさんが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立て

た。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴ふいちようする文句ではなかった。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやって御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗くのぞくように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだらう。自分も原さんといっしょに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の空そらあい合だ。この一瞬時に、自分の願かなが叶って、自分はまず山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云った原さんの言葉が、妙に気に掛り出した。人は、ようやく

の思いで刻下こつかの志を遂とげると、すぐ反動が来て、かえって志を遂とげた事が急に恨うらめしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取った時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日あしたの朝シキへ這入はいって御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりませんかね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のよなまやさししうに思われましようが、なかなか外で聞きいてるような生容易なまやさしい業わざじゃないんで。まあ取っつけから坑夫になるなあ」と云って自分の顔を眺ながめていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませぬね。坑夫でなくつても、好^ようがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくつちやならないと云う事がここで始めて分つた。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかになにかあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」

と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山^{やま}にはね、一万人も這入つててね。それが掘子^{ほりこ}に、シチュウ

に、やまいち山市に、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこつてえな、一人前の坑夫に使えねえ奴がなるんで、まあ坑夫の下したばた働らきです。シチュウは早く云うとシキの内なかの大工見たようなものかね。それからやまいち山市だが、こいつは、ただ石塊いしつころをこつこつ欠いてるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしよう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんなものですよ。それで坑夫となると請負うけおい仕事だから、間まが好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当ねんで年ねんじ中ゆう三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分は親方が取つちまって、病気でもしようもんなら手当が半分だから十七銭五厘です。それで蒲団ふとんの損料が一枚三銭——寒いときは

是非二枚要るから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜は別ですよ。———どうです。もし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかつたが、ここまで来れば、今更いまさらどうしたつて否いやだと断られた義理のもんじやない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠我慢やせがまんのつけ景氣げいきのごとく響いたか、その辺は確へんと分らないが、何しろこの一言いちごんを聞いた原さんは、機嫌よく、

「じやまあ、御上おあがんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入つて御覧なさるがいい。何しろ一万人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かつてると、毎日毎日何だかだつて、うるさい事ばかりでね。せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——いちんち一日に二三人はきつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思つと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。ともら葬いばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあやる気なら本氣にやつて御覧なさい。腰を掛けてちや、足が草臥くたびれるだろう。こつちへ御上り」

この逐ちくいち一を聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいち

だろうが一生懸命に働かなくっちゃあ、原さんに対して済まない仕儀になつて来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけつしてしまいときめた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出おいでなさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後あとから尾ついて行つた。小作こな婆ばさんさんで、後姿ごその華奢きゃしゃな割合には、ぴんぴん跳はねるようように活澆かつぱつな歩き方かたをする。幅あの狭い茶色の帯おびをちよつきり結むすびびにむ

すんで、なけなしの髪をかんざし頸ほんのくぼ窩へ片づけてその心しんぼう棒に鉛色の
 簪かんざしを刺している。そうしてたすきがけ襷たすきがけ掛かけであつた。何でも台所か――
 台所がなければ、――奥の方で、用事の真つ最中に、案内のため
 呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだらう。それと
 も山やまそだち育そだちだからかしら。いや、飯場はんばだから優ゆうちよう長ちようにしちやい
 られないせいだらう。して見ると、今日から飯場の飯を食い出す
 以上は自分だつて安閑としちやいられない。万事この婆さんの型
 で行かなくつちやなるまい。――なるまい。――と力を入れて、
 うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満し
 て、頭と胸の組織がちよつと変つたような気分になつた。その勢
 いで広い階はしごだん子段を、案内に応じて、すとなすとなと景気よく登

つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避たじろいだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。畳たたみ

数かずは何十枚だか知らないが遥はるかの突き当りまで敷き詰めてあつて、

その間には一重ひとえの仕切りさえ見えない。ちようど柔道の道場か、

浪花節なにわぶしの席亭せきていのような恰好かっこうで、しかも広さは倍も三倍もある。

だから、ただ駄々だだツ広い感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ

出たとしきやあ思えない。それだけでも驚く価値ねうちは十分あるが、

その広い原の中に大きな囲炉裏いろりが二つ切つてある、そこへ人間が

約十四五人ずつかたまっている。自分の決心が退避たじろいと云うの

は、卑怯ひきような話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強

がつていたにはいたが、若輩じやくはいの事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多めったに首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒いけどられたんだから、この黒い塊かたまりを見るが早いか、いささか辟易ひるんじまつた。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支さしつかえない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分ぶんが、申し合せたように、こつちを向いた。その顔が——実はその顔で全く畏縮いしゆくしてしまつた。と云うのはその顔がただの顔じゃない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと

云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ろと云うなら、ざつと話すが、——頬骨ほおぼねがだんだん高く聳そびえてくる。顎あごが競せり出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺つぼのように引ツ込んで、眼球めだまを遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う骨がごとごとく呐とっかん喊展開するとても評したら好かろう。顔の骨だか、骨の顔だか分らないくらいに、稜りょうりょう々たるものである。劇はげしい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取つたつて、ああなるもんじやない。丸味とか、温あたたかみ味とか、優やさしみ味とか云うものは薬にしたいくつても、探し出せない。まあ一口に云うと獐どうもう猛だ。不思議にも

この寧猛な相そうが一列一体の共有性になつて見えて、囲炉裏いろりの傍はたの黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間に寧猛な顔が十四五揃そろつた。向うの囲炉裏を取捲とりまいてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がつてくるとき、長屋の窓から自分を見下みおろしていた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでゐる総勢一万人の顔はことごとく寧猛なんだろう。自分は全く退避ひるんだ。

この時婆さんが後うしろを振り返つて、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸すを据すえて、寧猛の方へ近づいて行つた。ようやく囲炉裏はたの傍はたまで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐おすわんなさい」

と差さしずをしたが、ただ好加減いいかげんな所へ坐れと云うだけで、別に

設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊かたまりを避さけて、たつた

一人畳の上へ坐つた。この間寧猛な眼は、始しじゆう終ゆう自分に喰くつつい

ている。遠慮も何もありやしない。そうして誰も口を利きくものが

ない。取附端とりつきはを見出みいだすまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、

ぽつねんと独りひとぼつちで離れているのは、寧猛の目標めじるしとなるばかり

だし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、

器械的に「ここへ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振

り立てて階子段はしごだんを降りて行つてしまった。広い寄席よせの真中にた

つた一人取り残されて、楽屋の出方でかた一同から、冷かされてるよう

なものだ、^{てもちぶさた}手持無沙汰は無論である。ことさら今の自分に取つては心細い。のみならず^{あわせ}袷一枚ではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんかん炭を焼いて^た甕猛共が^{いろり}囲炉裏へあたつてるんでも分る。自分は仕方がないからてれ^{かく}隠しに^{シャツ}襯衣の^{ボタン}釦をはずして^{わき}腋の下へ手を入れたり、^{ひざ}膝を立てて、足の親指を^{つね}爪つて見たり、あるいは^{もも}腿の所を両手で^も揉んで見たり、いろいろやつていた。こう云う時に、落ついた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心^{しん}から落ちついて、平気で坐つてる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではとうてい^{おぼつか}覚束ない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な^{まね}真似をしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちようど下を向いて鳴海絞なるみしほりの兵児帯へこおびを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣った。見るとさっきの顔かおぞろい揃そろいで、眼がみんなこつちを向いて、光ってる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も獐どうもう猛もうで、よく見るとその獐猛どうもうのうちに、軽あ侮なごりと、嘲あざけり弄なごりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端とたんに発明した事実で、発明するや否や、非常に不愉快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒か

かったか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢におつたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄ますねえ」

と云つたものがある。この声はさつき「おい」よりも少し皺しやが枯れていたので、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たちの言葉でないから——字で書くと普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を倶利伽羅流くりからりゆうに崩くずしたんだから、はなはだ下等である。——それでやつぱり黙つてた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思つたよりも町ていねい噂であつた。ところが原さんは飯場頭はんばがしらである。頭かしらですらこ

れだから、平の坑夫は無論そう野卑ぞんざいじゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくぐちが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退避ひるむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいつその事毒突返どくづきかえしたなら、袋ふくろ叩たたきに逢あうか、または平等の交際あひまじが出来るか、どつちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかつた。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだろう。それにもかかわらず、兄あにいに類似した言語は無論、尋常の竹篋返しつぺいがえしさえ控えたのは、——相手にならないと先方さきを軽蔑けいべつしたためだろうか——あるいは怖こわくつて何とも云う度胸がなかつたんだらうか。自分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後の方らしい。とにかくも両方交まじ

つてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖いこわものが沢山いくらもある。矛盾にやならない。

それはどっちにしたって構わないが、自分がこの悪あくたい口くちを聞いたなり、おとなしく聞き流す料りょうけん簡かんと見て取った坑夫共は、面白そうにどつと笑った。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手あつちにしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸さいわいと嘲弄ちやうろうするのである。自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨うらみを、吾身わがみ一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入はいるまでは、自分こそ社会に立てない身体からだだと思ひ詰めていた。そこで飯場はんばへ上あがつて見ると、自分のような人間は仲間にし

てやらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立って、立派に板いたばさ挟みとなつた。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰てもちぶさたと云うよりは、情なさけないほど不人情な奴が揃そろつてると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だつて、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否や、畜生奴ちくしようめと思つた。俗語に云う怒おこつた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離

がだいぶん詰つてるから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使っていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切なかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿くるに包んで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意みに充ちた笑がようやく下火になると、

「御前おめえはどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つていたので、声の出所でどころは判然はつきり分つた。浅黄色あさぎいろの手て拭染ぬぐいじみた三尺帯を腰骨の上へ引き廻して、後うしろむ向きの胡坐あぐらのまま

ま、斜はすに顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜けつまくが一面に充血している。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹へこまして、愚弄ぐろうの笑いを洩もらしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎あごでしやくつた。するとこの相図を受けた、願人坊主がんにんぼうずが、入れ替ってこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生しよせツ坊ぼだな。大方おおかた女郎買でもしてしくじつたんだらう。太え奴だ。全ぜん体てこの頃の書生ツ坊の風儀が悪くつていけねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く帰けえれ。そんな瘡やせつこけた腕うででできる稼業かぎようじゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張合はりあいが抜けた
せいか、わいわい冷かすのが少し静まった。その時一人の坑夫—
—これは尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらい
に眼鼻立ととのが調っていた。自分は、冷かさながらも、眼を上げて、
黒い塊かたまりを見るたびに、人数にんずやら、着物やら、獰猛どうもうの度合やらを
だんだん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼
でできた上に獣慾あぶらの脂が浮いているところばかり眼に着いて、ど
れも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重な
るにつけて、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫
だけが—際ひとときわ目立って見えるようになった。年はまだ三十にはな
るまい。体格は倔強くつきようである。眉毛まみえと鼻の根と落ち合う所が、

一段奥へ引つ込んで、始終鼻眼鏡で押しつけてるように見える。そこに疖癩かんしやくが拘泥こうでいしていそうだが、これがために寧猛の度はかえつて減ずると云つても好いような特徴であつた。——この坑夫が始めてこの時口を利きいた。——

「なぜこんな所へ来た。来たつて仕方がないぜ。儲もうかる所じやない。ここにゐる奴あ、みんな食くい詰つめものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰つて新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通かよつたもんだが、放蕩ほうとうの結果とうとう、シキの飯を食うよになつちまつた。おれのようになつたが最後もう駄目だ。帰ろうたつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ帰つて新聞配達をしろ。書生はとても一ひと月つきと辛抱は出来ないよ。悪い事は云

わねえから帰れ。分つたろう」

これは比較的眞面目な忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの獐悪派どうあくはもおとなしく交まぜつ返しもせずまぜに聞いていた。その情性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だつた。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの変化はあれ、やっぱり一つ穴でこつこつ鉋塊あらがねを欠いている分の事だろう。そう芸こうに拙せつのあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ちがない。自分は今こんなに馬鹿にされている。

ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされぬ人非人にんびにんとして、多勢たせいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首を突つっこ込んで、獐どうも猛組うぐみの一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらいの勢力を得る事はできるかも知れない。できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。——随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつていようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましょうと云う返事もしなかつた。そのうちいつたん静まぐろりかけた愚弄ぐろの舌したがまた動き出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑み込んで置かなくつちや迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょうでえぶんもあるじゃねえか」

と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙つていようかしらんとお思ったけれども、万一掟を破つて、あとで苛ひどい目に逢あうのが怖こわいから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫ほかが、すぐ、返

事をした。

「しよあのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫になろうなんて料簡りようけんちげ違えだ。早く帰れけえ」

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲けもうようたつて、そう旨うまかあ行かねえ。帰れ」

「儲かるもんか帰けえるが好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも実際自分のためを思って帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うんである。さぞ儲もうけたいだろうが、そうは問屋おろで卸さない、こちとら

だけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うんである。あきらしたがってどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの囲炉裏いろりの周囲まわりばかりにやいない。さつきちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になつて、黒く塊かたまつている。こつちの団体だけですら持ち扱つているところへ、あつちの群勢ぐんせいが加勢かじしたら大事だいじである。自分は愚弄ぐろうされながらも、時々横目を使つて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまう。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように自分の心が、

左右前後と離れ離れはなになつて、しかも独立ができないものだから、物の後あとを追掛おつかけ、追廻つらわしているほど辛い事はない。なんでも敵に逢あつたら敵を呑のむに限る。呑む事ができなければ呑まれてしまふが好い。もし両方共困難ならぶつりと縁きを截きつて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持つてく事も出来ず、しかも敵の尻かを嗅かがなければならぬとなつて、はなはだしき損となる。したがつてもつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦しゃかの空説法からぜつぽうである。もし講釈をしないでも知れ切つてる陳説ちんせつなら、なおさら言うだ

けが野暮やぼになる。どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がつかなくって困る。

自分が四方八方に気を配って、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、

「御膳ごぜんを御上がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間に婆さんが上がって来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなって、萎縮いしゆくした真最中だったから、御膳の聲が耳に入るまではまるで気がつかなかった。見ると剥はげた御膳おぜんの上に縁ふちの欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃めしびつも乗っている。箸はしは赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆うるしが半分ほど落ちて木地きじが全く出ている。御菜いごんには糸蒟こんにゃ

蕪くが一皿ついていた。自分は伏目になってこの御膳の光景を見
 渡した時、大いに食いたくなくなった。実は今朝けさから水一滴も口へ入
 れていない。胃は全く空からである。もし空でなければ、昨日食きのうつた
 揚げまんじゅうあげまんじゅうと薩摩芋さつまいもがあるばかりである。飯の氣けを離れる事約
 二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御お
 櫃はちの影を見るや否や食慾は猛然として咽喉元のどもとまで詰め寄せて来た。
 そこで、冷かしも、交まぜつ返しも氣に掛ける暇いとまなく、見栄みえも糸瓜へちま
 も棒に振つて、いきなり、お櫃はちからしやくつて茶碗へ一杯盛り上
 げた。その手数てかずさえ面倒なくらい待ち遠しいほどであつたが、例
 の剥箸はげばしを取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段にな
 って——おやと驚いた。ちつともすくえない。指またの股またに力を入れ

て箸をうんと底まで突っ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、
やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けっして茶
碗の縁ふちを離れようとしない。十九年来いまだかつてない経験だか
ら、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、
はてなと箸はしを休めて考えた。おそらく狐つまに撮つままれたような風であ
ったんだらう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。
自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうし
て光沢つやのない飯を一口掻かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よ
りも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿ったと思うくらいに
変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁
土つばきが唾液つばきに和とけて、口いっばいに広がった時の心持は云うに云わ

れなかつた。

「面つらあ見ろ。いい様さまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの気でいやがらあ。だから帰けえれ

つて教おせえてやるのに」

と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りつから料り
ようけんちげえ

簡 違だだ」

とまた一人が云った。

自分ちようろうは嘲弄ちようろうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを呑み下した。一口で

やめようと思つたが、せつかく盛り込んだものを、食つてしまわ

ないと、また冷かされるから、熊の胆いを呑む気になって、茶碗に盛っただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日きのう食った揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始てである。

茶碗に盛つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛よそう気にならなかつたから、糸蕪いとごんにやだけを食べつて箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭いやなものも口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。その時は随分つらい事と思つたが、その後ご日に三度ずつは、必ずこの南京米むかに対わなくつちやならない身分となつたんで、さすが

の壁土も慣れるに連れて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食つてしかるべき滋味と心得るようになってからは、剥膳はげぜんに向つて逡巡しりごみした当時がかえつて恥ずかしい気持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更まんざら無理ではない。今となると、こんな無経験な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病むところに廻り合わせて、現状を目撃したら、ことに因よると、自分でさえ、笑うかも知れない。冷かさないまでも、善意に笑うだけの価値ねうちは十分あると思う。人はいろいろに変化するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金盃かなだらひを叩たた

き合せるような音がした。一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃららんと時を句切くぎつて、拍子ひょうしを取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄きやりの声が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空気に、じゃじゃん、じゃららんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジャンボード」

と一人が膝ひざ頭がしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジャンボード。ジャンボード」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになって、窓の方へ

立つて行つた。自分は何がジャンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達のんびりしたせいか、自分もジャンボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元気も出来た。つくづく考えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲すもうをとつて暮らしていると云つても差さしつかえ支かえなからう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうしてやつぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞ふさがっている上から背せえのび伸のびをして見みおろすと、斜はすに曲まつてる向むこうの石垣の角から、紺こんの筒袖つつそでを着た男が二人出たふたあり。あとからまた二人出た。これはいづれも金盥おをおつぶして薄うすつ片ぺらにしたようなものを両手に一枚ずつ持っている。

ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃん
と打ち合わせた。その不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、
後の禿山うしろ はげやまに響いて、まだやまないうちに、じやららんとまた一
組あとが後から鳴らし立てて現れた。たと思うとまた現れる。今度は
金盃きんづきを持っていない。その代り木唄——さつきは木唄と云つた。
しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪な
花節にわぶしで咄とつかん喊こゑするような稀代きたいな調子であつた。

「おい金公きんこうはいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴どなつた。後向うしろむきだから顔は見えない。すると、
「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ

六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覚悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がいる事かと、自分も後を追つ懸けて、首を捻じ向けると、——寝ている。薄い布団をかけて一人寝ている。

「おい 金州」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゆう起きろやい」

と怒鳴どなりつけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎むかえに出掛けた。被かぶつてる布団ふとんを手荒に

めくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支えられて立ち上つた。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那、

その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄ぞつとした。これはただ保

養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで

起居たちいのできないような重体の病人である。年は五十に近い。鬍ひげは

幾日そも剃らないと見えてぼうぼうと延びたままである。いかな瘰ど

猛うもうも、こう憔悴やつれると憐あわれになる。憐れになり過ぎて、逆にまた

怖こわくなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れの極きよく全く怖こわか

つた。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利きかない足を運ばして、窓の方へ近寄ってくる。この有様を見ていた、窓際の多た人数にんずは、さも面白はそうやに嘸はし立たてる。

「よう、金きんしゆう早く来いよ。今ジャンボーが通るところだ。早く来て見ろよ」

「己おらあジャンボーなんか見たかねえよ」

と病人は、無む体たいに引ひき摺ずられながら、気のない声で返事をするうちに、見みたいも、見みたくないもありやしない。たちまち窓の障しょう子じの角かどまで圧おしつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃららんとジャンボーは知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽つきないのかと、また背延せいびのをして見み下おろ

した時、自分は再び慄とした。金盃かなだらいと金盃かなだらいの間に、四角な早は桶やおけが挟はさまつて、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾しろかなきんで包んで、細い杉丸太を通した両端りょうたんを、水でも一荷いっか頼まれたように、容赦なく担かついでいる。その担いでいるものまでも、こつちから見ると、例の唄うたを陽気にうたつてるように思われる。——自分はこの時始めてジャンボの意味を理解した。生しょうがい涯がいいかなる事があつても、けつして忘れられないほど痛切に理解した。ジャンボ―は葬式である。坑夫、シチュウ、掘子ほりこ、山市やまいちに限つて執行される、また執行されなければならぬ一種の葬式である。御経の文句を浪花節ななわぶしに唄うたつて、金盃つぶの潰れるほどに音楽を入れて、一い荷つかの水と同じように棺桶かんおけをぶらつかせて——最後に、半死半生

の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪氣きよくの極で、また冷刻の極である。

「金しゆう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云つてる。病人は、

「うん、見えたから、床とこん所まで連れてつて、寝かしてくれよ。

後ご生しょうだから」

と頼んでゐる。さっきの二人は再び病人を中へ挟んで、

「よつしよいよつしよい」

と云いながら、刻きざみ足あしに、布ふ団とんの敷敷いてある所まで連れて行つた。

この時曇つた空が、粉こなになつて落ちて来たかと思われるような

雨が降り出した。ジャンボ―はこの雨の中をたた敲き立てて町の方へ下くだつて行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々めいめい 囲いろり 炉裏はたの傍へ帰る。このどさくさまぎれ 混雑どさくさまぎれ 紛まに自分もいつの間にかどうもう 獰猛どうもうの仲間入りをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意しよさの所作しよさでもあつた。と云うものは火の気がなくなつてははなはだ寒あわせい。拾あわせ一枚ではとてもしの凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいなかす微かな粒であるが、四方のはげやま 秃山はげやまを罩こめ尽した上に、筒つつぬ拔けの空を塗り潰つぶして、しとどと落ちて来るんだから、家うちの中に坐うつていて

さえ、糠ぬかよりも小さい湿しめり気けが、毛穴から腹の底へ沁しみ込むような心持である。火の気がなくつてはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも調戯からかわれずに済んだ。これはこつちから進んで獰猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獰猛として取扱うべき奴だど勘弁してくれたのか、それとも先刻さつきのジャンボーで不意に気が変わった成行なりゆきとして、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑ひやかしの種が尽きたか、あるいは毒突どくづつくのに飽きたんだか、――何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的楽になった。

そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャンボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。――

「あのジャンボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たつて御おジャンボーだ」

「ことによると黒市組くろいちぐみかも知れねえ。見当けんとうがそうだ」

「全ぜん体ていジャンボーになつたらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限てらぎりで留とまりっこねえ訳だ。どつかへ行くに違ちがえねえ」

えねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所ところだろうてえんだ。やっぱしこ

んな所ところかしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「己おれもそう思ってる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極ごく楽だつて、やっぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。

それで始めのうちは冗じょうだん談だと思つた。笑つても差さしつかえ支つかえない

ものと心得て、口の端はたをむずつかせながら、ちよつと様子を見渡したくらいであつた。ところが笑いたいのは自分だけで、囲炉裏

を取り捲まいている顔はいずれも、彫りつけたように堅くなっている。彼らは真劍の真面目で未来と云う大問題を論じていたんである。実に嘘うそとしか受け取れないほどの熱心が、各々の眉まゆの間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥いちべつして、さっきの笑いたかつた念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カンテラを提さげて、シキの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡りょうけんでいる人間が——人間の器械で、器械けだものの獣とも云うべきこの獰猛組どうもうぐみが、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であった。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用いりようのはずだ。実際自分が眼を上げて、囲炉裏いろりのぐるりに胡坐あぐらをかいて並んだ連中を

見渡した時には、遠慮に畏縮いしゆくが手伝つて、七分方しちぶがたでき上つた笑いを急に崩くずしたと云う自覚は無論なかつた。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門びしゃもんさま様が大勢いて、これはと威儀を正さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獸半人の前にも嚴格の念を起したんだらう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持つていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんと唸うなり出した。その唸り声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんのだが、ジャンボの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のように思われたんだらう。みんな眼と眼を見合した。

「金^{きん}公^{こう}苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸^うつてるのか、返事をしていいのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなに鼻^{かかあ}の事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。今^{いまさら}更唸^うつたつてどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れるなあ当り前だ」

と、やっぱり圀^そ炉裏の傍^{そば}へ坐つたまま、大きな声で慰^{なぐさ}めている。慰^{なぐさ}めてるんだか、悪^{あく}口^{ぐち}を吐^ついているんだか疑わしいくらいである。坑夫から云うと、どっちも同じ事なんだろう。病人はただう

うんと挨拶あいさつ——挨拶にもならない声を微かすかに出すばかりであった。そこで大勢は懸かけあい合あにならない慰藉いしやをやめて、囲炉裏まわりの周囲まわりだけで舌したの用を弁じていた。しかし話題はまだ金さんを離れない。「なあに、病気せえしなけりや、金公だつて鼻を取られずに済むんだあな。元を云やあ、やっぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病気をさも罪悪のように評するや否や、

「全くだ。自分が病気をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を抵当もんぐに取られちまったんだから、正直のところ文句もんぐの附けよ
うがねえ」

と賛成したものがある。

「若干いくらで抵当に入れたんだ」

と聞くと、むこうがわ向側から、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市の野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハハハ」

自分は囲炉裏の側そばに坐つてるのが苦痛であつた。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋わきの下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒なおつて、鼻かかあを受け出したら好かろう」

「また、市いちと入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼かせいで、もつと価ねに踏める抵当でも取った方が、気が利きいてらあ」

「違ねえ」
ちげえ

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑った。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝を並べて畏まっていた。馬鹿らしいと気がついて、あぐら胡坐に組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐をかくほどゆうちよう悠長ではなかつた。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天気具合と、山が囲んでるせいで早く暗くなる。黙つて聞いていると、あまだれ雨垂の音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇んだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やつぱり降つてると云う方が当るだろう。窓は固り締め切つてある。戸外そと

の模様は分りようがない。しかし暗くつて湿しめッぽい空気が障しょうじ子の紙を透こして、一面に囲いろり炉裏りの周まわり囲を襲おそつて来た。並んでいる十四五人の顔がしだいしだいに漠然ぼんやりする。同時に囲いろり炉裏りの真まんなか中に山のようにくべた炭の色が、ほてり返つて、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑あなの底へ滅入めいりこ込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競せり上がつて来る、——ぎつと、そんな気分がした。時にぱつと部屋中が明るくなつた。見ると電気灯が点ついた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食つて、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降ってるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおもむいて見な」

などと、口々に罵ののしりながら、立って、階下段はしごだんを下りて行つた。

自分は広い部屋にたった一人残された。自分のほかにいるものは病人きんの金さんばかりである。この金さんがやつぱり微かすかな声を出して唸うなってるようだ。自分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を組みながら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出ていない。足も引つ込ましている。金さんの身体からだは一枚の布団ふとんの中で、小さく平つたくなっている。気の毒なほど小さく平つたく見えた。その内唸うちなり声こゑも、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向むきを易か

えて、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが気に掛かってたまらないから、また横を向いた。すると金さんはやつぱり一枚の布団の中で、小さく平ったくなっている。そうして、森しんとしてゐる。生きてるのか、死んでるのか、ただ森としてゐる。唸られるのも、あんまり気味の好いもんじやないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極きよくこわは怖くなつて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじやないと、度胸すを据えてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段はしごだんを上がつて来た。もう飯を済ましたんだらうか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段の方を眺ながめていると、思も寄らないものが、現れた。

——黒か紺こんか色の判はっつきり然ししない筒つつっぽう服ふくを着ている。足は職人の穿はくような細い股引ももひきで、色はやはり同じ紺である。それでカンテラを提さげている。のみならず二人ふたありが二人とも泥だらけになって、濡ぬれてる。そうして、口を利きかない。突つ立たつたまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラを抛ほうり出すと、釦ボタンを外はずして、筒袖つつっぽうを脱だいだ。股引も脱だいだ。壁に掛けてある広袖ひろそでを、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やっぱり無言のまま、二人してずしりずしりと降りて行いった。するとまた上がこんだつて来た。今度こんだのも濡ぬれている。泥だらけである。カンテラを抛ほうり出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上がこんだつて来る。こう云う風に

入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼だま球を光らして、一遍だけはきつと自分を見た。中には、

「手前は新前てめえ しんめえだな」

と云つたものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。幸さいわい今度はさつきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難ぶなんに済んだ。上がつて来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯からかう暇がなかつたんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、上がつて来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ

考え出した。もちろん纏まりまとりようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰っていると、炭の中にそう云う妄も想うぞうがちらちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣かつきに煽あおられながら、むやみに踊をおどつてるような変な心持になった時に、突然、

「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さっきの婆さんが、立っている。やっぱりたすきがけ襷たすき掛かけのままである。いつの間まに上がって来たものか、ちつとも気がつかなかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻まわって、艶子つやこさんになつたり、澄江すみえさんになつたり、親爺おやじになつたり、金さんになつ

たり、——被布ひふやら、廂ひさしがみ髪かみやら、赤毛布あかげつとやら、唸り声うなごえやら、揚餛飩頭あげまんじゅうやら、華嚴けごんの滝たきやら——幾多無数の幻影まぼろしが、囲炉裏ひなたの中に躍り狂おどつて、立ち騰のぼる火の気の裏うちに追いつ追われつ、日向ひなたに浮かぶ塵ちりと思われるまで夥おびただしく出て来た最中に、はつと気がついたんだから、眼の前まへにいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし寝ると云う注意だけは明かに耳に聞えたに違ないから、自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろうしの戸棚とこを指さして、

「布団ふとんは、あすこに這入はいつてるから、独ひとりで出して御掛ごかけなさい。

一枚三銭ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたら、婆さんは、それ限何ぎりにも云わずに、降りて行つた。

これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても劍突けんつくを食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図さしず通

り戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかし

いずれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分は一番上に乗つてるのを二枚、そつとお

ろした。そうして、電気灯の光で見た。地じは浅黄あさぎである。模様は

白である。その上に垢あかが一面に塗りつけてあるから、六分方色ろくぶがた

変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどどろ

んと、化けている。その上すこぶる堅い。搗き立ての伸し餅を、
 金かなきん巾きんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわとはまるで縁
 故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平ひらたく敷いた。それから残る一枚を平
 く掛けた。そうして、襯衣シャツだけになつて、その間に潜もぐり込んだ。
 湿しめっぽい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵かかとが畳の上へ
 出たから、また心持引つ込ました。延ばす時も曲げる時も、不断
 のように軽くしなやかにには行かない。みしりと音がするほど、関
 節が窮屈こわばに硬張こわばつて、動きたがらない。じつとして、布団の中に
 膝ひざがしら頭あたまを横たえていると、倦怠だるいのを通り越して重い。腿ももから下
 を切り取つて、その代りに筋金すじがねい入りの義足をつけられたように

重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくつて重たい足を苦くに病やんで、頭を布団の中に突っ込んだ。せめて頭だけでも暖あつたかにしたら、足の方でも折れ合ってくれらるだろうとの、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭においよりも、煩はん悶もんよりも、厭えん世せよりも——疲れている。実に死ぬ方が楽らくなほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——昼から足を引つ込まして、頭を布団に入れるだけの所作しよさを仕遂しとげたと思うが早いか、眠ねてしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きて

いて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧であつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺だろうが、頓着はなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覚の床の下に埋めてしまふ分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなと思ひながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。

今度は大きな眼を開いた。ところへまたちくりと来た。おやと驚く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとようやく気がつきがけに、飛び上るほど劇しく股の辺をやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に帰つた。そうして身体中至る所がちくちくしているのを発見した。そこでそつと襯衣の間から手を入れて、

背中を撫なでて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹かかつたんだと思つた。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳はね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲いろり炉裏そぼの傍へ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫ナンキンむしを見た事がないんだから、はたしてこれがそうだと断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑げびた所に直覺の二字を濫用らんようしては濟まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使つた。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪にくらしくなつて

来た。囲炉裏の縁ふちへ乗せて、ぴちりと親指の爪でお押し潰つぶしたら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭い臭氣においを嗅かぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜い事を真面目まじめにかかねばならぬほど狂きちがい違染いじみていた。実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨うらみを霽はらしたような気がしなかつたのである。それだから捕とつては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがつて嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰つて来た。今にも涙が出そうになる。非常に情なさけない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で大勢が一度にどつと笑う声が出た。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつて静かに寝ている。頭も足も見えない。その

ほかにたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかつた。向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿ほもめんのようなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか気味が悪かつた。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜はすに出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭いがりあたまであつた。――広い部屋には、自分とこの二人を除のぞいて、誰もいない。ただ電氣灯がかんかん点ついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑つた。さっきの連中か、または作業を済まして帰つて来たものが、大勢寄つてふざけ散らしているに違ちがない。自分はぼんやりして布団のある所まで帰つて来た。そうして裸体はだかになつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しま

いに敷いてある布団を叮嚀ていねいに畳んで戸棚へ入れた。それから後あとはどうして好いか分らない。時間は何時なんじだか、夜よはどうていまだ明けそうにしない。腕組をして立つて考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪こらえ切れずに、

「えっ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦こすつて、左の足の甲で右の上を擦つて、これでもかと齒はぎ軋しりをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固もとよりない。さつき毒突どくづつかれた事を思い出すと、南京虫よりよつぽど厭いやだ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思いながら、自分は表へ向

いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずる畳の目を滑すべつてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直まっすぐに立つ。またずるずる滑すべる。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫ナンキンむしは出て来なかつた。下では時々どつと笑う。

いても立つてもと云うのは喩たとえだが、そのいても立つてもを、実際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方かたのつかない運動をして、中途半端まぎに紛まぎらかしていた。ところがその運動をいつまで根氣こんきにやつたものか覚えていない。いとど疲れていゝる上に、なお手足を疲こたらして、いかな南京虫でも応こたえないほど疲

れ切ったんで、始めて寝たもんだらう。夜が明けたら、自分が摺ずり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲うずくま踞まっていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過たつにつれて、だんだん痛くなくなつたのは妙である。その実、一箇月ばかりしたら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、そろそろ転がつてくるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐつすり安眠した。もつとも南京虫の方でも日ひ数かずを積むに従つて遠慮してくるそうである。その証拠には新来きたてのお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛いじめるが、少し辛抱していると、向うから、愛想あいそをつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食つてる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方にそれだけの

品格が出来て、シキ臭くなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものがあつた。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質たちがよく似ている。おそらく坑夫ばかりじゃあるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてるんだらう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括がいかつするところに面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼きがねをしたり、贅沢ぜいたくを云つたりするんじゃないやなくて、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだらうと思う。虫は依然として食つてるが、食われても平気でいるに違ない、もつとも食われて感じないのも、食われなくなつて感じないのも、趣おもむきこそ違え、結果は同じ事であるか

ら、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云っている。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつとも判然とは降っていない。雲の濃いのが糸になり損なつて、なつただけが、細く地へ落ちる気色だ。だからむやみに濛々とはしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透いて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏しい、潤のない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思われるほど赤く禿げてぐるりと自分を取り捲いている。そうして残らず雨に濡れ

ている。潤い気けのないものが、濡れているんだから、土器かわらけに霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その癖寒い気持がする。それで自分は首を引つ込めようとしたら、ちよつと眼についた。——手拭てぬぐいを被かぶつて、藁わらを腰に当てて、筒服つつぽうを着た男が二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちよつと昨日きのうジャンボ―の通つた路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼして気の毒なほど憐れである。自分も今朝からあんなるんだなど、ふと気がついて見ると、人事ひとごととは思われないほど、向むへ行く手拭てぬぐいの影——雨に濡ぬれた手拭の影が情なさけなかつた。すると雨の間からまた古帽子が出て来た。その後あとからまた筒袖姿つつそですがたがあらわれた。何でも朝の番に当つた坑夫がシキへ這はい入る時間に

相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段はしごだんを上つて来る。来たなと思つたが仕方がないから懐ふところ手をして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとからまた上がつてくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちやいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰てもちぶさた過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落つちやいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶

代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子きむすこである。下りて見ると例の婆さんが、襷たすきがけをして、草鞋わらじを一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢であつた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門かどぐち口の方へ行つた。まるで相手にしちやいない。

自分にはあつちの見当けんとうがわからなかつたが、とにかく婆さんの

出て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中に四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちが据すえてある。

あの中に南京米ナンキンまいの炊たいたのがいっぱい詰つつてるのかと思つたら、
 ——何しろ自分が三度三度一箇月食つても食い切れないほどの南
 京米なんだから、食わない前からうんざりしちまつた。——顔を
 洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立つて、冷たい水
 で、申し訳のために頬ほつぺた辺なを撫なでて置いた。こうなると叮ていねい嚙いに
 顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一歩進むと、顔は洗
 わなくつても宜いいものと度胸が坐まつてくるんだらう。昨日きのうの赤あか
 毛布つとや小僧は全くこう云う順序を踏ふんで進化したものに違ちがない。
 顔はようやく自力で洗つた。飯はどうなる事かと、またのその
 そ台所あがへ上あつた。ところへ幸さいわい婆おさんが表から帰かえつて来て膳ぜん立た
 をしてくれた。ありがたい事に味噌汁みそじるがついていたんで、こいつ

を南京米の上から、ぎつと掛けて、ぎくぎくと搔き込んだんで、

今度は壁土の味を噛み分ないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯が済んだら、初さんがシキへ連れて行くつて待つてるか

ら、早くおいでなさい」

と、箸も置かない先から急ぎ立てる。実はもう一杯くらい食わな

いと身体が持つまいと思つてたところだが、こう催促されて見る

と、無論御代りなんか盛う必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上り口に一人掛けて

いる。自分の顔を見て、

「御前か、シキへ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたら、

「じゃ、いつしよに来ねえ」

と云う。

「この服装なでも好いんですか」

と叮嚀ていねいに聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這入へれるもんか。ここへ親

分とことから一枚いちめえ借りて来てやったから、此服こいつを着るがいい」

と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引を抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着いている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御仕おし着きせを着る始末になつたんだなと思ひながら、緋かすりを脱いで上うえ下したとも緋こんぞろい揃ひになつた。ちよつと見ると内閣の小使のようだが、心持から云うと、小使を拝命した時よりも遥はるかに不景氣であつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待つた」

と、初さんがまた勇み肌はなむねの声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当てるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらばつちのような藁わ布らふ団どんに紐ひもをつけた変へん挺ていなものだ。自分は初さんの云う通り、

これを臀部へ縛りつけた。

「それが、アテシコだ。好しか。それから鑿だ。こいつを腰ん所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあるうと云う鉄の棒で、先が少し尖っている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しつかり受け取らねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌を差してよく坑の中が歩けるもんだと思ふ。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振つて見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提げるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待つたり。カンテラの前に一つ草鞋を穿いちまいねえ」

草鞋わらじの新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ぶら下げたのは、大方これだろう。自分は素足すあしの上へ草鞋を穿はいた。緒おを踵かかとへ通してぐつと引くと、

「驚癡どじだなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指いびの股ゆるを寛めろい」

と叱られた。叱られながら、どうにか、こうにか穿はいてしまう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初さんは 饅頭笠まんじゅうがさとカンテラを渡した。饅頭笠と云うのか筍たけのこがき

笠かさというのか知らないが、何でも懲役人の被かぶるような笠であ

った。その笠を 神妙しんびょうに被る。それからカンテラを提さげる。こ

のカンテラは提げるようにできている。恰好かっこうは二合入りの石せきゆ

油缶かんとも云うべきもので、そこへ油を注さす口と、心しんを出す孔あなが

開あいてる上に、細長い管くだが食くつついて、その管の先がちよつと横

へ曲まがると、すぐ膨ふくらんだカップになる。このカップへ親指を突

つ込んで、その親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本

で事を済すますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿はめるんだ」

と初さんが、勝栗かちぐりのような親指を、カンテラの孔の中へ突込つっこんだ。旨うまい具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振つて見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとつて揺うごかして見たがやつぱり落ちなかつた。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好よござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠かさへあつた。仰あおむ向いて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぽつぽつとあつた。それからあとは、肩へもあたる。

足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸し返される。しかし雨の方が寒いので、身体のほとぼりがだんだん冷めて行くような心持であつたが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を弾き出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。入口はまず汽車の隧道の大きいものと云つて宜しい。蒲鉾形なりの天辺てっぺんは二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧道トンネルに似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透かして見た。奥は暗かつた。

「どうだここが地獄の入口だ。這入はいれるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄ちやうろうの語気を帯びている。さつき飯場はんば

を出て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののつていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込め

られて物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥底に

はきつと愚弄ぐろうの意味がある。これを布衍ふえんして云うと、一つには貴

様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見

ろと云う事になる。もう一つは御氣の毒だが来たって駄目だよ。

そんな脂やにっこい身体からだで何が勤まるものかと云う事にもなる。だか

ら「昨日きのうのだ」「新来しんきだ」と騒ぐうちには、自分が彼らと同様の

苦痛を嘗めなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪えがたい奴だとの軽蔑さえ加わっている。彼らは他人を彼らと同程度に引き摺り落して喝采するのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足の下まで蹴落して、墮落は同程度だが、墮落に堪える力は彼らの方がかえって上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上「昨日のだ」と聞きたんびに、懲役笠で顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄したんだから、自分は少しむっとして、「這入れますとも。電車さえ通つてるじゃありませんか」と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？ 豪義ごうぎな事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と直すぐこなされるにきまつてる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入つて見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおつかなくなり出したには降参した。雨が降つても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかつている。それだのに初さんは中ちゆう腹ぽらでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。

「シキの中でおとなしくしねえと、すのこの中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくつちやあいけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留^{どま}った。初さんの腰には鑿^{のみ}がある。五斤の槌^{つち}がある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」

と返事をした。

「よし、分つたか。生きて出る料^{りようけん}簡^{かん}なら生意気にシキなかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は独^{ひと}り言^{ごと}のように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑^{あな}の中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんと自分の耳へ跳^はねつ返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になる

うと云う気も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖こわい
商売なら——殺されるんなら——すのこの中へ抛なげ込まれるなら
——すのことは全体どんなもんだろうと思ひ出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後うしろを振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。——あらがねほう鋤を抛り込んで、まと纏めて下へ降さげる穴だ。鋤とい
つしよに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這^{はい}入るときは、これがシキならと思つた。聞いたほどももないと思つた。ところが初さんに威嚇^{おど}かされてから、いかな平凡な隧^{トンネル}道も、大いに容^{ようす}子が變つて来た。懲^{ちようえき}役^{えき}笠^{がさ}をたたき冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて気がついた。いくら曇つていてもやつぱり外が懐^{なつ}かしい。真黒な天^{てん}井^{じよう}が上から抑^{おさ}えつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて来るように感ぜられる。と思うと、軌道^{レール}を横へ切れて、右へ曲つた。だらだら坂

の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分
はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ触
つて見ると、雨が降つたように濡れている。

「どうだ、尾いて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云つたなり、また二人とも無言になつた。この時行く手の方
一点の灯が見えた。暗闇の中の黒猫の片眼のように光つてゐる。

カンテラの灯ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直まっすぐじゃないが、とにかく見える。もし坑あなの中が一本道だとすれば、この灯を目懸めがけて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやくやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯ひが点ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦すれすれ々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑あなが四五畳ほどの大おおきに広ひろがって、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電気灯

が点いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対い合せに洋
テーブル卓を隔てて腰を掛けていた。おもて表には第一見張所とあつた。これ
は坑夫の出入だの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、
始めて分つたんだが、その当時には何のための設備だか知らな
かつたもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃えて無言のま
ま、見張所の前に立っていたのを不審に思った。これは時間を待
ち合わして交替するためである。自分は腰に鑿のみと槌つちを差してカン
テラさえ提さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見
に這入っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う
訳で、待ち合わす必要もないものと見えて、すぐこの溜たまりを通り越
した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突っ込んで、ちよ

いと役人に断ことわつたが、役人は別に自分の方を見向もしなかつた。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前はばかを憚はばつてだろう、全く一言ひとことも口を利きいたものはなかつた。

溜なを出るや否あなや坑の様子が突然變つた。今までは立つてあるいても、背延せいのびをしても届きそうにもしなかつた天井が急に落ちて来て、真直まっすぐに歩くと時々頭さわへ触さわるような氣持きもちがする。これがあるのの二寸も低ひかろうものなら、岩へぶつかつて眉間みけんから血が出るに違ちがはないと思うと、松原をあるくように、ありつたけの背で、野の風雜ふうぞうにややつて行けない。おつかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食くつついて行つた。もつともカンテラはさつき点つけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四ん這よつばいになった。おや、滑すべつて転んだ。と思つて、後うしろから突つ掛かりそうなところを、ぐつと足を踏ん張つた。このくらいにして喰い留めないと、坂だから、前へのめる恐おそれがある。心持腰から上を反そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合あわしていると、初さんはなかなか起きない。やっぱり這はつてゐる。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さんはこのこのこ歩き出した。

「何ともなかつたですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまう。その声で自分は不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜もぐってしまう。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖あいまい昧まいになる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透すかして見るとようやく分った。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭せまくなつて、這わなくつちや抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胸を入れたばかりで

ある。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四つん這いにならなくつちや仕方がないと諦めあきらめをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけつして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカンテラを提さげている。左の手の平ひらだけを惜おし気もなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような気持がした。それでカンテラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになって、はなはだ不便である。どうしたもんだらうと、この姿勢のままじつとしていた。そうして、右の手で宙に釣つているカンテラを見た。ところへぼたりと天てん井じょうからしづくが垂れ

た。カンテラの灯がじいと鳴った。油煙が顎から頬へかかる。眼へも這入った。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当にあたるんだか、いつこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でもかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行ってしまった。頼はカンテラ一つである。そのカンテラがじいと鳴って水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかったと安心する時分に、またぼたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。

非常に心細い。実は今までも、しずくは始終しじゆう垂れていたんだが、灯ひが腰から下にあるんで、いつこう気がつかなくなつたんだらう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちやいない。ところへ突然初さんの声でした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云つた。

自分は這はいながら、咽喉のどほとけ仏の角かどを尖らすほどに顎あごを突き出し

て、初さんの方を見た。すると一いつけん間ばかり向うに熊の穴見たよ
うなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいもの

が出てゐる。自分があまり手間取るんで、初さんが屈こじんでこつちを覗のぞき込んでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じや善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引つ込まして穴の外に立つてゐる。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉うれしやと狭い所を潜くぐり抜けた。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちや、シキへは一ひと足あしだつて踏ふん込こめつこはねえ。陸おかのように地面はねえ所ところだから、どんな頓とん珍ちん漢かんだつて知つてるはずだ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云った。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにとただし書がきをつけて、その確実な事を保証して置くのである。自分は何か云い訳をするたんびに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙っていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつけて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚びつくりして稀有けうな顔をしていた。

「冗談じょうだんじゃねえ。何が這入へってると思う。

種たねあぶら油だよ、しず

くぐらいで消けえてたまるもんか」

自分はこれでやっと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑あなの中がみんな

響き出す。その響が収まると前よりも倍静かになる。ところへか

あん、かあんどこかで鑿のみと槌つちを使つてる音が伝わって来る。

「聞えるか」

と、初さんが顚あごで相図をした。

「聞えます」

と耳そぼだを峙たててしていると、たちまち催促を受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌がいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられていゝるせいだろうと思つた。いくら手て苛ひどくきめつけられても、初さんの機嫌がいうちは結構であつた。こうなると得になる事がすなわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落して、おめおめ初さんの尻かを嗅かいで行つたら、路が左の方に曲り込んでまた峻けわしい坂になつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後うしろも向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかった。が初さんはそれとも気がつかず下り出おした。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になつてゐる。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕あたごさま様の高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になつて、いっしょに降りた。降りた時にほつと息を吐つくと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑あなのなかで、空気の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体からだも冒おかされていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が変つた。

今度は初さんが仰あおむ向けに手を突いて、腰から先を入れる。腰か

ら入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまつて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなつた。さすが熟練の功はえらいもんだと思ひながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に

浮いてるようで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がつくり落おちか、それでなくても、よほど勾こうばい配はいの急な坂に違ちがいと見けんとう

当あたをつけた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をするばかり、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後うしろへ手を突いた。ところ

がこの所作しよさがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべったり突いてしまった。ぴちやりと云った。アテシコを伝わつて臀部でんぶへ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分はしまったと思ひながらも直すぐ両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ぶら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗った。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや足の裏で敲たたいて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡りようけんであつた。

「何で足ばかり、ばたばたやってるんだ。大丈夫だから、うんと

踏ん張って立ちねえな。意久地のねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立った。

「まるで傘からかさの化物ばけもののようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑う気にもならなかつた。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かつたと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が變つて、前よりは幾いくぶん分か親切になつた。偶然の事がどんな拍ひょうし子ひとで他の氣に入らないとも限らない。かえって、氣に入つて

やろうと思つて仕出^しかす芸術は大抵駄目なようだ。天^{てん}巧^{こう}を奪^うう
よ^うな御世辞使はいまだかつて見た事がない。自分も我が身が可
愛^うさに、その後^ごいろいろ人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨^{うま}
結果が出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから
怖^{こわ}いもんだ。用意をして置いた挨拶^{あいさつ}で、この傘の化物に対する
返事^{へんじ}くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折つて失敗する
のは愚^ぐだと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際
をして^ている。ただ困るのは演^{えん}舌^{ぜつ}と文章である。あいつは骨を折
つて準備をしないと失敗する。その代りいくら骨を折つてもやつ
ぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折つた失敗は、人
の氣に入らないでも、自分の弱点^{ぼろ}が出ないから、まあ準備をして

からやる事になっている。いつかは初さんの氣に入つたような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向つて、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短みじけえやな」

と云つた。坑あなの中でカンテラを点つけた、初さんはたしかに日は短えやなと云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所まで行くと、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間続いている。それを降

り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何なんちよう町降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗あない坑の中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切つて、だいたふ浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすばまつて、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これは作事場さくしじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉾脈ひろがあるとすると、そこを掘り拈ひろげて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負うけおい仕事に引受

ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五日く
らいと踏んだ作事に半月以上食くらい込む事もある。こう云う訳で、
シキのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御おかま
構いなくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシキの
入口こそ、平らでもあり、また一ひとすじ条でもあるが、下へ折れて第
一見張所のあたりからは、右へも左へも条えだみち路ができて、方々に
作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り
抜いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、また暗い坑だ
らけである。ちようど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだ
ろう。または書蠹のむしが本を食くらうと見立てても差さし支つかえない。つまり人
間が土の中で、銅あかがねを食つて、食い尽すと、また銅を探し出して食

いにゆくんでむやみに路がたくさんできてしまつたのである。だから、いくらシキの中を通つても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑夫には逢あわぬ。かあんかあんという音はするが、音だけでは極きわめて淋さみしいものである。自分は初さんに連れられて、シキへ這はい入つたが、ただシキの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。――稲妻形いなずまがたに段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢あわぬものだから、はなはだ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかった。

見ると丸太まるたの上に腰をかけている。数は三人だった。丸太は四よつや丸太まるたで、軌道レールの枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかどうかい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シチュウが必要な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰ふたありを掛けて、残る一人が屈しやがんで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺つぼがある。伏せてある。一人がこの壺を上から抑おさえている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙あげた。下から賽さいが出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが

土の壁に突き刺してある。暗い灯ひが、ぎろりと光る三人の眼球めだまを照らした。光ったものは実際眼球だけである。坑もとは固もとより暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙けぶりを吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そうして動いている。

カンテラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判はつきり然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集かたまつていたから、なおさら変であったが、自分が這はい入るや否や、

三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺つぼが見えたのである。壺の下から賽さいが見えたのである。壺と、賽と、三人の異いな叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たのである。よくはわからな顔であつた。一人の男は頬ほお骨ほねの一点と、小鼻の片かた傍わきだけが、灯ひに映つた。次の男は額と眉まゆの半分に光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持つていた、カンテラを四五尺手前から真ま向つこうに浴びただけである。——三人はこの姿勢で、ぎろりと眼を据すえた。自分の方に。

ようやく人間に逢あつて、やれ嬉うれしやと思つた自分は、この三対ついでの眼球めだまを見るや否や、思わずぴたりと立ち留とどつた。

「手前てまえは……」

と云い掛けて、一人が言葉を切った。残る二人はまだ口を開ひらかない。自分も立ち留まったなり、答えなかった。——答えられなかった。すると

「新しんめえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍そばにいる事も忘れて、ただおやつと思つた。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬かたくこわ張り掛けたところへ「新しんめえだ」と云う声が出た。この声が自分の左の耳の、つい後うしろから出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついてたなと思ひ出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもと

へ引き返した。自分は一步わき傍へ退いた。初さんに前へ出てもらうつもりであった。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてるな」

とカンテラを提さげたまま、上から三人の真中に転がつてる、壺と賽を眺ながめた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合わなかった。やがて、四よつや丸まる太たの上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉

しくなつて元氣が出て来た。初さんの側へ腰をおろす。アテシコききめの利目は、ここで始めて分つた。旨い具合うまに尻が乗つて、柔らかこたに局部へ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩くららんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑あなの中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかつたが、こう尻を掛けて落ちつくくと、大きちかくに楽になる。四よつたり人がいろいろな話をしてい

る。
「広ひろもと本へは新らしい玉たまが来たが知ってるか」

「うん、知ってる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前はめえ」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑った。これは這入はいつて来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑つても笑わなくつても、顔の輪廓りんかくがほとんど同じである。

「随分手廻しがいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シキへ這入へえると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだつて、そうだろう」

と云う答があつた。この時、

「御互だれかに死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。その語調には妙に咏嘆えいたんの意が寓ぐうしてあつた。

自分はあまり突然のように感じた。

そうしているうちに、一いっけん間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前おめえはどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲もうけようたつて駄目だぜ」

と他ほかのが、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲か
る儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場はんばへ着くが早い
か、今度は反対に、儲からない儲からないで立てつづけに責めら
れるんで、大いに辟へきえき易した。しかし地の底じではよもやそんな話
も出まいと思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲から

ないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多めったな事を云えば擲はりつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云って返事をしなければまたやりつけられる。そこで、こう云った。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山やまには神様がいる。いくら金を蓄ためて出ようとしたって駄目だ。金は必ず戻ってくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だるまだ」

と云って、四人よつたりながら面白そうに笑った。自分は黙っていた。

すると四人は自分を措おいてしきりに達磨の話を始めた。約十分余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑あなのなかしやがに屈かがんでるところを、艶子つやこさんと澄江すみえさんに見せたらばと云う問題であつた。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさましいと云つて愛想あいそを尽かすだろうかと疑つて見たが、これは難なく気の毒がつて、泣くに違ないと結論してしまつた。それで一目ひとめくらいはこの姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜ゆうべ困いろり炉裏そばの傍そばでさんざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。ところが今度は正反対で、二人共そば傍そばにいてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと

想像して眼前に、意気地のない、大いに苛められている自分の風体と、ハイカラの女を二人描き出したら、はなはだ気恥ずかしくなつて腋の下から汗が出そうになつた。これで見ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみか、少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅の利かないところだけを、女に見せたくなかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々は芝居気を出す。自分がアテシコを臀に敷いて、深い坑のなかで、

カンテラを提ひつせげたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がつていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらいの大きな音がした。その音は自分の足の下で起ったのか、頭の上で起ったのか、尻かを懸かけた丸まる太たも、黒い天てん井じょうも一度に躍おどり上ったから、分からない。自分の頸くびと手と足が一度に動いた。縁えん側がわに脛はぎをぶらさげて、膝ひざ頭がしらを丁ちようと叩たたくと、膝ひざから下がぴくんと跳はねる事がある。この時自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこ

れよりも倍以上劇烈に來たような気がした。身体ばかりじゃない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打つて、たちまち我れに歸つた。音はまだつづいてゐる。落雷を、土中どちゆうに埋めて、自由の響きを束縛そくばくしたように、洩しぶつて、焦いらつて、陰いんに籠こもつて、抑おさえられて、岩にあたつて、包まれて、激して、跳はね返されて、出端でばを失つて、ごうと吼ほえている。

「驚いちやいけねえ」

と初さんが云つた。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やつちまうかな」

と、鑿のみを取り上げた。初さんと自分は作事場さくじばを出る。ところへ煙けむ

が来た。煙えんしょう硝しょうの臭においが、眼へも鼻へも口へも這はい入った。噎むせつぽくつて苦しいから、後うしろを向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めました。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳こたに応え
た時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ちがないから、逃げないと生
命のちが危あないとまで思い詰しめたくらいなのに、初さんはますます深
く這入る気色けしきだから、気味が悪わるいとは思おもったが、何しろ自由行動
のとれる身体ではなし、精神は無む論独立の気象きしょうを具そなえていない
んだから、いかに先輩だつて逃にげていい時分には、逃にげてくれる
だろうと安心して、後あとをつけて出ると、むつとするほどの煙けむが向

うから吹いて来たんで、こりや迂^う潤^{つかり}深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後^{うしろ}を向く途端^{とたん}に、さっきの連中がもう、煙の中であん、かあん、^{あらがねたた}鋤を叩いているのが聞えたんで、それじややっぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問を起して見たんである。すると初さんは、煙の中で、咳^{せき}を二つ三つしながら、「驚かなくつてもいい。ダイナマイトだ」と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シキへ這^{はい}入った以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜くぐつて行く。満まんざら更さら苦くるしくもない事もないんだろうが、一つは新参しんさんの自分に対して、景けい氣きを見せるためじゃないかと思つた。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切つて、陸おかの上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這はつてるように感じたり噎むせつぽく思つたのかも知れない。そうすると自分の方が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾ついて行つた。また胎たいな内い潜くぐりのような穴を抜けて、三四間さんしよずつの段々だんだんを、右へ左へ折れ尽すと、路が二ふた股またになつてゐる。その条えだ路みちの突き当りで、カラカラランと云う音がした。深い井戸へ石いし片ころを抛なげ込んだ時

と調子は似ているが、普通の井戸よりも、遙はるかに深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間に、側がわへ当つて鳴る音が、冴さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間てまがかかる。けれども一本道を、真ま直つすぐに上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微かすかな遠くであつても、洩もらすところなく上まで送り出す。——ざつとこんな音である。カララン。カカラアン。……

初とまさんが留とまつた。

「聞えるか」

「聞えます」

「スノコへ鋤を落してる」

「はああ……」

「ついでだからスノコを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達そぼがその傍まで近づいた

時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後へ
抜く拍子ひょうしに、大きな箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の
上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。
一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳敷にじようじきぐらいはあるだろう。
箕に入れたばらの鉋あらがねを、掘子ほりこが抛なげ込んだばかりである。突き当
りの壁は突立つったつてている。微かすかなカンテラに照らされて、色さえしつ
かり分らない上が、一面に濡ぬれて、濡れた所だけがきらきら光つ
ている。

「覗のぞいて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。
自分は板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もつと、出る」

と初さんが後から催促する。自分は躡ちゆうちよ躡ちゆうちよした。これでさえ踏はず板が外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退のく手間てまが一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地ひらちの十間にも当る。自分は何なにぶん分ぶんにも躡ちゆうちよ躡ちゆうちよした。

「出ろやい。吝けちな野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだらう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかつた。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、

どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這はい入るんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちや大変だと神経を起すと、後から背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち応こたえていた。すると、「おい邪魔だ。ちよつと退どきな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支ささえながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体ていを見て、すぐ傍わきへ避よけた。そうして比較的安全な、板が折れても差さ支しかえなく地面へ飛び退けるほどの距離まで退しりぞいた。掘子は、俵で眼先がつか

えてるから定めし劍呑けんのもんがるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁ふちから二尺ばかり手前まで出て、足を揃そろえたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端とたんに、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突っ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰おとさたもない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切つたと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入つてた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入つてた。その時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要いるもんだ。やつて見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前めえが掘子になるにしたつて、おつかながつて、手先ばかりで抛なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝かんじん心の穴へは這は入りやしねえ。そうして、鉾あらがねの重みで引つ張り込まれるから、かえつて劍けん呑だ。ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくっちゃ駄目だ。ハハハハ」と笑った。

後あともどり 戻もどりをして元の路みちへ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫うように突き当った所で、初さんが留まった。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降こう参さんしたら、落第するにきまつてるから、我慢に我慢を重ねて、ここま
で来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだろ
うくらいの目算はあった。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留
まって、一いちだんらく段落らくつけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式

に尋ねられると、まだ下りるべき道程みちのりはけっして一丁や二丁でないと言ふ意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ごめんこうぶろうかしらと考えた。こう云う時の出処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生へいせい生築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩くずれる場合のうちでもっとも顕著けんちよなる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前申ぜんす通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りおようじやな

いかと云う親密な情じょうあい合あも見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇おどしもあらわれていない。下りたかろうと焦じらす気色けしきは無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱ぶべつの色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題ひそが潜ひそんでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穏かに同意の意ひようを表した。なるほど危ないはずだ。九十度の角

度で切つ立った、屏風びょうぶのような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子はしごが懸かかつてる。勾配こうばいも何にもない。こちらの壁にぴったり食つついて、棒を空くうにぶら下げたように、覗のぞくと端さきが見えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛しばりつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己おれが先へ下りるからね。気をつけて来たまえ」

と初さんが云った。初さんがこれほど叮嚀ていねいな言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おおかた神しん妙びように下りましようと思つたで、幾分いくぶんか憐愍れんみんの念を起したんだらう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻しやがを向けた。そうして屈しゃがんだ。と思うと、足からだんだん這入はいつて行く。しまいには顔だ

けが残った。やがてその顔も消えた。顔が出ている間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまった時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくつて、足をつま立てるようにして、上から見下した。初さんは下りて行く。黒い頭とカンテラの灯だけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわないと、下り損そこなうかも知れない。面目ない事が出しゅつ来たいする。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向うしむきになつて初さんのように、膝ひざを地じにつけて、手で摺ずり下りさがながら、草鞋わらじの底で段々を探った。

両手で第一段目を握つて、足を好加減いかげんな所へ掛けると、背中

が海老えびのように曲った。それから、そろそろ足を伸ばし出した。
真まつすぐ直ちかに立つと、カンテラの灯ひが胸の所へ来る。じつとしている
と燻えいぶされてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに応
じて握り更かえなくつちやならない。おろそうとすると、指で提さげ
てるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅めった多
に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかつて
灯が揉もみ潰つぶされそうになる。親指へカップを差し込んで、振子の
ように動かした時は、はなはだ軽便な器械だと思つたが、こうな
ると非常に邪魔になる。その上梯子はしごの幅は狭い。段と段の間がす
こぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつ
て来て恐怖が手伝う。そうして握り直すたんびに、段木だんぎがぬらぬ

らする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透かして見ると、へな土が一面に粘ついている。上り下りの草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗のぞいた。よせば善かったが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻つて、かたく握った手がゆるんで来た。これは死ぬかも知れない。死んじや大変だと、噛かじりついたなり、いきなり眼を閉ねむった。石鱈球シヤボンだまの大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本当を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶった眼の前に湧わいて出る石鱈球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目舞めまいのする前に、ちらりと初さ

んを見たに違ないんだが、ぐらぐらと咄癡とつちて、死ぬ方が怖こわくなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしその当時はう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑あなは暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであった。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立った壁の向う側を降りているようだ。今度は二度目のせいめまいか、落ちるほど眩暈めまいもしなかつたんで、よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行

く。はてなと思った。ところへカンテラがまたじいと鳴った。保証つきの灯火あかりだが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬるぬるする段木だんぎを握り更かえ、握り更かえてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがやツぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子を見ると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒つつぬけ抜の穴だ。その代り今度は向むこう側がわに別の梯子がついている。手を延ばすと届くように懸かけてある。仕方がないから、自分はまたこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降りた。長さは前まへのと同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸かけ

である。どうも是非に及ばない。また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸っている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠だるくなつて、足が悸ふるえ出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真ま闇だ。自分のカンテラへはじいじいと点滴しずくが垂れる。草鞋わらじの中へは清水しみずがしみ込んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになつた。下り出すと足を踏はみ外はずしかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめつて逆さかさに頭を割るばかりだと思つと、どうか、どうか、段々を下り切る力が、どっかから出て来る。あの力の出で所どころはどうてい分ら

ない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染にじみ出すように来たから、自分でも、ちゃんと自覚していた。

ちようど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚さめると、また五六ページは読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を讀んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくいが、何しろ降りた事はたしかである。下した読よみをする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えていのごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちようど十五あつた。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸さいわい一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さ

んがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちや、どうだ」

と奨励しょうれいした。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的えみの笑もを洩もらした。そこで自分も我慢のしついでだと観念

して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに従って路へ水が溜つて来た。ぴちやぴちやと云う音がする。カンテラの灯で照らして見ると、下谷辺の溝渠が溢れたように、うすねずみ薄鼠ひになつてだぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷たい。指の股が切られるようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨にも水の中へ落さなくつちやならない。片足を揚げると、五位鷺ごいさぎのようにそのままで立っていたくなる。それでも仕方なしに草鞋わらじの裏を着けるとぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭ひれのような波が立つ。その片側がカンテラの灯できらきらと光るかと思うと、すぐ落ちついてもとに帰る。せつかく平たいらになつた上をまたぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭

がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這入はいつて行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜くぐり抜けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われない行先をあてにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつてた水が急に脛すねまで来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がつくり落ちがして膝ひざまで漬つかちまう。こうなると、動いたんびにぎぶぎぶ云う。膝で切る波が渦うずを捲まいて流れる。その渦がだんだん股ももの方へ押し寄せてくる。全く危険だと思つた。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑あなのなかで、いっぱいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなって来た。しかるに初へきえきさんは辟てい易えきした体もなく、さっさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後うしろから聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然として、ざぶりざぶりうしろと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬つかっているには、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、または廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念おこに冒おされながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思ってるうち、水はどうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後うしろから初さんを呼び留めた。

この声は普通の質問の声ではない。吾わがみ身を思うの余り、命が口か

ら飛び出したようなものである。だから、いざと云う間際まぎわには単た音んいんの叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前はばかを憚はばるだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留ひとみまつたなり、振り返つた。カンテラを高く差し上げる。眸すを据すえると初さんの眉まゆの間に八の字が寄つて来た。しかも口元は笑つて
いる。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰あたりの辺を、物凄ものすごそうに眺ながめた。初さんは毫ごうも感心かんしんしない。やっぱりにこにこしている。出水でみずの往来を、通行人が尻しりを

まくつて面白そうに渉わたる時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしょうか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだったが、やがて真面目まじめになつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなあ 当あたり前めえだ。そんなに、おっかながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股またまで濡ぬらしてついで行つた。たださえ暗い坑あなの中だから、思い切つた喩たとえを云えば、頭から暗闇くらやみに濡れてると形容しても 差さしつかない。その上本当の

水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝くろぶしからだんだん競りせ上がって来る。今では腰まで漬つかっている。しかも動いたんびに、波が立つから、實際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体からだが腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切つて、不知案内ふちあんないの所を海鼠なまこのようにうについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞ほらのように深く開ひらいてる中から、水が流れて来る。そうしてその中でかあんかあんと云う音がする。作事場さくじばに違ちがひない。初さんは、穴の前に立つたまま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」と聞いた。自分は、胸が水に浸るまで、屈んで洞の中を覗き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微かな灯を無理に広い間へ使つて、引つ張り足りないから、せつかくの光が暗闇に圧倒されて、茫然と濁っている体であつた。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついている辺から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返つたものが、纏まつて穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入つて見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じや止めやにして置こう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但し書ただをつがけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案あんの定釣じょうり出された。

「明日あしたつから、ここで働くんでしようか。働くとすれば、何時間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になつたんだらう。

「だって八時間は働かなくつちやならないんでしよう」

「そりやきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切つてらあ。

だが心配しなくつてもいい」

「どうしてですか」

「好いてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙つて歩き出した。二三歩水をぎぶぎぶ云わせた時、初さんは急に振り返つた。

「新^{しんめえ}前は大抵二番坑か三番坑で働くんだ。よつほど様子が分らなくつちや、ここまで下りちや来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑った。自分もにやにやと笑った。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減った。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝^{くるぶし}まで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉^{うれ}しかった。それから先は、とんとん拍子^{びょうし}に嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が

乾いて来る。しまいにはびちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のスノコから落ちて来たあらがねあつ鋤を聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうぶった。いくら面白く運転する器械でも、明日あすの自分に用のない所は見る気にならなかつた。器械を見ないとするとこれで、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さんが帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬つかるのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡ぬれないで済む路を通ってくれた。それでも十間ほどは腫ふくら脛はぎまで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来た

など感づいて、往きに臍へその近所が氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鶉いすかの嘴はしと善い方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまつた。初さんに、「もう済んだでしようか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉快だつたが、しばらくすると、例の梯子はしごの下へ出た。水は胸までくらい我慢するがこの梯子には、——せめて帰り路だけでも好いから、遁のがれたかつたが、やっぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀しよくの栈道さんどうと云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、栈道さかさを逆に釣るして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものであ

る。自分はそこへ来ると急に足が出なくなつた。突然脚かつけ氣かかに罹かかつた。そのような心持になると、思わず、腰うしろを後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う氣分が起つたんで、強いて形容すれば、疝せんき氣きに引つ張られたとでも叙じよしたら善かろう。何しろ腰おなが伸のせない。もつともこれは逆さか棧さん道どうの崇たりだと一概に断言する氣でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ御ご機き嫌げんが好いので、相手の寛大な御おな情なさけにつけ上つて、奮発たかの籜ががしだいしだいに緩ゆるんだのもたしかな事實である。何しろ歩けなくなつた。この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁へつぴり腰だ。ちつと休むが

好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云つたぎり、暗い所を潜くぐつて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地
びたへ着けた。アテシコはこう云うときに非常に便利になる。御お
蔭かげで、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚よごれたりする憂うれいがないだ
け、慘みじめ憊うなうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬
く曲つた背中を壁へ倚もたせた。これより以上は横のものを豎たてにす
る気もなかつた。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。
身からだ体が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身
体が怠けるのか、とにかく、双方相あひ合あつて、生せい死しの間に彷徨ほうこう
してたと見えて、しばらくは万事が不明ふめい瞭りょうであつた。始めは、

どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸って見たいような気がしたが、だんだん心が昏くらくなる。と坑あなのなかの暗いのも忘れてしまう。どっちがどっちだか分らなくなつて朦朧もうろうのうちにがったいちゆうわ合体稠和して来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆しゃば気ツキであるから、いくら不透明でも正気は失わない。ちようど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈はげし過ぎて困る自分には——東京にも田舎いなかにもおり終おせない自分には——煩悶はんもんの解熱劑げねつざいを頓服とんぷくしなければならぬ自分には——神経纖維の

端はじの端まで寄つて来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もしかけおち驅落が自滅の第一着なら、この境きょうがい界は自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停ステーション車場である。自分は初さんに置いて行かれた少時しばしの休憩時間内に、はか図らずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆気と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあつた。正気を失わな

いものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動を恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が減却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の差である。その最も淡い生涯の中に、淡い喜びがあつた。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していらろう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったらう。ところが——ここでまた新しい心の活作用に現参した。

というのはいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留つて

いてくれなかつた。動いて来た。油の尽きかかつたランプの灯ひの
ように動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいぜい十のものが、
今は五になつて留まつていた。それがしばらくすると四になる。
三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなければならぬ。
自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれしさを自覚して
いた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚して
いた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違ない。だから理窟りくつか
ら云うと、意識がどこまで降さがつて行こうとも、自分は嬉しいとの
み思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだ
んだんと競せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然と
して暗あんちゆう中から躍おどり出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り

出した。すぐに続いて、死んじや大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開いた。^あ

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通つて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。

眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじや大變だ」までが順々につながつて来て、そこで、ぷつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作になる。^{しよさ}つまり

「死ぬぞ」で命の方向転換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証^{しやうこ}拠には、眼を開いて、身の周囲^{まわり}を見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残っていた。た

しかに残っていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神はだいぎらい大嫌だ。やっぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたままであろうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいよ
うとは夢にも思い浮べなかつた。これだから自殺などはできないはずである。こう云う時は、魂のだんどり段取が平生と違うから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。気をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身かげみにつき添っている——まあ恋人が

多いようだが——そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかつたのは、己^{うぬぼれ}惚の強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかつたんだろう。

そこへ初さんがひよつくり帰つて来た。初さんを見るが早いか、自分の意識はいよいよ明^{めいりよう}瞭^{りよう}になつた。これから例の逆^{さか}棧^{さん}道^{どう}を登らなくつちやならない事も、明日^{あした}から、鑿^{のみ}と槌^{つち}でかあんかあんやらなくつちやならない事も、南京米^{ナンキンまい}も、南京虫^{ナンキンむし}も、ジャンボーも達磨^{だるま}も一時に残らず分つてしまい、そうして最後に自分の墮落^{だつらく}がもつとも明かに分つた。

「ちつたあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登つてやろう」

と云うから、礼を云つて立つてしていると、初さんは景気よく段木だんぎを捕つかえて片足踏ふん掛がけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾ついて来ねえ」

と振り返つて、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になつて、下から見上げると、初さんは登つて行く。猿のように登つて行く。そろそろ登つてくれる様子も何もありません。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思ひ切つて登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲

れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子はしごに託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体が後うしろへ反れる。反れた重みは、両手で持ちこた応えなければならぬから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平ひらと五本の指で、このしめだか高を握らなければならぬ。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇まつくらやみに逆落さかおとしになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰かえんのような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そ

うして熱い涙で眼がいつぱいになった。

二三度 うわまぶた 上 瞼 と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚

はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。

手の甲で擦ろうと思ふが、あやにく両方とも塞がっている。自分

は口惜くやしくなつた。なぜこんな猿の真似をするように零落おちぶれたのか

と思つた。倒れそうになる身体からだを、できるだけ前の方にのめらし

て、梯子に倚もたれるだけ倚れて考へた。休んだと註釈する方が適當

かも知れない。ただ途中で留まつたと云い切つてもよろしい。何

しろ動かなくなつた。また動けなくなつた。じつとして立ってい

た。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ清水しみずが沁み込むのも、

全く気がつかかなかつた。したがって何分過なんぶんたつたのかとんと感じに

乗らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかであるのに、眼だけが霞かすんでくる。いくら瞬まばたきをしても駄目だ。湯の中に眸ひとみつを漬けてるようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。癩かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食い締しばつて、両手で握った段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。——梯子の下では、死んじや大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生しょうがい涯がいにおける心理推移の現象のうちで、もっとも記憶すべき事実である。自分

は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえつて、実際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にしたい。

アテシコを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚よりかかっていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づくけいろ径路を取るのが普通である。ところがその普通の径路を行き尽くして、もうこれがどん

詰づまりだと云う間際まぎわになると、魂が割れて二様の所作しよさをする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切おおぎりの手前まで行って、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確實になる。自分が梯子はしごの下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行ったものが、順路をてくてく引き返す手数てすうを省はぶいて、急に、娑婆しやばの真中に出現したんである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢あった。自

分は初さんの後を追つ懸けて登らなければならない。その初さんは、とつくに見えなくなつてしまった。心は焦る、気は揉める、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。――万事が痛切である。自覚の強度がしだいに劇しくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興の極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはその一つ、――すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特である。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切つた途端に、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分は

これを活かつじよう上じようより死に入る作用と名なづけている。この作用は矛盾のごとく思われるが実際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証しやうこ拠こ発奮して死ぬものは奇麗きれいに死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨うまく死に切れないようだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌いまい々ましい、死んじまえと思つた時は、手を離すのが怖こわくも何ともなかつた。無論例のごとくどきんなどはけつしてしなかつた。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙な精神作用を承しやうとう当とうした。

自分は元来が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かつたから、今まで浮気に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやつ

て見せたいと云う念があつた。短銃ピストルでも九寸五分くすんごぶでも立派に——つまり人が賞ほめてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴けげんの瀑たきまでも出向きたいなどと思つた事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊くるのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目まじめであつたにしても、さほど差し逼せまつてはいなかつたんだらう。しかしこのくらい断乎だんことして、現に梯子段はしごだんから手を離しかけた、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張つていたに違ちがない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔けんかくもあるま

いから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅ぜいたく沢過ぎたようだ。しかしこの贅沢心のために、自分は発作性ほっさせいの急往生を思いとまつて、不ふつつ束かながら今日まで生きている。全く今はの際きわにも弱点を引張つていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心持あと後へ引いて、手の握にぎりをゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだつて冴さえない。待て待て、出てから華巖けいがんの瀑たきへ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊しまつた。曇つた眼が、急に明かあるおむくなつた。カンテラが燃えている。仰向あおむくと、泥で濡ぬれた梯子

段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折させつすれば犬死になる。暗い坑あなで、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鉞あらがねと同じようにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかつても半獣半人の坑夫共に軽蔑けいべつされるのは無念である。是非共登り切つちまわなければならぬ。カンテラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければならぬ。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕あとのつくほ

ど強く握った。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カンテラの灯ひは暗い中を豎たてに動いて行く。坑は層そう一層いっそうと明かるくなる。踏み棄すてて去る段々はしだいしだいに暗い中に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸けん崖がいからは水が垂れる。ひらりとカンテラを翻ひるえすと、崖がけの面を掠かすめて弓形にじいと、消えかかって、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻ひるえす。灯ひは斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外はずれて、がんがらがんの壁が眼まなこに映うつる。ぞつとする。眼まなこが眩くらむ。眼まなこを閉ねむつて、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。

動く手も動く足も見えない。手障足障てぎわりあしぎわりだけで生きて行く。生きて登って行く。生きると云うのは登る事で、登ると云うのは生きる事であつた。それでも——梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登つたのか、天祐てんゆうで登つたのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚さとつた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じや気味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。えらいや」と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子はしごの上でよつぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪^わるかったから途中で休んでいました」
と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困^{わづ}ったろう。途中^{ちゆうちゆう}つて、梯子^{たき}の途中^{ちゆうちゆう}か」
「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日^{あす}は作業^{さぎょう}もできめえ」

この一^{いち}言^{ごん}を聞いた時、自分は糞^{くそ}でも食^{くら}えと思^{おも}った。誰^{たれ}が土^{もぐら}
竜^{もち}の真^ま似^になんかするものかと思^{おも}った。これでも美^{うつく}しい女^{をんな}に惚^ほれ
られたんだと思^{おも}った。坑^{あな}を出^だれば、すぐ華^{けい}嚴^{ごん}の瀑^{たき}まで行くんだと
思^{おも}った。そうして立派^{りつぱ}に死^しぬんだと思^{おも}った。最後^{さいご}に半時^{はんじ}もこんな
獣^{けだもの}を相手^{あいて}にしていられるものかと思^{おも}った。そこで、自分は初^{はつ}さん
に向^{むか}って、簡単^{かんぱん}に、

「よければ上がりましょう」

と云つた。初さんは怪訝けげんな顔をした。

「上がる？ 元気だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲あきめくら目め。人を見損みそくなやがつて」と云いたかつた。しかし口だけは叮嚀ていねいに、一言ひとこと、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やつぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じょうだんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましょう」

と自分はむっとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行つちやいけねえ、後あとから尾ついて来ねえ」

「そうですか」

「あたりめえ当あた前りめえだあな。人つけ。誰が案内を置き去おざりにして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退のけないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折つたり、四つに這はつたり、背中を横よこつ丁ちよにしたり、頭だけ曲げたり、坑あなの恰かつこう好しだいでいろいろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようなのである。畜生中ちゆうばらつ腹はらで急ぎやがるなど、こつちも負けない気で歩き出したが、そこへ行くと、

いくら氣ばかり張つていても駄目だ。五つ六つ角を曲つて、下りたり上つたりあが、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなつた。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄うたう。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠こもつたように打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見ていると云う勢いきおいで、根こんかぎ限り這つたり屈かがんだりしたが、残念な事には初さんの歌がだんだん遠くへ行つてしまふ。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのててててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見けんとう当がついたが、しまいにはそのててても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすが

に茫然ぼうぜんとした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力じりきで日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年ながねん掘荒した坑あなだから、まるで土蜘蛛つちぐもの根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開あいている。滅多めったな穴へ這はい入るとまた腰きり水つかに漬つかる所か、でなければ、例の逆さかさの棧道さんどうへ出そううで容易に踏ふみ込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留とどって、カンテラの灯ひを見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行いったんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならぬ。どんな穴でも上のぼりならば好いとする。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そうして迂路うろついていたら、どこかの作事場さくじばへ出るだろう。

出たら坑夫に聞くとしよう。こう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷まじついていた。非常に気が急せいて息が切れたが、めちやめちやに歩いたために足の冷たいのだけは癒なった。しかしなかなか出られない。何だか同じ路を往ったり来たりするような案排あんばいで、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶつけて割わつちまいたくなつた。どつちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疝かん癩しやくが起つた。どうも歩けば歩くほど天てん井じやうが邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋わらじの底で踏む段々が邪魔になる。坑総体が自分を閉じ込めて、いつまで立っても出してくれないのがもつとも邪魔になる。この邪魔ものの一部へ頭を擲たきつけて、せめて罅ひびでも入

らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華嚴けごんの瀑たきへ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向うから一人の掘子ほりこが来た。ばらの銅あかがねをスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕みを抱だいてよちよちカンテラを揺ゆりながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくつて胸がどきりと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近寄るがものはない、向うでもこつちへ歩いて来る。二つのカンテラが一間ばかりの距離に近寄つた時、待ち受けたように、自分は掘子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼あおん蔵ぞうであつた。この坑のなかですら、只ただ事こととは受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵ちがいに違ちがない。それで口を利きくのが厭いやになつた。こんな奴の癖に

人に調戯からかつたり、黜なぶつたり、辱はずかしめたりするのかと思つたら、なおお道を聞くのが厭いやになつた。死んだつて一人で出て見せると云う氣になつた。手前共に口を聞くような安っぽい男じゃないと、腹の中でたしかに申し渡して擦すれ違つた。向うは何にも知らないから、これは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カントテラは一つになつた。氣はますます焦いら慮つて来た。けれどもなかなか出ない。ただ道はどこまでもある。右にも左にもある。自分分は右にも這入つた、また左にも這入つた、また真直にも歩いて見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少しく途方に暮れている鼻の先で、かあんかあんと鳴り出した。五六歩で突き当つて、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫が

しきりに槌つちを振り上げて鑿のみを敲たたいている。敲くたんびに鉋あらがねが壁から落ちて来る。その傍そばに俵そばがある。これはさつきスノコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰っている。掘ほりこ子が来て担かついで行くばかりだ。自分は今度こそこいつに聞いてやろうと思つた。が肝かんじん心の本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休んで行こうと云う気が起つた。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持つて来いの腰掛になる。自分はどさつとアテシコを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんでい」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳には敲き込まれるように響いた。高い影は大股に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張った、体格の逞しい男であった。顔は背の割に小さい。その輪廓がやや判然する所まで来て、男は留まった。そうして自分を見下した。口を結んでいる。二重瞼の大きな眼を見張っている。鼻筋が真直に通っている。色が赭あ黒い。ただの坑夫ではない。突然として云った。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生

のように輕蔑けいべつしていたのに、——誓ちかって死んでしまおうと覺悟をしていたのに、——大股おほこぶに歩いて來た坑夫こうぶがたちまち恐ろしくなつた。しかし、

「何でこんな所を迷子まごついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意こぎに俵の上へ腰をおろしたんでないと見極みきわめた語調である。

「実は昨夕飯場ゆうべはんばへ着いて、様子を見に坑あなへ這入はいったばかりです」

「一人ですか」

「いいえ、飯場頭はんばがしらから人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちまいました」

「先へ出た？ 手前てめえを置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太ふてえ野郎だ。よしよし今に己おれが送り出してやるから待ってろ」

と云つたなり、また鑿のみと槌つちをかあんかあん鳴らし始めた。自分は命令の通り待っていた。この男に逢あつたら、もう一人で出る気がなくなつた。死んでも一人で出て見せると威張つた決心が、急はどこへか行つてしまつた。自分はこの変化に気がついていて、それでも別に恥かしいとも思わなかつた。人に公言した事でないから構わないと思つた。その後人ごに公言したために、やらないでも済む事、やつてはならない事を毎度やつた。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その内かあんかあんがやんだ。

坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐をかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さっていた。坑夫は旨そうに腹の底まで吸った煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でぼんと払いた。小さい火球が雁首から勢いよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落ちてじゆうと消えた。坑夫は殻になつた煙管をぷつと吹く。羅宇の中に籠つた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利いた。

「御前はどこだ。こんな所へ全体何しに来た。身体つきは、すら

りとしているようだが。今まで働いた事はねえんだろう。どうして来た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、来たんです。……」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、帰るんだとは云わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹の内なかで畜生あつかいにして、口先ばかりていね町ちやう噂うわさにしていたのとはだいぶん趣おもむきが違ちがう。自分はただ洗い攫さらい自分じぶんの思おもひを話してしまわないだけで、話しただけは真面目に話したのである。すこしも裏表はない。腹から町ちやう噂うわさに答こたへた。坑夫はしばらくの間黙もくつて雁首かりづねを眺ながめていた。それからまた煙草を

詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開いた。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使った漢語である。——彼れは坑夫などの夢にも知りようはずがない漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日まで常住坐臥使っていたかのごとく、使った。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張ったなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸を前の方に出して、胡坐の膝へ片手を逆に突いて、左の肩を少し聳して、右の指で煙管を握って、薄い唇の間から奇麗な歯を時々あらわして、——こんな事を云った。句の順序や、単語の使い方は、たしかな

記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。――

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤しい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがいい。青年は情の時代だ。おれも覚おぼえがある。情の時代には失敗するものだ。君もそうだろう。己おれもそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己おれの事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察している。咎とがめやしない。同情する。深い事故わけもあるだろう。聞いて相談になれる身体からだなら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛けたおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、かいきゆう懐旧と云うのか、ちんぎん沈吟と云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑あなの中で、ひとけ人気はこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球めだまに吸いつけられた。そうして彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。

ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はないが、それが基もとで容易ならん罪を犯した。罪を犯して気がついて見ると、もう社会に容いれられない身体からだになつていた。もとより酔すい興きようでした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃みのがさない。おれは正しい人間だ、曲つた事が嫌きらいだから、つまりは罪を犯すようにもなつたんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄すてなければならぬ。功名なげうも抛なげなければならぬ。万事が駄目だ。口惜くやしいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕とらえられなければならぬ。(故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用し

た。しかし自分が悪いおぼえ覚がないのに、むやみに罪を着るなあ、
どうしても己おれの性質としてできない。そこで突つ走つた。逃げら
れるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜もぐり込んだ。
それから六年というもの、ついに日光ひのめを見た事がない。毎日毎日
坑の中でかんかんたた敲いているばかりだ。丸六年敲いた。来年にな
ればもうシキを出たつて構わない、七年目だからな。しかし出な
い、また出られない。制裁の手には捕つらまらないが、出ない。こう
なりや出たつて仕方がない。娑婆しやばへ帰れたつて、娑婆しやばでした所業
は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹
ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪やぶから棒ぼうの質問に、用意の返事を持ち合せなかつたから、はつと思つた。自分の腹はらん中にあるのは、昔むかしどころではない。一二年前から一昨日おとといまで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮さへぎるごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは大抵見み悉つくした。でも出る気にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐おうとを催もよおしそうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗せくつて狭せい所だと思えばそれで済む。身体も

今じや銅あかがねくさ臭くさくなつて、一日もカンテラの油を嗅かがなくなつちや
いられなくなつた。しかし——しかしそりやおれの事だ。君の事
じやない。君がそうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くさくなつ
ちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持って来ても駄目
だ。決心も目的もたつたにさんち二三日で突ツつき殺されてしまふ。それ
が氣の毒だ。いかにも可かわい哀そう想だ。理想も何にもない鑿のみと槌つちより
ほかに使う術すべを知らない野郎なら、それで結構だが。しかし君の
ような——君は学校へ行つたらう。——どこへ行つた。——ええ
？ まあどこでもいい。それに若いよ。シキへ抛ほうり込まれるには
若過わがぎるよ。ここは人間の屑くずが抛ほうり込まれる所だ。全く人間の墓は
所かだ。生きて葬ほうぶられる所だ。一度踏ふん込ごんだが最後、どんな立

派な人間でも、出られつこのないおとしあな 陥おとしあな 穽あなだ。そんな事とは知らずに、大方ポン引びきの言いなりしだいになって、引張られて来たんだろう。それを君のために悲しむんだ。一人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をする。他人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人いちにんだ。が、こうなつちや墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたつて、悔くやんだつて墮落しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親があるか……」

自分はただ一言ひとことあると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業についたらよかろう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよかろう。東京なら東京へ帰るさ。そうして正当な——君に適当な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云つてもここはいけない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたろう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安さんやすと聞きやあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉はこれで終つた。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理非りひにんじよう人情を解しない畜類の発達した化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢つたのは全くの小説であ

る。夏の土用に雪が降ったよりも、坑あなの中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟きせきのように思われた。大晦日おおみそかを越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺ことわざも記憶していたが、窮きわまれば通ずという熟語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだからに思つて、芝居氣を起しては困つていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違ふ。真から一人人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛つうふん忿ひるがの焔ほのおで、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かさされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻ひるがえし得るほどの力をもつて、自分の耳に応こたえた。

しばらくは二人して黙っていた。安さんは一応云うだけの事を云つてしまつたんだから、口を利きかないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいては安さんに済まない。心底しんそこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのには山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも強しいて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇りょうはしの両端がむずむずして、小鼻がびくついて来る。やがて鼻と口を塞せかれた感動が、出端でを失つて、眼の中にたまつて来た。睫まつげが重くなる。瞼まぶたが熱くなる。大おおに困こつた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐あぐらをかいたまま、黙っていた。そ

の時次の作事場さくじばで鉋あらがねを敲たたく音がかあんかあん鳴った。今考えると、自分と安さんが黙然もくねんと顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだか、それを正確に知って置きたかった。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山やまの中では有ろうはずがない。日の照らない坑あなの底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨おしえを垂れて、尊たつとい涙を流した舞台があろうとは、胡坐をかいて、黙然と互に顔を見守っていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草たばこを呑み出した。ぷかりぷかりと煙けむが出た。その煙が濃く出ては暗がりくらがりに消え、濃く出ては暗がりくらがりに消える間に、自分はようやく声こゑが自由になった。

「ありがたいです。なるほどあなたのおつしやる通り人間のいる所じゃないでしょう。僕もあなたに逢うまでは、今日限り銅山を出ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切つたら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやつぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが拵えてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云つて毫も貰う気は起らなかつた。

きのうはんばがしらごうりよく
昨日飯場頭の合力を断つた時の料簡りようけんと同じかと云うと、それとも違う。昨日は是非貰いたかつた、地平じびたへ手を突いてまで貰いたかつた。しかし草鞋わらしせん銭を貰うよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂きたいところを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰いたくない。好意を空むなしくすると云う点から見れば、貰わなければ済まないし、坑夫をやめるとすれば貰う方が便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかつた。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰つては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるといふ念きんざから萌もしたものでらしい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、自分の体面そこなおそれを損そう虞そがある。向うの好

意を享^うけて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらも悦^{よろこ}ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫^{みだ}りに自己の利得のみを標^{めやす}準^すに置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと言^う事^{こと}実上の証明を与えるに忍^{しの}びなかつた。年が若いと馬鹿な代りに存^{ぞん}外^{がい}奇^き麗^{れい}なものである。自分は

「旅費は頂きません」
と断^{ことわ}つた。

この時安さんは、煙草を二三^{ふか}ぶく吸^すして、煙^{きせる}管^つを筒^つへ入^いれかけ
ていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云つたんで、自分は非常に気の毒になった。もしやるから貰つて置けとでも強いられたならきつと受けたに違ない。その後ご氣をつけて、人が金を貰うところを見てみると、始めは一応辞退して、後では大抵ふところ懐へ入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないんだらうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりや失敬した」と云つてくれたんで、自分はこの形式におちい陥らずに済んだのはありがたかった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだらうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍にぶつた際だから、ことによれば、旅費だけでも溜めた上、帰る事にしよう云う腹もあつ

たんで、

「よく考えて見ましょう。いずれその中うちまた御相談に参りますか
ら」

と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送ってやろう」

と煙草たばこ入いれを股引ももひきへ差し込んで、上から筒服つつぽうの胸かぶを被かせた。

自分はカンテラを提さげて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑あなは存

外登り安かった。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん

這はいになったら、かなり天井てんじょうの高い、真直まっすぐに立って歩ける

ような路へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰

めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える

所で留った。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついで上がると、軌道レールの敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくっちゃあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があつたら来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這はい入った。振り向いて、一ひとくち口礼を云った時は、もうカンテラが角を曲っていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰って来る。途中でいろいろ考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行つたら、今頃は何に成っているか知らないが、どうしたって坑夫よ

り出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪いんでなくって、社会が悪いのかも知れない。自分分は若年じやくねんであつたから、社会とはどんなものか、その当時め明瞭いりように分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌ろくなもんじやなかうと考へた。安さんを鼻屑ひいきにするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思つていた。その人間がなぜ安さんのような好い人を殺し

たのかなおさら分らなかつた。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかつた。ただ安さんがかわいそう可哀想であつた。できるなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手に、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差さしつかえ支ない。安さんは人間から殺されて、仕方なしにここに生きているのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が気の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さんも達磨だるまに金を注つぎ込むのかしら、坑あなの中で

いちろくしょうぶ
一六 勝負をやるのかしら、ジャンボーを病人に見せて調戲からかうのかしら、女房を抵当に——まさか、そんな事もあるまい。昨日きのう着き立ての自分を見て愚弄ぐろうしないものないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心しんまでの坑夫じゃない。それでも墮落したと云った。しかもこの墮落から生しょう涯がい出る事ができないと云った。墮落の底に死んで活いきてるんだと云った。それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてかんかんたたしている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になった

上として、できるだけ急ぎ足で帰つて来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇やんだ。空はまだ曇っているが、濡ぬれる氣遣きづかいはない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉うれしい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦すりながら、いそいそ近づいてくると、初さんは奇怪けげんな顔をして、

「やあ出て来たな。よく路みちが分つたな」

と云つた。自分が案内につけられながら、他ひとを置き去りにして、何とかして何とか、ててててと云う唄うたをうたつて、大いに焦じらして置いて、他おまごが大迷まごつきに、迷まごついで、穴の角かどへ頭をぶつつけて割つて見ようとまで思ったあげく、やつとの事で安さんの御おなさ

情^けで出て来れば、「よく路が分つたな」と空とぼけている。その癪^{こわ}親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算^{もくろみ}である。自分は石へ腰を掛けて薄笑いをしているこの案内の頭の上へ唾液^{つばき}を吐きかけてやろうかと思つた。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留^{とど}まらなくつちやならない身体^{からだ}である。唾液を吐きかければ、喧嘩^{けんか}になるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にスノコの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐^{かひ}がない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、どうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨くうまやったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけで、それより以外に賞める価値ねうちのある所作しよさじゃないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲くせもの者だと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉のどの先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料りょうけん簡かんであつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍そばまで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまつている。責任のあ

る自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出してしまつたと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭に証拠だてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵を打つだろう。無責任が露見るのは痛快だが——自分はけつして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。——そこまでは痛快だが、敵打は大に迷惑する。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾ついて行つた。昨日親方に逢あつたのは飯場はんばだが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取つて平ならした地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変わらず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭はんばがしらが顔を出した。米利安めりやすの襯衣シヤツの上へどてらを着たままである。

「帰けえつたか。御苦労だつた。まああつちへ行つて休みねえ」

と云うが早いか初さんは消えてなくなつた。後あとは二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つたまま、談話はなしをした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりや大変だ。随分ひどかったでしょう。それで

……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけ

に二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭いやでたまらない。飯場へ帰つてから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかつた。こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がつたのかと思うと、身体からだも魂も塩かを懸かけた海鼠なまこのようにたわいなくなつた。その時飯場頭はようやく口を利きいた。奇麗きれいさっぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰つてね。健康の証明書を持って来なくっちゃいけない。——今日と——

—今日は、もう遅いから、明日あしたの朝、行つて見て貰つたらよからう。——診察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたらう。あの青いペンキ塗りの家うちだ。じゃ今日は疲れたらうから、飯場へ歸つて緩ゆっくり御休み」

と云つて窓を閉たてた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯場へ引返した。緩ゆっくり御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、緩ゆっくり寝られるくらいなら、こんなに苦しみはしない。起きていれば癡どうもうぐみ猛組、寝れば南京虫ナンキンむしに責められるばかりだ。たまたま飯の蓋ふたを取れば咽喉のどへ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた以上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちはいる。シキの人間がみんな南京虫

になつても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えである。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場へ帰つて、二階へ上がった。上がると案のじよう大勢囲炉裏の傍に待ち構えている。自分はいさくさした方が、できるだけ何喰わぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐つた。すると始まつた。皮肉だか、冷評だか、罵詈雑言だか、滑稽だか、のべつに始まつた。

一々覚えてゐる。生涯忘れられないほどに、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覚えてゐる。しかし一々繰返す必要はない。まず大体昨日と同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢いたくなつた。例の夕食を我慢して二杯食つて、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャンボの通つた石垣の間を抜けて、だから坂の降り際ぎわを、右へ上ると斜はすに頭の上に被かぶさつてゐる大きな槐えんじゆの奥にある。夕暮の門かどぐち口を覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒つつぽうつぽうの掃除をしてゐた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待つてたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さああが上れ」

見ると安さんは唐とうぎん棧せんの着物まめしほりに豆まめ絞しほりかななにかの三尺を締め
て立っている。まるで東京の馬べつとう丁ちやうのような服装なりである。これに
は少し驚いた。安さんも自分の様子を眺ながめて首かしを傾かしげて、
「なるほど東京を走つたまんまの服装なりだね。おれも昔はそう云う
着物を着たこともあつたつけ。今じゃこれだ」
と両りよう袖そでの衿ゆきを引つ張つて見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑つていた。安さんは、
「ハハハハ根こんじよう性じやうはこれよりまだ墮落だらくしているんだ。驚おどろいちゃ
いけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑つて

立っていた。この時分は手持無沙汰てもちぶさたでさえあればにやにやして済ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遥はるか世馴よなれている。この体ていを見て、

「さつきから来るだろうと思つて待つていた。さあ上あがれ」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救たすける方の側がわだと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上つて見た。部屋はやつぱり広いが、自分の泊つた所ほどでもない。電気灯は点ついている。囲いろり炉裏もある。ただ人数にんずが少い、しめて五六人しかない。しかも、それが向うかたまに塊かたまつてゐるから、こつちはたった二人である。そこでまた話を始

めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆あきれている。

「あなたのおっしやつた事は、よく分つています。しかし僕だつて、すいきよう酔興すいきようにここまで来た訳じゃないんですから、帰るつたつて帰る所はありません」

「じややつぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」

と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に嘔ふき出した。

「冗談云つちやいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅ぜいたく沢じゃねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れば代つて上げたいと思います」

と至極しごく真面目に云うと、安さんは、また嘔ふき出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕ゆうべも今日も散々いじめ苛責いじめられました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵かたきを打ってやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大變心丈夫になった。なおなお留とどまる気になった。あんなどうもう獯猛もこつちさえ強くなりやちつとも恐ろしかないんだ、じつば心じつぱこころとからげ

十把一束に罵倒するくらいの勇氣がだんだん出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取つてくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、氣の毒そうな顔をして、呆あきれ返つていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さいらないと、いにくいですから」
「せっかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけ
ない」

自分は謹つつしんで安さんの旨むねりようを領うけとりした。実際自分もその考えでいた
んだから、これはけつして御交際おつきあいの挨拶あいさつではなかつた。それ
からいろいろな話をしたあにがシキの中の述懐と大した変りはなかつ
た。ただ安さんの兄あにさんが高等官になつて長崎にいと云う事を
聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身に
なつても、定めし苦しいだろうと思ふにつけ、自分と自分の親と
結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さん
が出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと

云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出てい
る。路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襯衣シャツを通
して、蒲鋒形かまぼこなりの月の光が肌まで浸しみ込んで来るようだ。両袖を
胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そび
やかして歩ある行き出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよ
りだいぶん豊かになつた。何の当分のうちだ。馴なればそう苦に
する事はない。何しろ一万余人もかたまつて、毎日毎日いっしょ
に働いて、いっしょに飯を食つて、いっしょに寝ているんだから、
自分だつて七日も練習すれば、一人前いちにんまえに墮落する事はできるに
違ちがない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに

出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧いて出たまでで、墮落の内容を明かに代表していなかったから、別に恐ろしいとも思わなかった。それで、比較的元気づいて飯場へ帰つて来た。五六間手前まで来ると、何だかわいおい云っている。外は淋しい月である。自分は家の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入るのが厭になつた。月を浴びて外に立っているのも、つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらいたくなつた。一步引き返して見たが、あんまりだと気を取り直して、のそのそ長屋へ這入つた。横手に広い間があつて、上り口からは障子で立て切つてある。電気灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中か

ら出る。自分は下駄げたを脱いで、足音のしないように、障子の傍そばを通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金きんさんが平たく煎餅せんべいのようになつて寝ている。それから例の帆木綿ほもめんにくるまつて、ぶら下がつてる男もいる。しかし両方とも極めて静かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然ぼくぜんとしてただ広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみ着のまままで、ごろりと横になるか、または昨夕ゆうべの通り柱へ倚もたれて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱へ倚より懸かかるのは苦しい。どうかして布団ふとんを敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫ナンキンむしがいても

寝られるかも知れない。それに蒲団ふとんの奇麗きれいなのを選よつたらよかるう。ことさらに日によつて、南京虫の数が違ちがわないとも限かるまい。といろいろな理窟りくつをつけて布団を出して、そうつと潜もぐり込んだ。

この晩の、経験けいけんを記憶きおくのまま、ここに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿ばかだと吹ふ聴いする事ことになるばかりで、ほかに何の利益りやくも興味きょうみもないからやめる。一ひと口くちに云いうと、昨夜ゆうべと同じような苦くるしみを、昨夜ゆうべ以上に受うけて、寝ねるが早はやいか、すぐ飛とび起たちままつた。起おきた後あとで、あれほど南京虫なんきんちゅうに螫さされながら、なぜ性しょうごり懲ちやうもなくまた布団ふとんを引ひつ張はり出だして寝ねたもんだらうと後悔こうかいした。考かんえると、全ぜんくの自業自得じごうじとくで、しかも常識じょうしきのあるものなら誰たれでも避よけられる、また避よけなければならぬ自業自得じごうじとくだから、

我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭いやになつて、布団の上へ胡坐あぐらをかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫しりされた。臀ももと股ひざがしらと膝ひざがしら頭頭が一時に飛び上がった。自分は五位いさぎ鷲じゆのように布団の上に立つた。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折つて、裸の身体中所嫌わず、ぴしやぴしや敲たたき始めた。それから着物を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚よりかかつた。家うちが恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入はいつてる更紗さらしきの布団と、黒天鷲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かつた中形の搔捲かいまきが恋しくなつた。三十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲を

懸^かけて、暖^{あつ}たかにして楽々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後^{のち}は、机を据^すえたまんま、空^{から}ん胴^{どう}にしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲も、畳んだなり戸棚にしまつてあるに違ない。もつたいないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京虫に食われないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。羨^{うらや}ましい。——それとも寝られないで、のつそつしているかしらん。父は寝られないと疝^かん^{しやく}を起して、夜中に灰吹をほんぽん^{たた}敲くのが癖だ。煙草^{たばこ}を呑むんだと云うが、煙草は仮^か託^{こつ}で、実は、腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦^に々な^{がに}しい^{せが}俸^れだと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の余り

眼を覚まして敲いてるか。どつちにしても気の毒だ。しかしこつちじゃそれほどにも思っていないから、先方さきでもそう苦しちやまい。母は寝られないと手ちようず水ずに起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧さんをおろすのを忘れて、翌朝あくるあさよく父に叱られている。昨夜も今夜もきつと叱られるに違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている——どうしても寝ている。自分のいる前では、丸くなつたり、四角になつたりいろいろな芸をして、人を釣つてゐるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生へいせいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけつして出て来ないから、始めは不思議に思ったが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなければならな

いのは、よッほどの因果だ。随分憎らしいと思うが、憎らしいと思いつつもやッぱり惚れ込んでいるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちらちらする。怪しからぬ顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ気の毒だ。しかしこつちで惚れた覚もなければ、また惚れられるような悪戯をした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくなくても仕方がない。気の毒がる事は、いくらでも気の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不断の白い飯も虫唾が走るように食いたいが、それよりか南京虫のいな床へ這入りたい。三十分でも好いからぐっすり寝て見たい。そ

の後あとでなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚さめた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行って、顔を洗って、南京ナンキン米まいを食う。万事きゆう昨日の通りだから、省はぶいてしまう。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日おととい山を登って来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道も家うちも間違えようがない。飯場はんばを出て二丁ばかり行くと、すぐ道端みちばたにある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さもかなりだけに、獐どうもう組ぐみとはまるで不釣合である。野蛮人が病気をするんでさえずるに不思議なくらいだのに、病気に罹かかったものを治療してやるため

の器械と薬品と医者と建物を具そなえつけたんだから、世の中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合つて、小学校を建てて子弟を通学させてるようなもんだ。文明と蒙も昧うまいの両極端がこのペンキ塗の青い家の中で出逢であつて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますびんびん蒙昧になつてくる。下手へたに食くい違つた結果が起るもんだ。と考えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺ながめている。せつかくの考えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩くずれてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように獯猛の極致を尽している。あれじゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで

思つた。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈いたような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色は晴れがましいうちに湿とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼な色が笑み割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。昨夕と今朝とはほとんど十五度以上も違うようである。道傍に、たつた一つ蒲公英が咲いている。もつたないほど奇麗な色だ。これも獯猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ擦れに五六間続いている。

る突き当りに、診察室と云う札が懸^かつて、手前の右手に控所と書いてある。今云つた一間幅の廊下を横切つて、控所へ這^{はい}入ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子^{ガラス}窓^どには受附と楷書で貼^はりつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙^{かみきれ}片を出すと、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片を受取つて、ありもしない眉^{まみえ}へ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺^{なが}めた上、

「こりや御前か」

と、さも横^{おうふう}風に云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、こう自分を軽^{けいべつ}蔑するんだか不平に堪^たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいきょうのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶あいさつが足りないと言わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれつ切り口を結んで立っていたもんだから、
「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸ガラスどを締めて出て行つた。草履ぞうりの音がする。あんなにばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰つて来ない。ぼんやりしていると、眼の前にジャンボーが出て来た。金さんきんがよつしよいよつしよいと担かつがれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何のために薬を盛つて、患者を施療せりよう

するの、ほとんど意義をなさない。こんな体裁ていさいのいい偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジャンボーは囃はやしたいだけ囃す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭重ていちょうの至りである。

「おいあつちへ廻れ」

と突然受附の声が出た。見ると受附は硝子窓の中に威丈高いたけだかに突立って、自分を眼下げんげに睥睨へいげいしている。自分は控所を出た。右へ折れて、廊下伝いに診察場へ上がったら、薬の臭においがぶんとした。この臭かを嗅ぐと等ひとしく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んでここの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命うんめいというんだらう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を

知ってるだけで意味は分らなかつた。意味は分つても、納得がなつとくむずかしかつた。西洋人が筍を想像するたけのこように定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う実際と、人間の獸類たる坑夫の住んでいるシキとを結びつけて、二三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもてあそもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元來この

椅子いすに腰を掛けている本人からしてが、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭めいりょうに見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当けんとうがつかない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚よつて、敷物と、洋卓テーブルと、薬瓶くすりびんと、窓と、窓の外の山とを見廻した。もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画えと見えるだけで、その他ほかには何物をも認める事ができなかつた。

そこへ戸を開けて、医者があられた。その顔を見ると、やっぱり坑夫タイプの類型である。黒のモーニングしまに縞ズボンの洋袴えりを着て、襟えりの外あごへ顎あごを突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云った。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内なかで云うべきほどの敬意が籠こもっていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業って別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄やっかい介かいになっていました」

「親の厄介やっかいになっていた。親の厄介やっかいになって、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視^みた上、いきなり自分の鼻を撮^{つま}んだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今度^{こんだ}口を塞^{ふさ}ぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこか悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片かみきれへ、何か書いて抛り出すように自分に渡した。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の下地したじである。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭においを嗅いで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいよいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金きんさんのようによつしよいよつしよいでジャンボーを見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャンボーになって、それから思う存分はや嘔し立てられて、敲たたき立てられ

て、——もつとも新参だから囃してくれるものも、敲いてくれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界がのべつ、のつぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢きたないものと感じていたが、かように万物を色の変化と見ると、穢きたないも穢きたなくないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分が懐ふところ手てをしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けごんの瀑たきなどへ行くのは面倒になつた。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきを

せくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に吹き払われるまでは、ここに居るのが、一番骨が折れなくて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であった。さつきはもつたいないほど美しい色だと思ったが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まって、見ていたが、やっぱり美しくない。それからまたあるき出した。だらだら坂を登ると、自然と顔が仰向あおむきになる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖ほおづえを突いて、自分を見下みおろしている。さつきまではあれほど厭いやに見えた顔がまる

で土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎にくらしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来たただの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいを行くような心持で、親方うちの家までやって来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがないんだから、平生へいぜいならばと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械のように挨拶あいさつをすると、娘は片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父おとつさん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭はんばがしらの娘だなど合点がてんしたが、ただ合点したままで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行つて来ました」

「健康診断を貰つて来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやつたらうかと、始めて気がついた。

「持つてるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持っていたから、皺しわを伸して親方に渡した。

「気管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりや困ったな。どうするい」

「やっぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするったって、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困ったな。しかしせつかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになって、はんば飯場へ帰って来た。

その晩は平気で囲炉裏いろりの側に胡坐そばをかいていた。坑夫共が何と云つても相手にしなかつた。相手にする料りょうけん簡かんも出なかつた。いくら騒いでも、愚弄からかつても、よしんば踏んだり蹴けたりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団ふとんは敷かなかつた。やはり囲炉裏いろりの傍そばに胡坐そばをかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝うたたねをした。囲炉裏へ炭を継つぐものがないので、火の気がだんだん弱けくなって、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟えりの所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいつぱいあつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだらうと思つて、また内へ這はい入いつた。金きんさんは相変らず平たくなって寝ている。金

さんはいつジャンボーになるんだらう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだらう。安さんは六年このシキに這入つてると聞いたが、この先何年^{あらがねたた}鉞を敲くだらう。やっぱりしまいには金さんのように平たくなつて、飯場の片隅^{かたすみ}に寝るんだらう。そうして死ぬだらう。——自分は火のない囲炉裏^{はた}の傍に坐つて、夜明まで考えつづけていた。その考えはあとから、あとから、仕切り^{しき}なしに出て来たが、いづれも干^ひ枯^{から}びていた。涙も、情^{なさけ}も、色も香^かもなかった。怖^{こわ}い事も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探し

たがどうも思わしいところが無いんでね、——少し困ったんだが。とうとう旨い口を見附けた。飯場の帳附だがね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやってたくらいだが、せつかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができればようと思うが」

「はありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋だ、やや豆だ、ヒジキだつて、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んで貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取っ

たと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。——なに ちからわざ 力業 じゃないから、誰でもできる仕事だが、知つての通りみんな無筆の よりあい 寄合だからね。君がやってくれるところこつちも大変便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御気の毒だ。月に四円だが。——食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかつた。ようやく安心したとまでは もとよ 固り行かなかつた。自分の鉾山における地位はこれ

でやつときまつた。

翌あくるひ日から自分は台所の片隅に陣取つて、かたのごとく帳ちようつ

附けを始めた。すると今まであのくらい人を軽蔑けいべつしていた坑夫

の態度ががらりと變つて、かえつて向うから御世辞を取るように

なつた。自分もさつそく墮落けいこの稽古なを始めた。南京米ナンキンまいも食つた。

南京虫ナンキンむしにも食われた。町からは毎日毎日ポン引びきが椋鳥むくどりを引張

つて来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうち

で、菓子を買つては子供にやつた。しかしその後のち東京へ帰ろうと

思つてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に

勤めた。そうして東京へ歸つた。——自分が坑夫についての経験

はこれだけである。そうしてみんなな事実である。その証拠には小

説になっ
ていな
いん
でも
分る。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年1月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年4月13日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

坑夫

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>